

野芥遺跡 2

野芥遺跡群第4次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集

1998

福岡市教育委員会

野芥遺跡 2

野芥遺跡群第4次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集

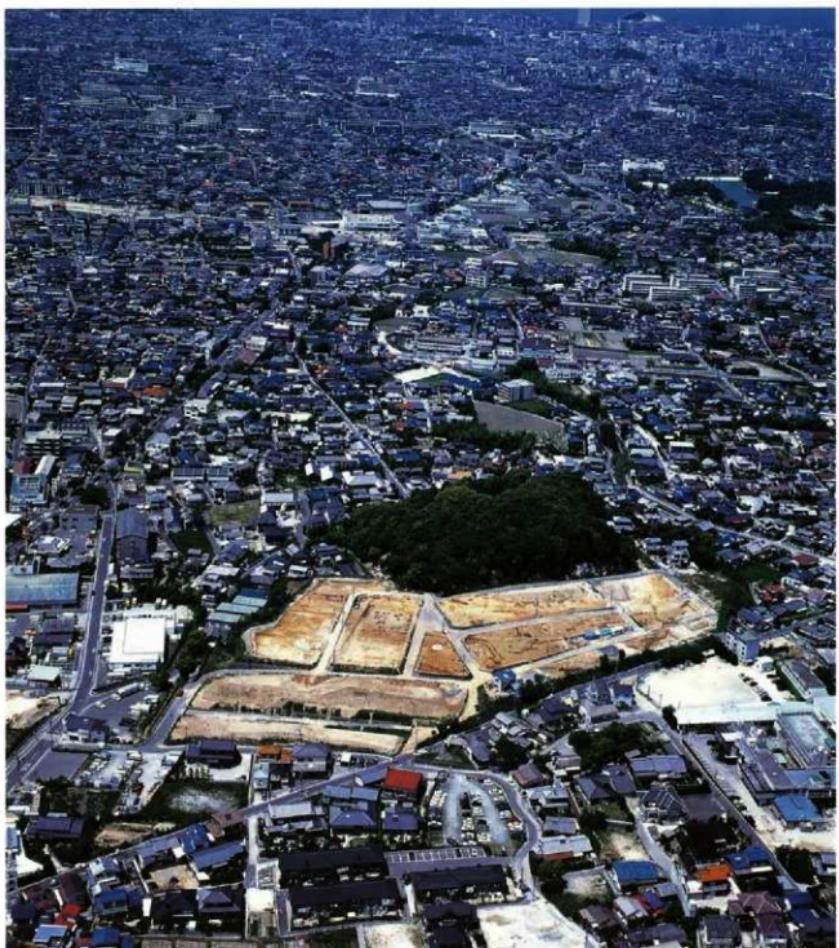


遺跡名	遺跡略号	調査番号
野芥遺跡群	NOK-4	9450

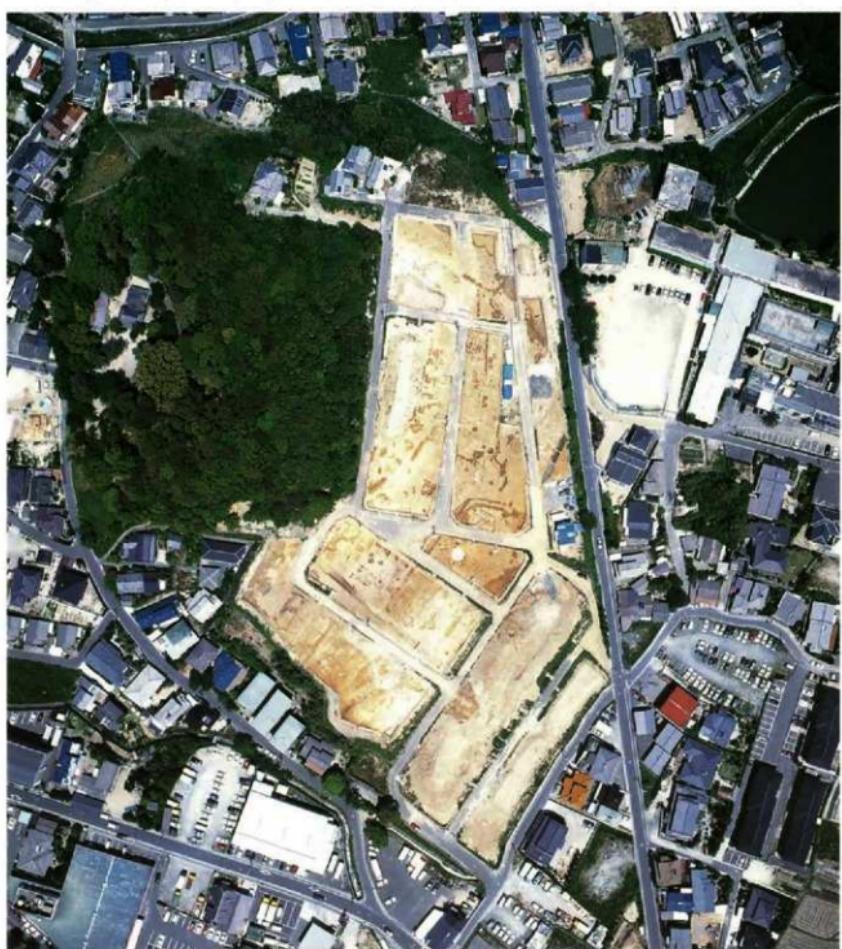
1998

福岡市教育委員会

卷頭図版 1



卷頭図版2



序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されています。本市におきましてはこの保護に努めているところであります。

本書は早良区野芥における市営野芥住宅の建て替え事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、当地域の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。学術的研究、埋蔵文化財保護のご理解に僅かでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が市営野芥住宅の建て替え事業に伴い実施した野芥遺跡群第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は磁北方位である。
3. 遺構は呼称を記号化し竪穴住居をSC、掘建柱建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土壙墓をSR、土坑をSK、その他不明遺構をSXとした。また番号は各地区で柱穴を4桁、それ以外の遺構を3桁の通し番号で付した。
4. 本書に掲載した遺構の実測は調査担当者のほか、学生、作業員の方々の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺物の実測は調査担当者のほか、井上義也、中河秀崇が行った。
6. 本書に掲載した遺構、遺物の製図は調査担当者のほか、濱石正子、撫養久美子が行った。
7. 本書に掲載した写真は調査担当者が撮影し、全体写真は有限会社空中写真企画による。
8. 本調査に関わる図面、遺物、写真等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
9. 本書の執筆は常松幹雄、屋山洋、中村啓太郎を行い、編集は常松、屋山の協力を得て中村が行った。

本　文　目　次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の組織	1
II. 位置と環境	2
1. 位置と環境	2
2. これまでの調査	2
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. A・B区の調査	5
3. C区の調査	17
4. D区の調査	37
5. E区の調査	39
6. F区の調査	45
7. G区の調査	51
8. H区の調査	57
9. I区の調査	61
10. その他の出土遺物	75
11. おわりに	84

I. はじめに

1. 調査に至る経過

1994年6月27日、福岡市建築局住宅部住宅改良課より市営野芥住宅建て替えのための埋蔵文化財事前審査申請書が埋蔵文化財課に提出された。これを受けた埋蔵文化財課では試掘調査を行い審査対象地のほぼ全域に古代を中心とする遺構の存在を確認した。この結果をもとに協議を重ねたが、建築建物が高層で基礎部分が杭打ちを作つたため現状での保存は不可能であるという結論に達し、記録保存による発掘調査を行うことになった。調査期間は7ヵ月設定され、1994年11月7日より開始し、1995年8月12日に無事終了した。

2. 発掘調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会文化財部
調査総括	埋蔵文化財課 課長 折尾学（前任） 荒巻輝勝（現任）
	第1係長 横山邦繼（前任） 二宮忠司
庶務担当	西田結香 浅原千晶（前任） 河野敦美
調査担当	常松幹雄 尾山洋 中村啓太郎
調査員	澤下孝信 濑戸啓治 坂本憲昭
作業員	井上八郎 加島定次郎 稲所通泰 橋良平 徳永洋二郎 烏井原良次 中村宏 長島光儀 原美晴 平野良雄 広瀬梓 船越道人 細川友喜 堀本慶四郎 横尾泰広 吉川順岳 青柳寿子 青柳美智子 石橋マサ子 伊藤ミドリ 井上ヒデ子 井上ムツ子 因ヨシ子 牛尾二三子 鬼塚友子 海津宏子 川間涼子 坂口和子 坂口加代子 倉光アヤ子 栗木和子 小柳和子 坂原美佐子 高橋茂子 岳美保子 橋知子 中園登美子 鶴山千鶴子 長谷川律子 土生喜代子 土生ヒサヨ 土生ヨシ子 百武照子 平野ミサオ 満田雅子 三谷朗子 三好道子 山西人美 結城千賀子 結城信子 脇坂レイコ 脇坂由美子 和田裕美子 青木秀雄 阿比留治 池健助 岩見敏子 牛尾秋子 川嶋ツキエ 懸慶トミ子 山口タツエ 緒方シマヨ 辻節子 山尾タマエ 山田ヤス子 西嶋彰子 平川富美子 平川伸子 平川史子 平川英子 吉岡勝野 鶴田喜美江 鶴田佑子 岡部喜久美 金子ヨシ子 池田靖治 井上隆明 太田寿和 川畠嗣歲 久保山勝弘 椎葉亮一 柴藤裕志 高山義克 日高智春 平川朋和 松下拓郎 八尋孔兵 大穂栄子 大穂アサ子 高木陽子 牧之口豊子 永末京子 有吉千栄子 池田礼子 柴藤理恵 鶴田葉子 横崎多佳子 松下節子 中山鞠子 是田敦 井上義也 中河秀崇 池田由美 高橋美奈子 本田枝利 山本幸子 米倉秀紀 池田裕司 堀本義嗣 山口亨 星野恵美
調査協力	

II. 位置と環境

1. 位置と環境

野芥遺跡群（1）は福岡市早良区干隈から野芥にかけて所在する南北約1600m、東西約300mに広がる旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。これまで調査が少なく、また調査面積も少なかつたため遺跡の性格がつかみにくかったが、外環状道路建設に伴う調査を契機に次第に様相が分かりつつある。

今回報告する第4次調査地点は油山から西へ向かって派生する丘陵先端に独立状に存在する丘陵、標高約28~35mの南斜面に立地し、遺跡群の南部に位置する。今回の調査の中心となる古代から中世について、文献によると野芥の名は古くは古代において筑前国早良郡七郷のひとつ「能解郷」として現れる。中世においては莊園名として「野介莊」と見える。

さて周辺の遺跡について見てみると、当該遺跡群に接するように密に存在している。東にはクエゾノ遺跡、クエゾノ古墳群（2）が存在し、調査された1号墳は前方後円墳を指向した特異な墳丘や埋葬形態が指摘されている。飯倉日遺跡、その範囲内に梅林古墳（3）が存在し、集落、壇棺墓地の一部と古墳が調査され、5世紀後半に築造された全長約25mの前方後円墳で、主体部は初期横穴式石室を有することが確認されている。その東には北から連なる飯倉A~G遺跡（4)~(10)があり、D遺跡では弥生時代後期後半以降の小型彷彿鏡の鉢型を検出している。南東部は西油山がひかえ、駄ヶ原古墳群A~H群（11)~(18)、大谷古墳群（19）、影塚古墳群（20）、霧ヶ谷古墳群A~C群（21)~(23)、西油山古墳群A~H群（24)~(31)、山崎古墳群A~C群（32)~(34)等の後期古墳群が集中する。北部にはやや離れて、原遺跡群（35）、弥生時代の拠点集落のひとつである有田遺跡群（36）が存在する。西には接して野芥大蔵遺跡（37）、古墳時代の水利施設が検出された免遺跡群（38）、古墳時代から中世の集落である次郎丸高石遺跡（39）、弥生時代～中世の集落である次郎丸遺跡、中世の拠点的な集落である田村遺跡群（40）が存在する。南西には四箇遺跡群（41）等が存在する。

※番号は周辺遺跡分布図の番号と一致する。

2. これまでの調査

第1次調査 竪穴住居跡、土坑、溝などを検出した。

第2次調査 古墳時代後期の竪穴住居跡4棟、溝1条、奈良時代の溝1条、古墳時代の掘建柱建物2棟を検出した。

第3次調査 2面の調査。弥生時代の袋状貯藏穴3基、土坑1基、古代の溝1条、柱穴多数を検出した。

第4次調査 本報告である。

第5次調査 2面の調査。上面で竪穴住居3棟、掘建柱建物2棟、土坑、溝、柱穴群、下面で溝、足跡群を検出した。

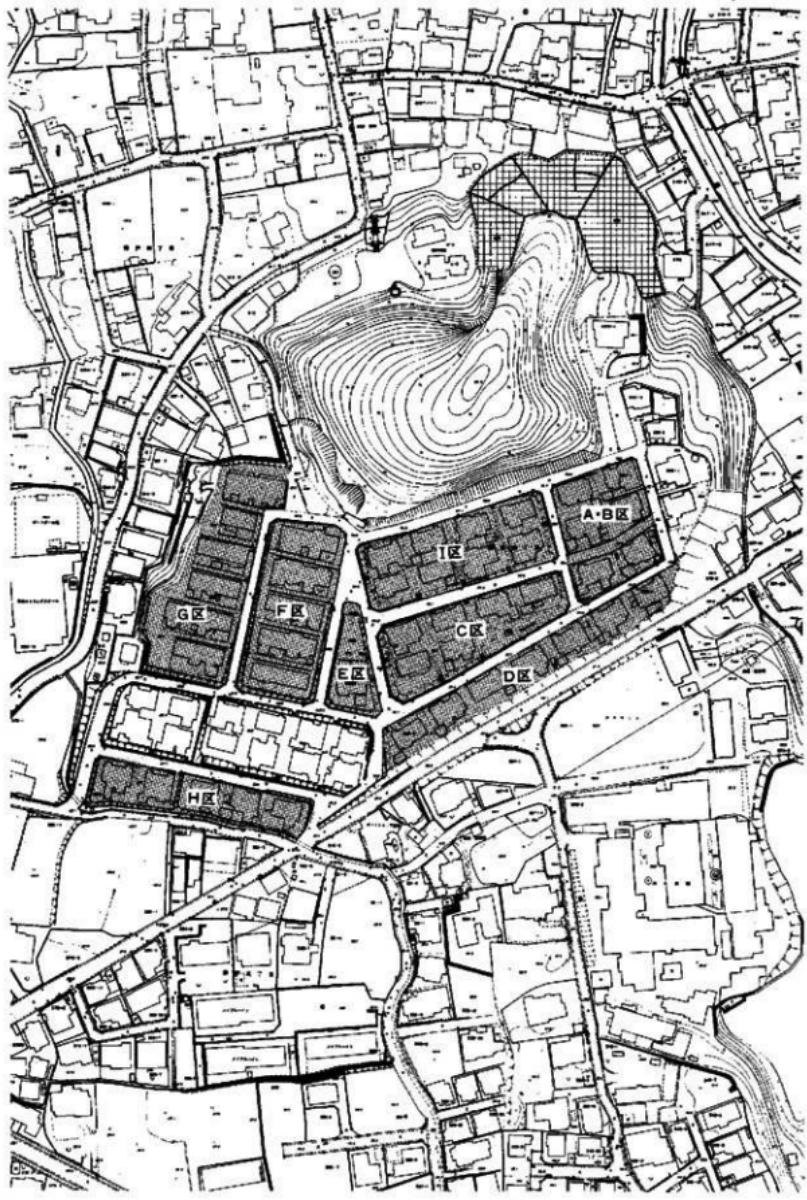
第6次調査 近世以降の旧河川1条を検出した。

第7次調査 中世後期の柱穴群を検出した。

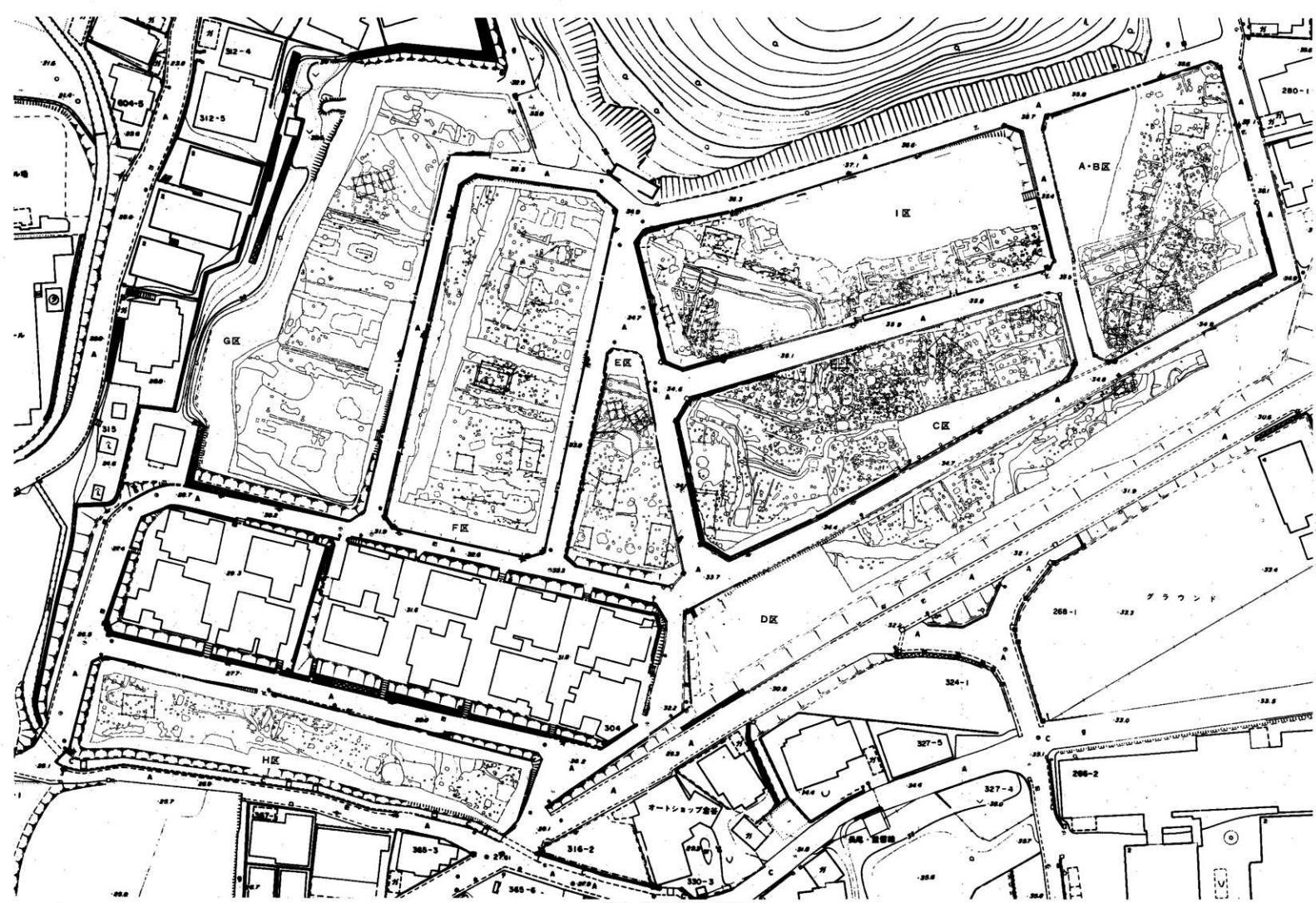
第8次調査 古墳時代の溝2条、土坑2基、鎌倉時代の土坑1基、時期不明の溝2条を検出した。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 第4次調査区 (1/2,000)



第3図 第4次開発区概要図 (1/600)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査は市営住宅建て替えに伴うもので事業地全域が調査対象であった。しかし、市営住宅の北側に一般住宅があり、その生活道路を確保するために市営住宅内の道路を残さなければならないこと、また道路面がかなり切り下げられており遺構は消滅していると考えられたことから調査は道路に区切られた各ブロックごとに行うことになった。各ブロックは便宜的に北東からA～I区とした。E・F・G区とH区の間は本調査途中で行った再試掘調査の結果、遺構がほとんど確認されず本調査を行わなかったためあえて地区名は付さず、廃土置き場の一部とした。またI区は当初、遺構は存在しないものと考えていたが、C区の調査中に遺構が北側に広がることが確認されたため調査途中で地区名を追加した。

調査はD区からスタートし、H、C、A、B区の順に調査をすすめた。遺構面までは重機で掘削を行い、遺構面からの精査、掘削作業を人力で行った。

遺構面までの基本層序は概ね、盛土、暗緑灰粘質土、暗茶褐色粘質土（遺物包含層）となり、遺構面である褐色粘質土となる。

各区の調査面積はA・B区1135m²、C区1541m²、D区667m²、E区499m²、F区1614m²、G区1234m²、H区737m²、I区1097m²で都合、8524m²である。

検出遺構は弥生時代の竪穴住居跡、土坑、古墳時代の竪穴住居跡、掘建柱建物、土坑、柱穴群、古代の掘建柱建物、溝、土坑、柱穴群、中世の庭園状遺構？、掘建柱建物、溝、土坑、柱穴群等である。

後世の削平の影響もあるが、概ね調査区東側を中心に古代以前の遺構が、西側に中世以降の遺構が多くみられる。A・B区西側、D区等削平が激しい地点もあるが遺構の残存状況は当初考えられていたよりも良好であった。

検出遺物は旧石器時代～縄文時代と考えられる石器類、弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、鉄滓、古代の土師器、須恵器、中世の輸入陶磁器類、須恵器、土師器、瓦、石鍋等の石製品、下駄等の木製品、近世の瓦等であるが今回掲載できたのは一部にとどまる。

また検出遺物から縄文時代以前の遺構等の存在が十分に考えられたが、時間的な制約から、十分な確認を尽くすことはできなかった。

2. A・B区の調査

A・B区は当初、道路を挟んで2地点であったがSB-A-40が道路側に延びることが分かり、道路を除去したことにより1地点となったため合わせてA・B区として報告する。

竪穴住居

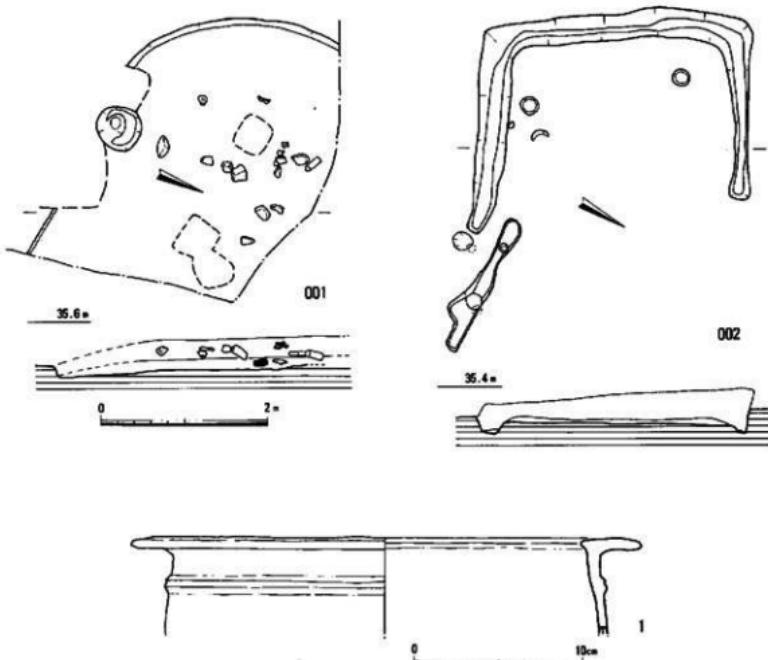
SC-A-001 (第4図)

調査区北東に位置する。竪穴住居であるか疑わしい。調査区の隅にかかるため全体のプランは分かれないと円形であろうか。深さは22cmを測る。

出土遺物は弥生土器の甕（1）で、復元口径30.0cmを測る。L字状の口縁を有し、やや下にだれたM字状の凸帯を1条付す。その他須恵器、土師器の細片が出土しているが、後世の柱穴が切り込んでおり、混入品の可能性がある。

SC-A-002 (第4図)

001の南に位置する。平面プランは方形を呈し、南北321cmを測る。東に向かって地形が低くなるため東側は不明。また削平が激しいため、壁は遺存せず、壁溝のみ残る。主柱穴、その他付帯施設につ



第4図 SC-A-001・002及び出土遺物実測図 (1/60)

いては不明。

出土遺物は土師器、須恵器の細片である。

掘立柱建物

SB-A-040 (第5図)

調査区中央に位置する。3間×8間の建物であるが2棟に分かれる可能性が高い。梁行4.5m、桁行13.5mを測る。柱穴は方形を中心円形も存在し、径80cm程度である。

SB-A-041 (第6図)

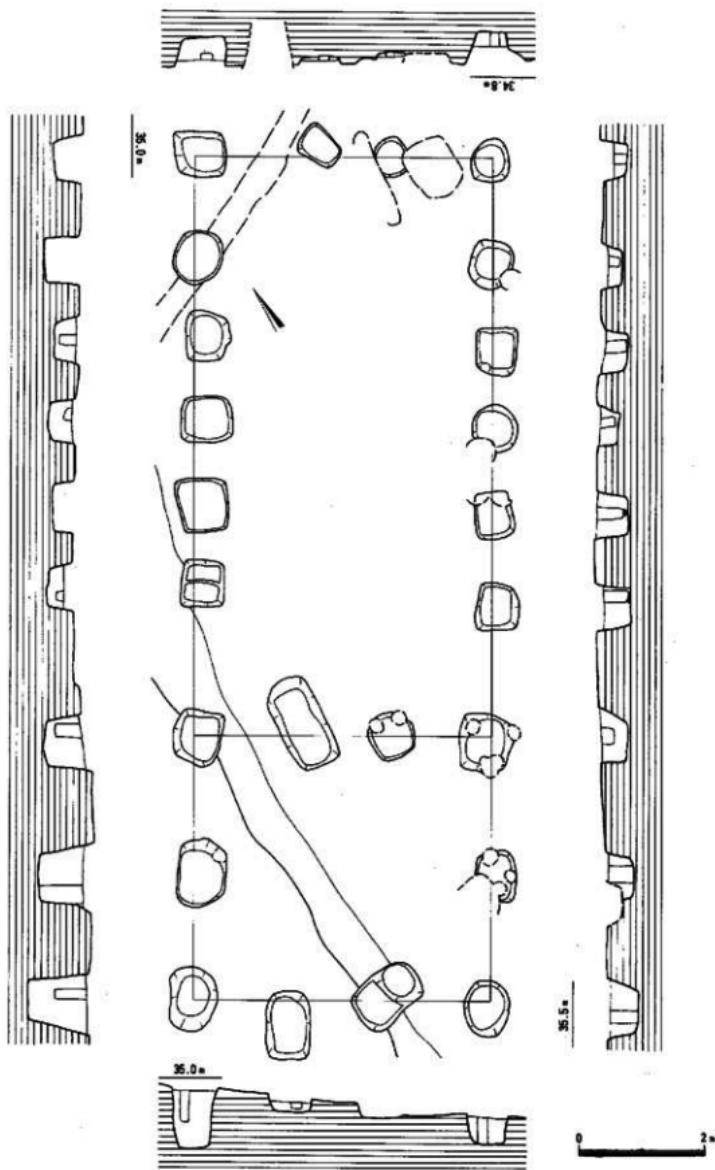
SB-A-040の西に位置する。梁行2間×桁行7間の布掘建物である。調査区拡幅前は建物と思わず、南側は柱痕跡を検出できなかった。梁行4.5m、桁行10.5mを測る。柱穴は長方形を中心とし、短軸70cm、長軸100cm程度である。出土遺物は土師器、須恵器、青磁、白磁等である。

SB-A-042 (第7図)

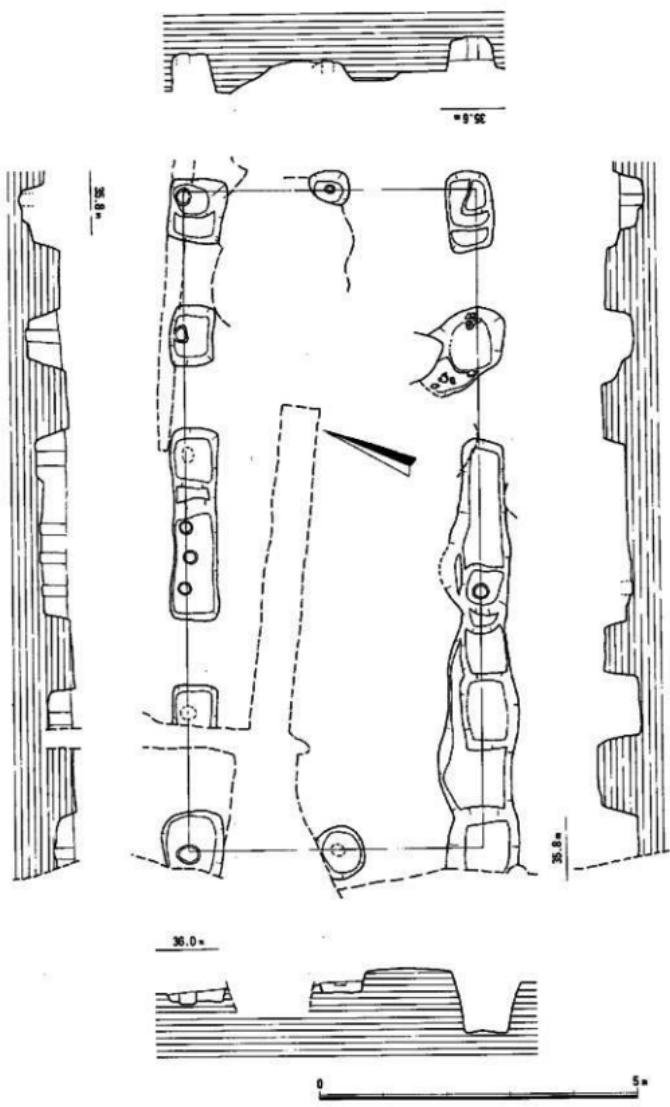
SB-A-040の南を切って位置する。3間×3間以上の建物である。梁行5.5m、桁行6m以上を測る。柱穴は方形を中心とし、径90cm程度である。

SB-A-043 (第8図)

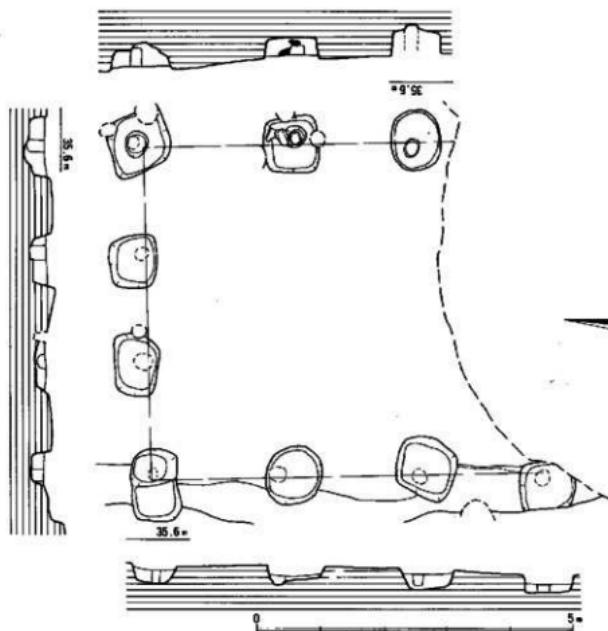
SB-A-042と切り合って位置する。3間×1間以上の建物である。梁行5.4m、桁行3m以上を測



第5図 SB-A-040実測図 (1/80)



第8図 SB-A-041実測図 (1/80)



第7図 SB-A 042実測図 (1/80)

る。柱穴は方形を中心とし、径70cm程度である。

SB-A-044（第8図）

調査区東に位置する。2間×4間の建物である。梁行4.2m、桁行6.3mを測る。柱穴は方形を中心とし、径80cm程度である。

SB-A-045（第9図）

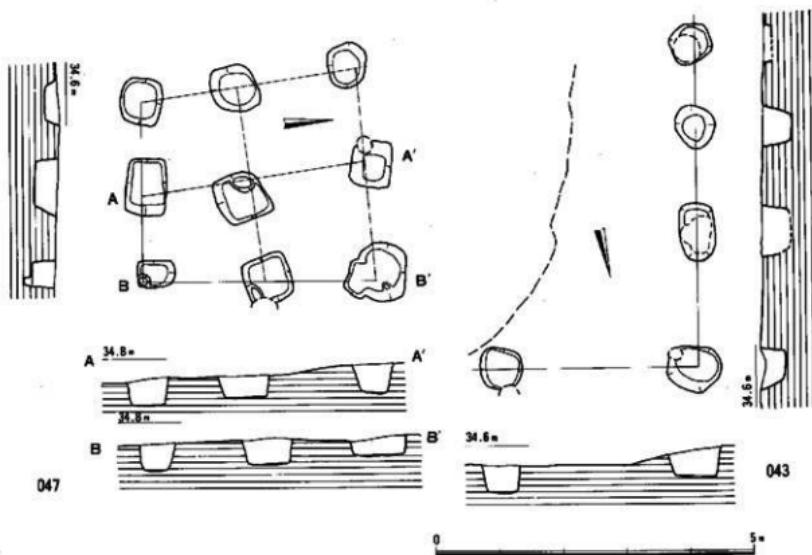
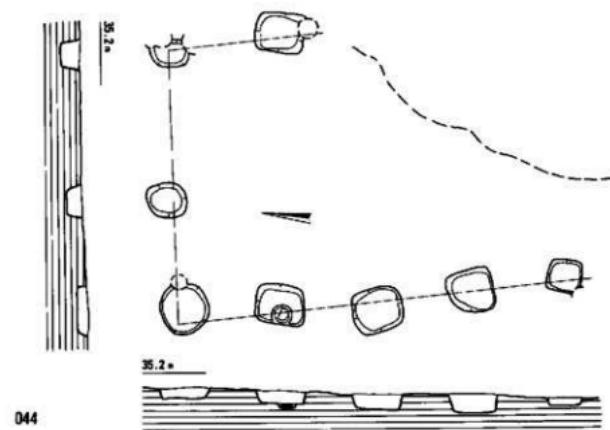
調査区北に位置する。2間×3間の建物である。梁行3.9m、桁行6.5mを測る。柱穴は円形を中心とし、径30cm程度である。

SB-A-046（第9図）

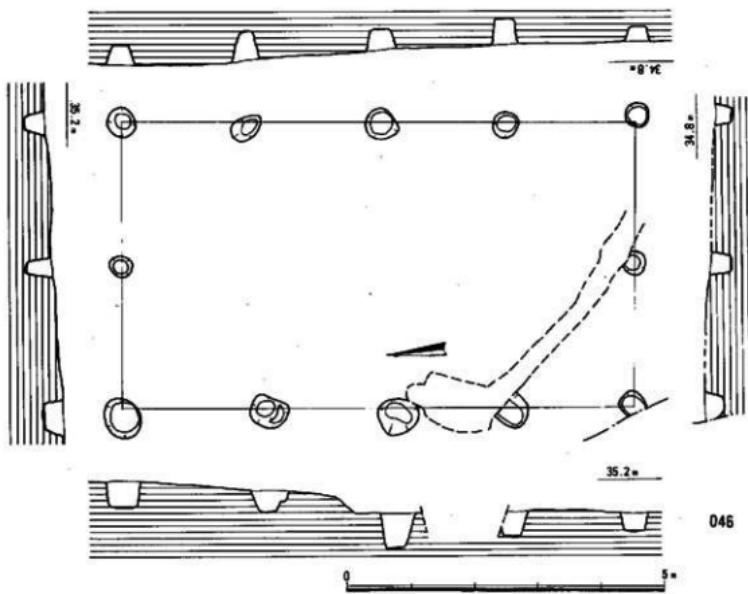
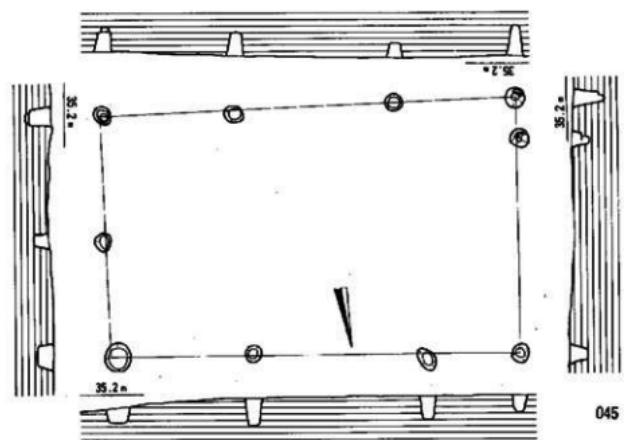
SB-A-041の南に位置する。2間×4間の建物である。梁行4.8m、桁行6.2mを測る。柱穴は円形を中心とし、径50cm程度である。

SB-A-047（第8図）

SB-A-046に切られて位置する。2間×2間の総柱建物である。南北3.6m、東西3.3mを測る。柱穴は方形を中心とし、径60～80cm程度である。



第8図 SB-A-043・044・047実測図 (1/80)



第9図 SB-A-045・046実測図 (1/80)

土坑

SK-A-007 (第11図)

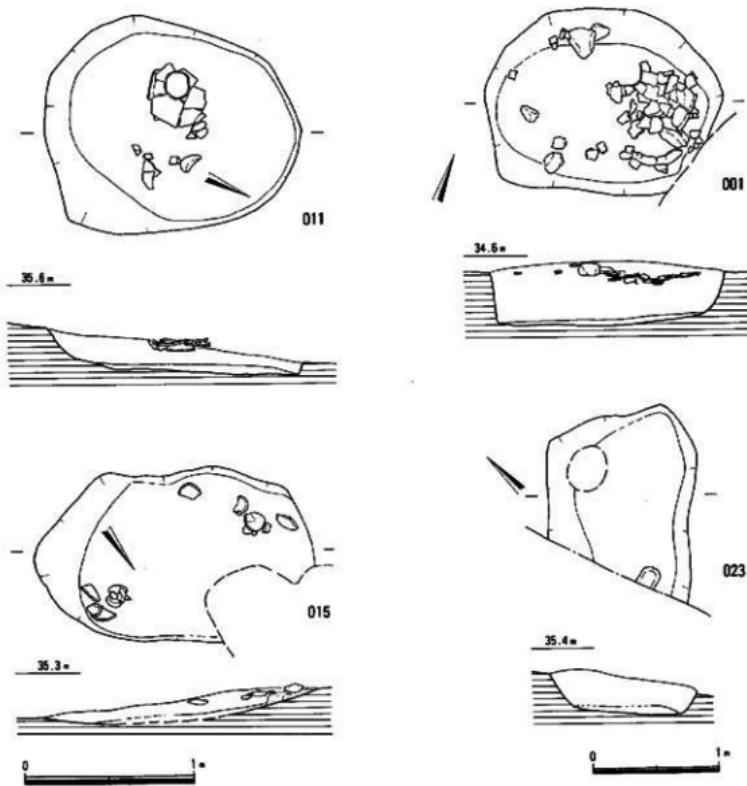
調査区西に位置する長方形の土坑である。長さ263cm、幅159cm、深さ60cmを測る。遺物は土師皿、瓦の細片が出土している。

SK-B-001 (第10図)

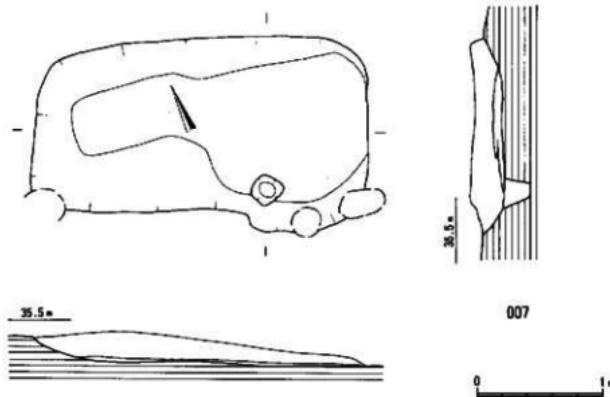
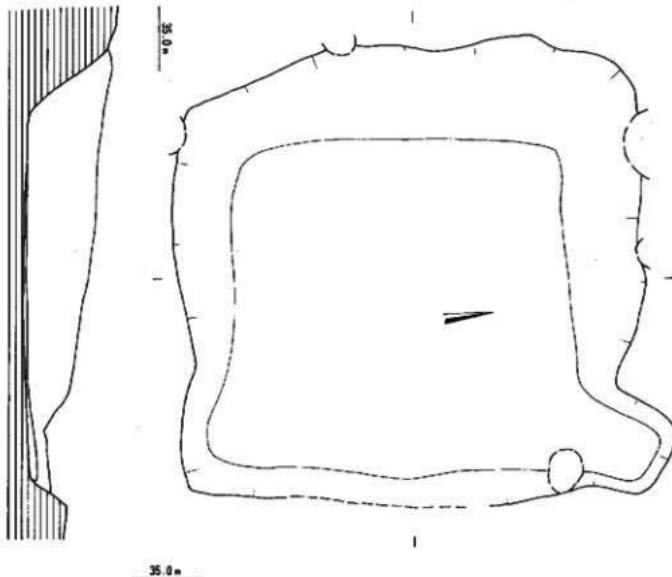
SB-A-43の西に接して位置する楕円形の土坑である。長さ190cm、幅141cm、深さ51cmを測る。出土遺物は弥生土器の甕(2)(3)、土師器、瓦等である。(2)は口径29.2cmを測る。「く」字状の口縁でやや肥厚する。調整は口縁部にナデを施す。(3)は同一個体と思われる。復元口径28.8cmを測る。「く」字状の口縁でやや肥厚する。調整は胴部外面にわずかにハケメがのこる。口縁部は内外面ともにナデを施す。

SK-B-011 (第10図)

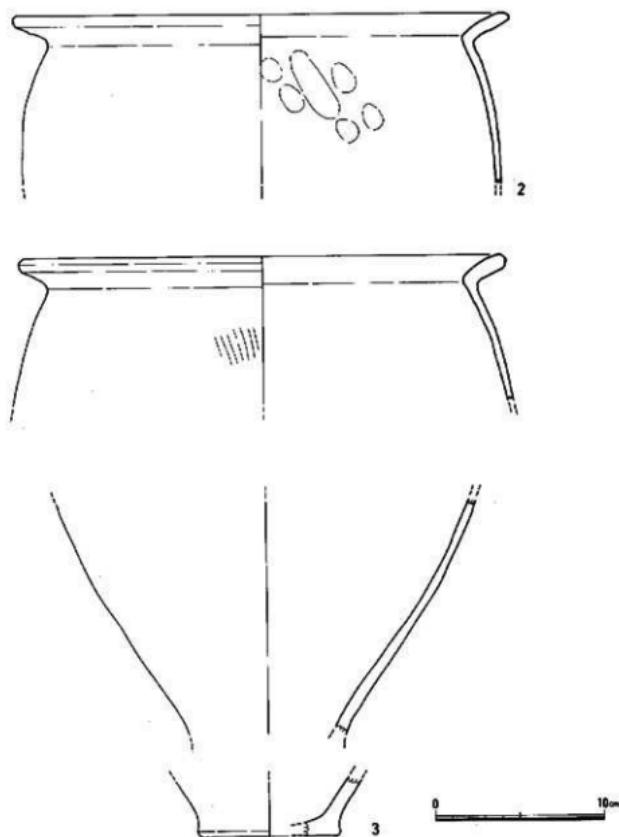
SB-Aを切って位置する楕円形の土坑である。長さ203cm、幅160cm、深さ23cmを測る。出土遺物は



第10図 SK-B-001・011・015・023実測図 (1/30・1/40)



第11図 SK-A-007・B-031実測図 (1/40)

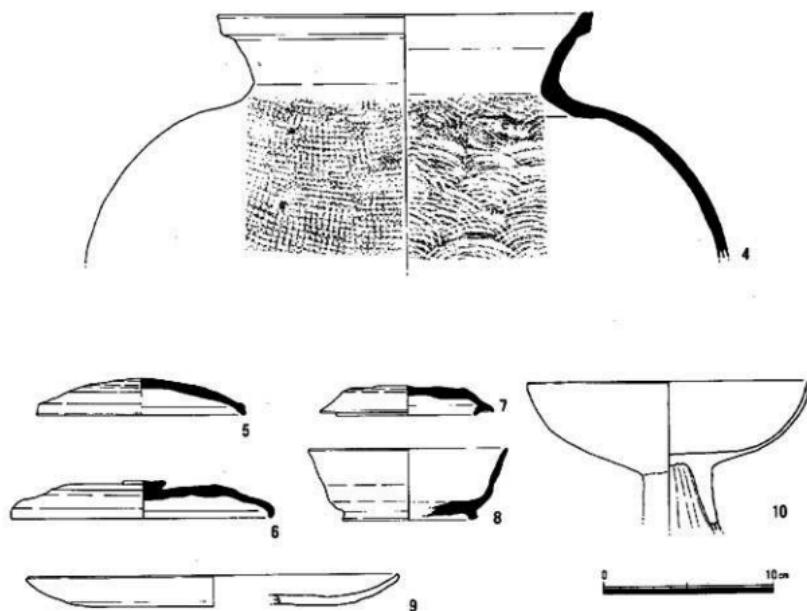


第12図 出土遺物実測図 (1/3)

弥生土器、須恵器の壺(4)、土師器、白磁、羽口、鉄滓等である。(4)は口径22.3cmを測る。短く外反し段をもつ口縁部に肩の張る胴部を呈す。胴部調整は外面が格子状のタタキ、内面が青海波文の当て具痕が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。

SK-B-015 (第10図)

SB-A-041を切って位置する楕円形の土坑である。長さ220cm、幅131cm、深さ18cmを測る。出土遺物は須恵器の蓋(5)(6)(7)、椀(8)土師器(9)、鉄滓等であるが建物の遺物が混じっている可能性がある。(5)は口径12.2cm、器高2.2cmを測る。調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。(6)は口径15.6cm、器高2.2cmを測る。つまみを有す。調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコ



第13図 出土遺物実測図 (1/3)

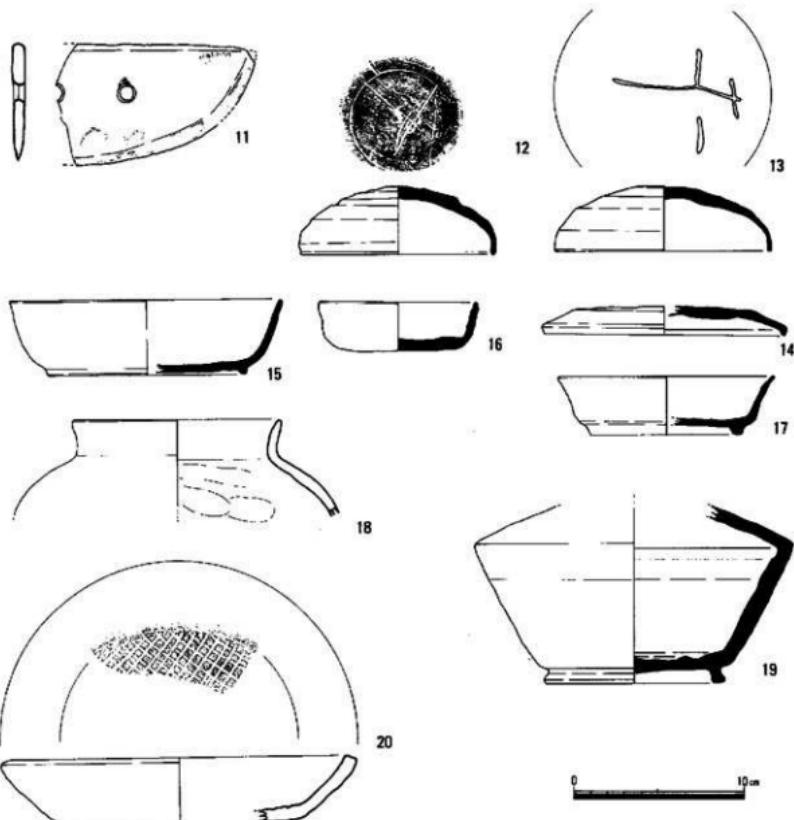
ナデを施す。(7)は口径8.1cm、器高1.8cmを測る。かえりを有す。調整は天井部が切り離し後未調整、他はヨコナデを施す。(8)は復元口径11.8cm、器高4.2cmを測る。調整は内外面ともにヨコナデを施す。(9)は復元口径22.0cm、器高1.9cmを測る。調整は内外面ともにヨコナデを施す。

SK-B-023 (第10図)

調査区西壁に接する長方形の土坑である。長さ150cm以上、幅115cm、深さ30cmを測る。出土遺物は須恵器、土師器(10)、鉄滓等である。(10)は高壺で口径16.7cmを測る。風化による器面の剥離が著しく調整不明。

SK-B-031 (第11図)

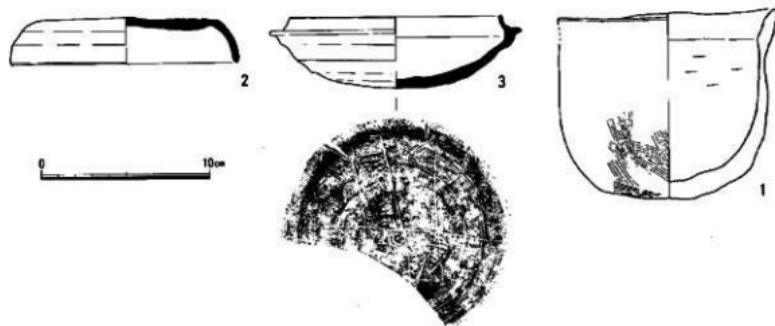
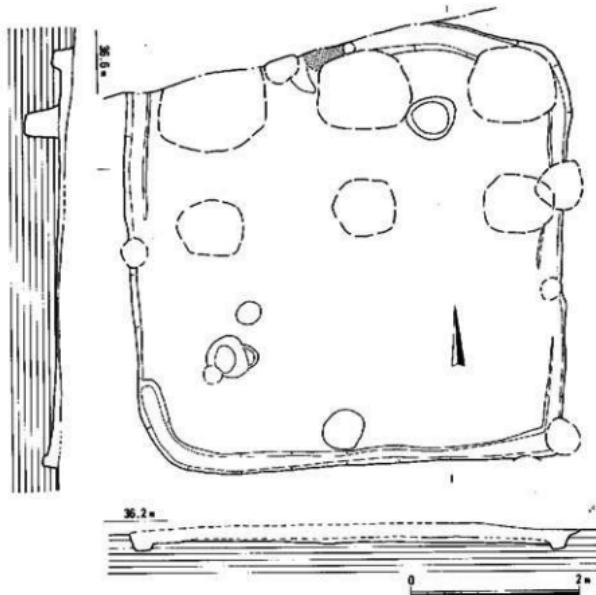
調査区東に位置する堅穴状の土坑で、北東隅に突出部をもつ。南北375cm、東西350cm、深さ67cmを測る。出土遺物は須恵器、土師皿、白磁、青磁等である。



第14図 出土遺物実測図 (1/3)

その他の出土遺物

(11) は検出面出土の石包丁である。輝緑凝灰岩製。(12)～(14) は須恵器の蓋で (12) は口径11.6cm、器高4cmを測る。調整は天部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。天部にヘラ記号が刻まれている。(13) は検出面出土。口径13.0cm、器高4cmを測る。調整は天部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。天部に火燐が残る。(14) はSK-B-010出土。口径14.6cm、器高1.8cmを測る。調整は天部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。(15) はSP0039出土。碗で口径16.0cm、器高4.5cmを測る。調整は内外とともにヨコナデを施す。(16) は壊で口径9.4cm、器高2.9cmを測る。調整は内外とともにヨコナデを施す。(17) はSK-B-010出土。塊で口径13.0cm、器高3.3cmを測る。口縁部は僅かに外反する。調整は内外とともにヨコナデを施す。(18) はSP0039出土。土師器の壺で口径12.0cmを測る。短く外反する口縁部を呈す。調整は磨滅が進み、不明。(19) はSK-B-010出土。須恵器の長頸壺で高台径11.0cmを測る。調整は内外とともにヨコナデを施す。焼成はやや不良。(20) は土師質のおろし皿である。復原口径19.8cm、器高3.8cmを測る。調整は口縁部がナデ、内底は格子状に刻む。色調は暗黄褐色を呈す。



第15図 SC-C-011及び出土遺物実測図 (1/60・1/3)

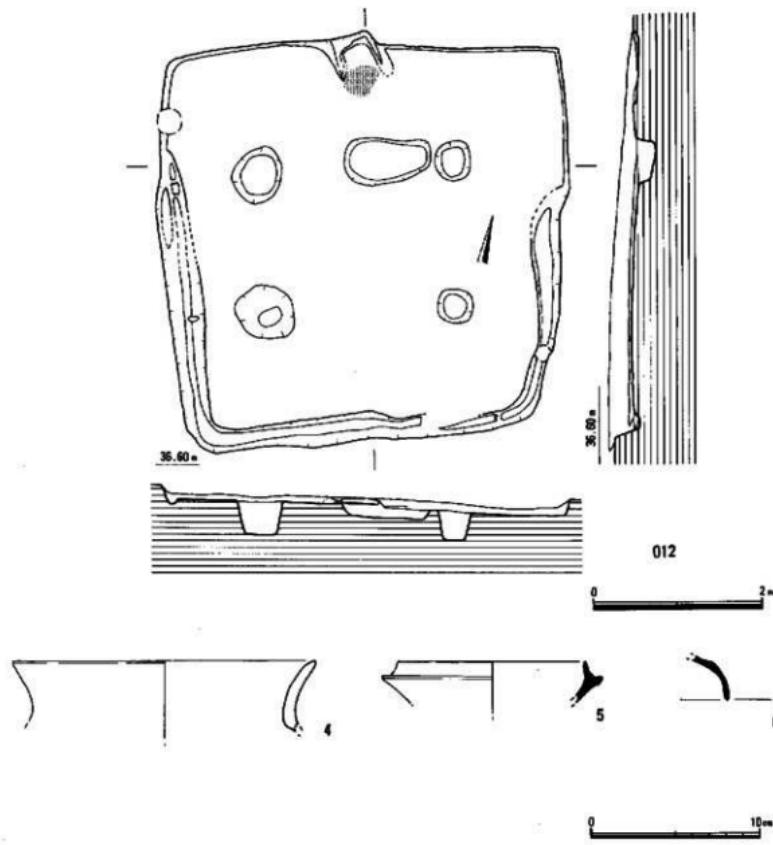
3. C区の調査

堅穴住居

SC-C-011 (第15図)

調査区東端に位置する方形の住居である。北壁を道路部分に切られ、北半分にはSB-C-072が切り込む。南北4.95m、東西5.39m、深さ22cmを測る。北壁にカマドを有した痕跡が残る。柱は4本柱と思われる。

出土遺物は弥生土器、土師器(1)、須恵器(2)(3)等である。(1)は壺で口径13.0cm、器高11.1cmを測る。全体的にだれた造りで、器壁は厚い。口縁部はわずかに外反する。調整は2次の焼成を受けているため器壁外面は荒れるが、下位にわずかに不整方向のハケメが残る。内面は口縁部がナデ、以下は横方向のケズリを施す。(2)は蓋で口径13.6cm、器高2.8cmを測る。全体にやや歪んでい



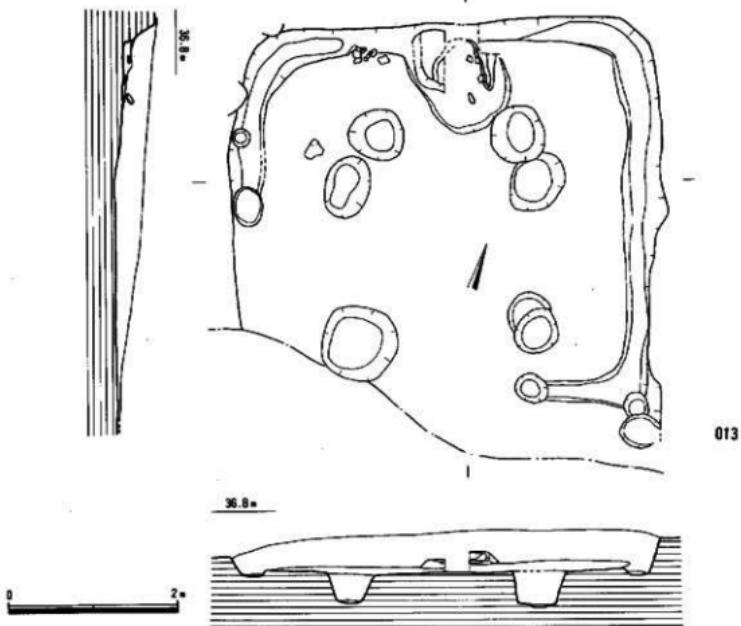
第16図 SC-C-012及び出土遺物実測図 (1/60・1/3)

る。調整は天井部が切り離し後未調整、他はヨコナデを施す。(3)は壺で口径12.5cm、器高4.2cmを測る。底部半分がヨコヘラケズリ、他はヨコナデを施す。

SC-C-012 (第16図)

SC-C-011、SC-C-064を切って位置する方形の住居である。南北4.94m、東西4.80m、深さ29cmを測る。東壁中央にカマドを有する。主柱は4本柱である。柱穴は径40~60cmを測る。

出土遺物は弥生土器、土師器(4)、須恵器(5)(6)、羽口等である。(4)は壺で復元口径18.0cmを測る。外反する口縁を成す。(5)は壺で復元口径11.1cmを測る。(6)は蓋の細片である。

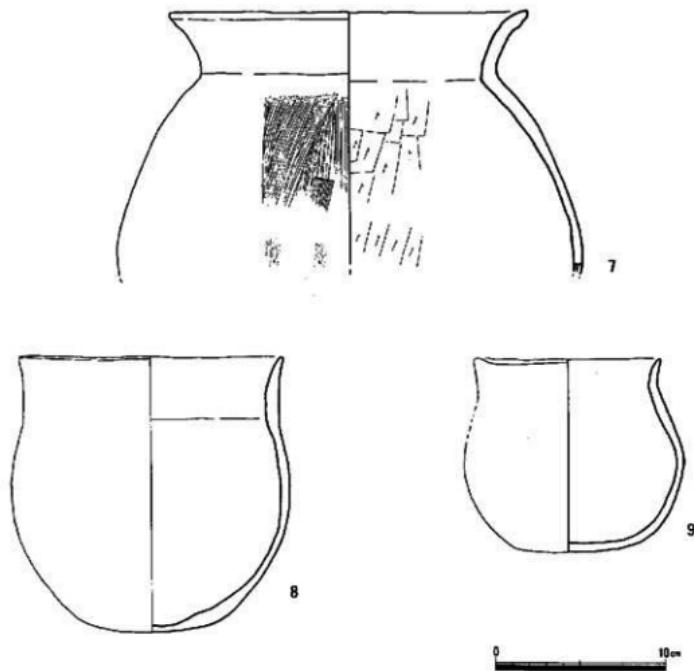


第17図 SC-C-013実測図 (1/60)

SC-C-013 (第17図)

SC-C-012の西に位置する方形の住居である。南壁部分を SD-C-008・014に切られる。南北4.5m以上、東西5.12m、深さ45cmを測る。北壁中央にカマドを有する。主柱は4本柱である。柱穴は径50～60cmを測る。

出土遺物は弥生土器、土師器の壺(7)(8)(9)、須恵器、羽口、鉄滓等である。(7)は復元口径21.2cmを測る。口縁は短く外反し端部は丸くおさめる。調整は口縁部がヨコナデ、外面は縦方向の細かなハケメ、内面は縦方向のケズリを施す。(8)は復元口径15.5cm、器高16.4cmを測る。口縁は緩くわずかに外反し肩部はやや丸みをもつ。調整は2次的焼成や風化により器壁内外面とも荒れて不明。(9)は口径11.0cm、器高11.5cmを測る。口縁は緩くわずかに外反する。調整は2次的焼成や風化により器壁外面は粗れて不明。内面はナデか。



第18図 SC-C-013出土遺物実測図 (1/3)

SC-C-016 (第19図)

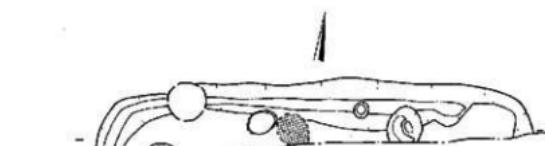
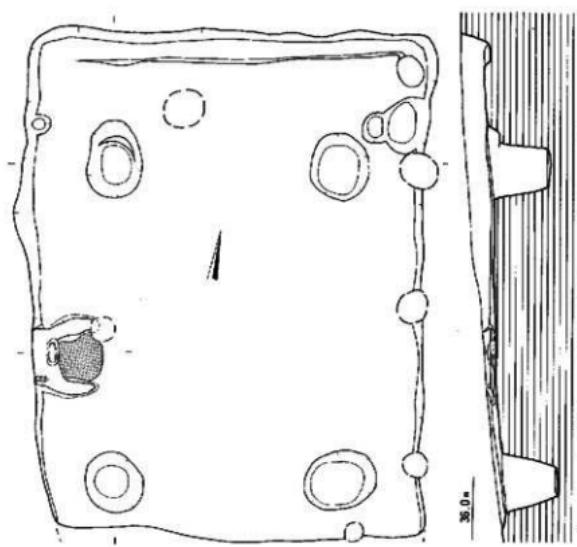
SC-C-013の南に位置する方形あるいは長方形と考えられる住居である。北壁部分以外は人手を後世の造成によって失っている。南北長は不明、東西5.12m、深さ45cmを測る。北壁中央にカマドの痕跡が認められるが、過度の削平のため本来の形は不明である。出土遺物は弥生土器、土師器の細片等である。

SC-C-021 (第19図)

SC-C-016の西に位置する長方形の住居である。南壁部分の削平が著しい。南北6m以上、東西4.57m、深さは北側で41cmを測る。西壁にカマドを有する。西壁にカマドを有するものは後述するSC-I-017と合わせ2軒のみである。主柱は4本柱である。柱穴は径60~80cmを測る。出土遺物は土師器、須恵器の細片等である。

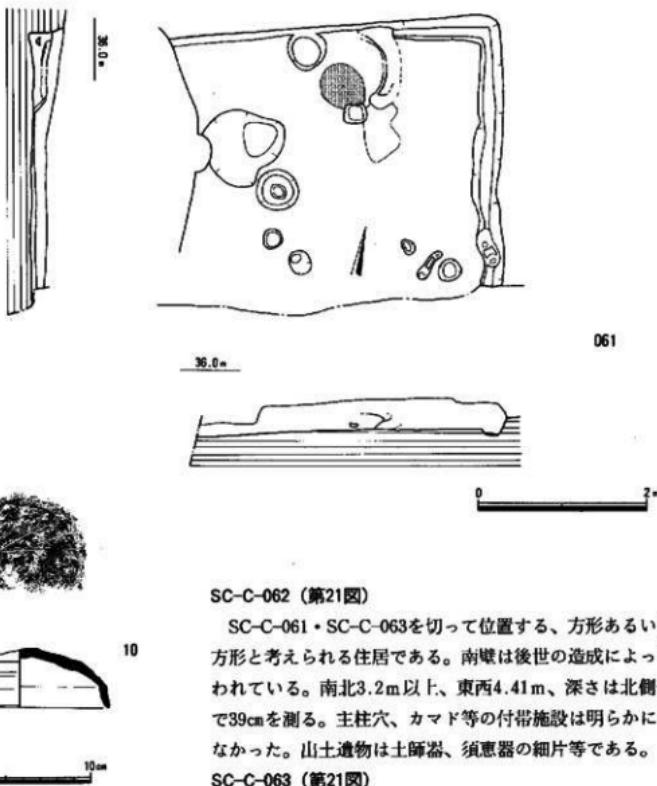
SC-C-061 (第20図)

SC-C-011・012の南に位置する方形の住居である。南壁を調査区に、西壁をSC-C-062に切られる。南北3m以上、東西3.6m以上、深さは北側で37cmを測る。北壁にカマドを有する。主柱穴は検出できなかった。出土遺物は土師器、須恵器(10)等である。(10)は蓋で口徑10.6cm、器高3.4cmを測る。調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。天井部にはヘラ記号が刻まれている。



0 2 mm

第19図 SC-C-016・021実測図 (1/60)



第20図 SC-C-061及び出土遺物実測図
(1/60・1/3)

は北側部分で45cmを測る。主柱は4本柱である。柱穴は径50~60cmを測る。カマド等の付帯施設は検出できなかった。出土遺物は土師器、須恵器の細片等である。

SC-C-064

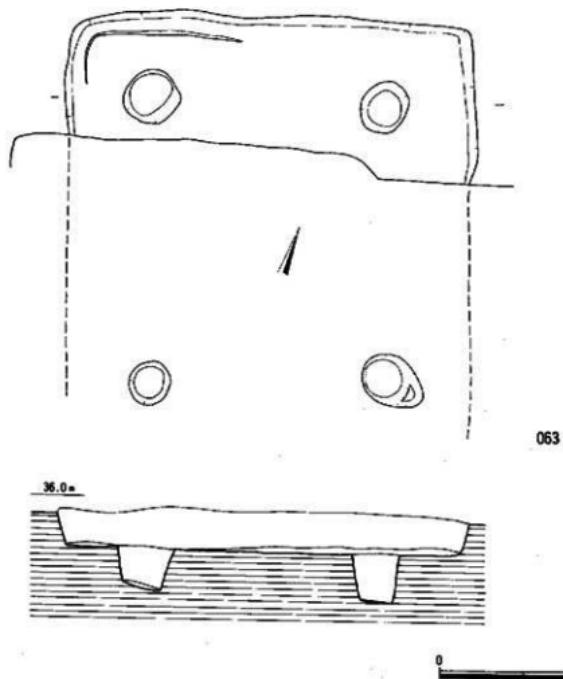
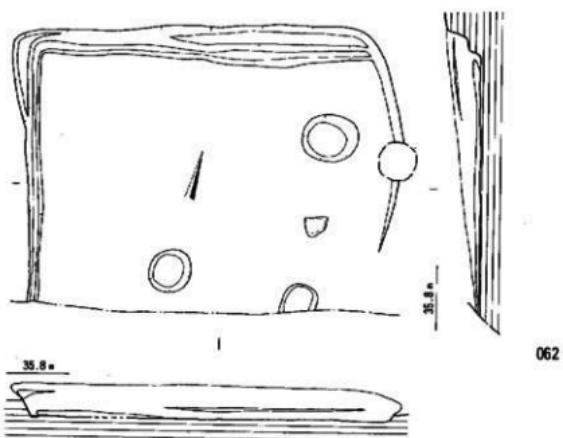
SC-C-011・SC-C-012に切られて位置する方形あるいは長方形と考えられる住居である。南北長不明、復元東西長3.3m前後。主柱、カマド等の付帯施設は不明。出土遺物は土師器、須恵器の細片等である。

SC-C-062 (第21図)

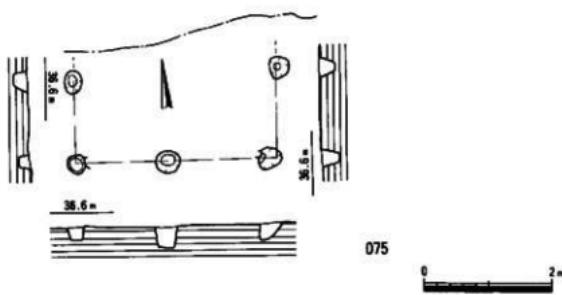
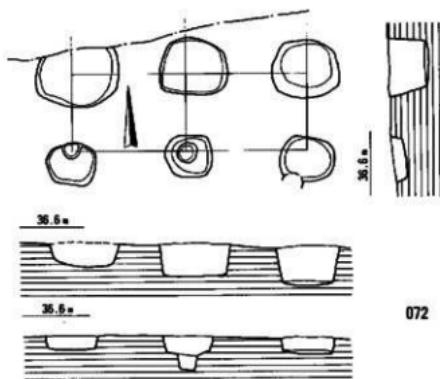
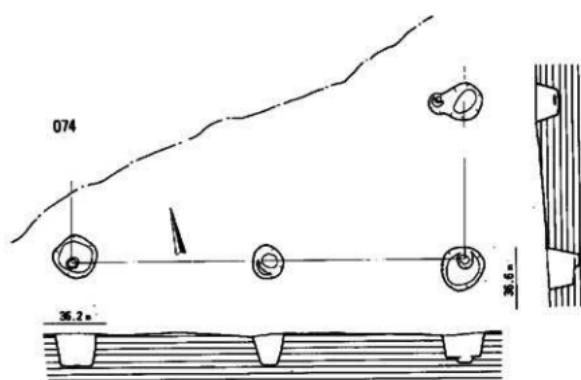
SC-C-061・SC-C-063を切って位置する、方形あるいは長方形と考えられる住居である。南壁は後世の造成によって失われている。南北3.2m以上、東西4.41m、深さは北側部分で39cmを測る。主柱穴、カマド等の付帯施設は明らかにできなかった。出土遺物は土師器、須恵器の細片等である。

SC-C-063 (第21図)

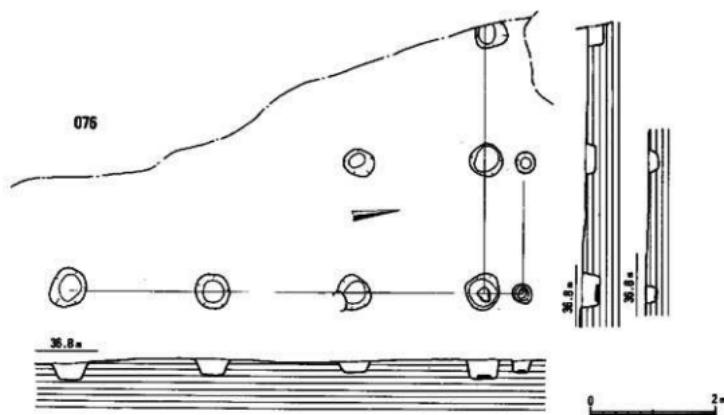
SC-C-061・SC-C-062を切られて位置する、方形の住居である。北壁部分以外の大半を失うが、検出した南部分の主柱穴から南北長は4.6m以上とおもわれる。東西4.88m、深さ



第21図 SC-C-062・063実測図 (1/60)



第22図 SB-C-072・074・075実測図 (1/80)



第23図 SB-C-076実測図 (1/80)

掘建柱建物

SB-C-072 (第22図)

調査区東、SC-C-011を切って位置する。1間以上×2間の建物である。北側を後世の造成によって失う。南北1.6m以上、東西4.5mを測る。柱穴は隅丸方形の平面プランを中心とし、北列が径100～120cm程度、南列が径70～80cm程度と北列と南列とで規模が異なる。出土遺物は土師器、須恵器の細片等である。時期は古代と考えられる。

SB-C-074 (第22図)

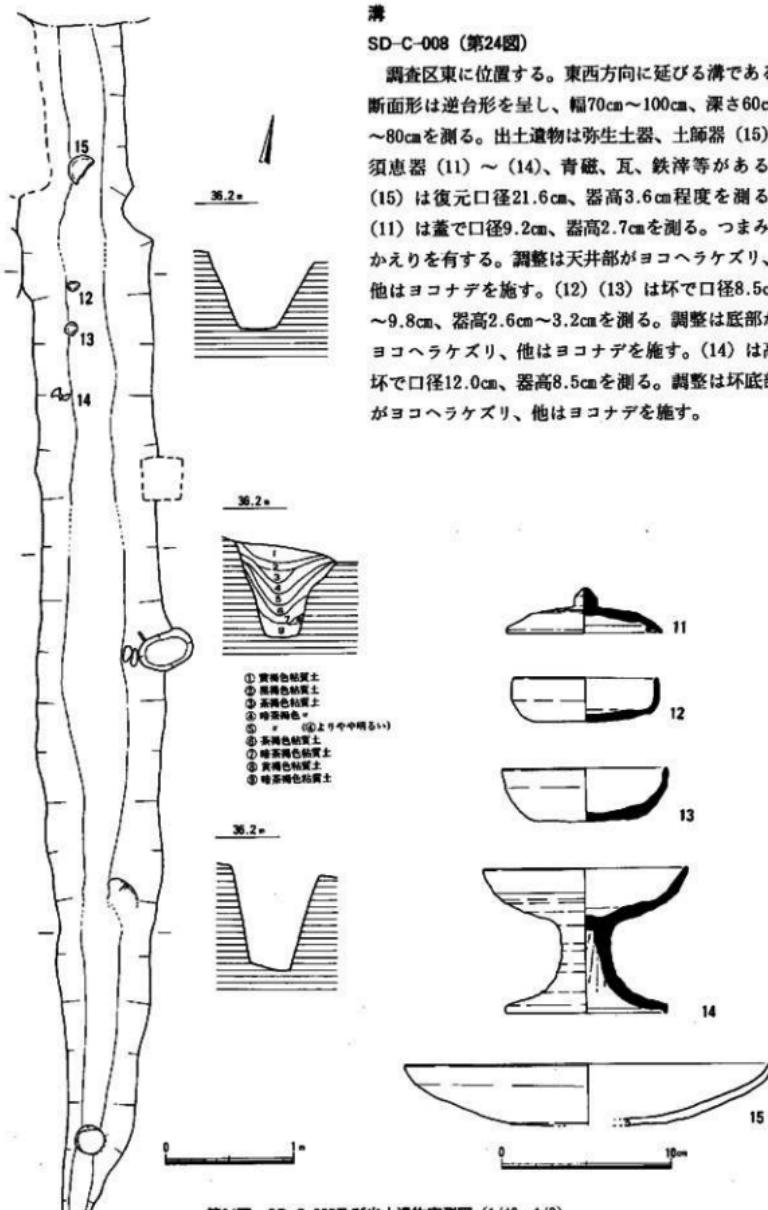
調査区北壁に切られて位置する。1間以上×2間以上の建物である。北側を後世の造成によって失う。南北2.7m以上、東西6m以上を測る。柱穴の平面プランは円形で、径50～70cm程度である。

SB-C-075 (第22図)

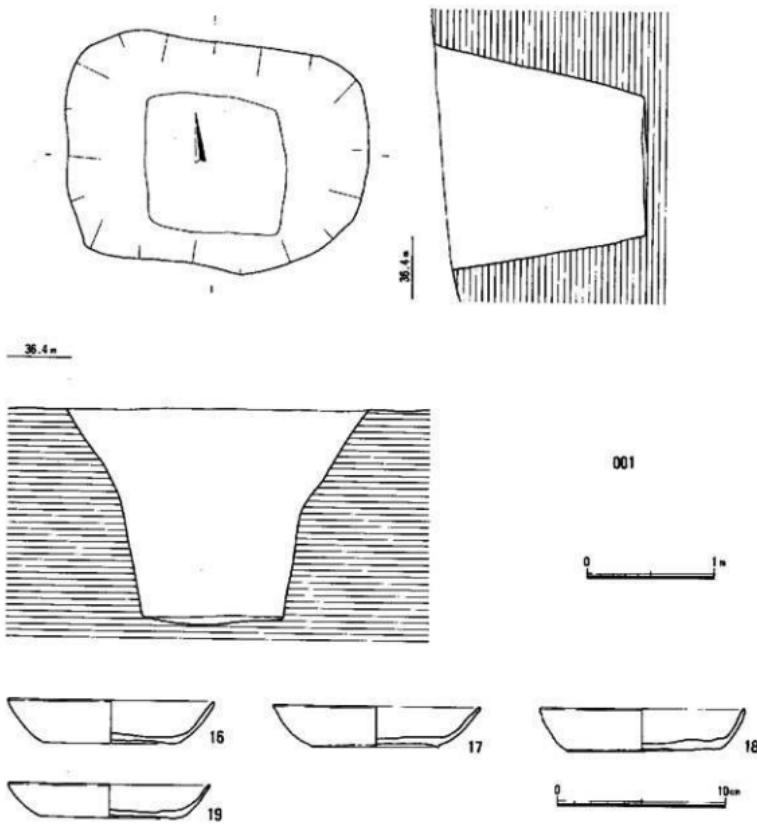
調査区北壁に切られて位置する。1間以上×2間の建物である。北側を後世の造成によって失う。南北1.3m以上、東西3mを測る。柱穴の平面プランは円形で、径30cm程度である。

SB-C-076 (第23図)

調査区西壁に切られて位置する。3間以上×2間以上の建物である。西側を後世の造成によって失う。北列には庇がつくものとおもわれる。南北6.6m、東西4m以上を測る。柱穴の平面プランは円形で、根石をもつものがある。身舎部分が径50cm前後を測り、庇部分は径30cm程度とひとまわり小さくなる。



第24図 SD-C-008及び出土遺物実測図 (1/40・1/3)

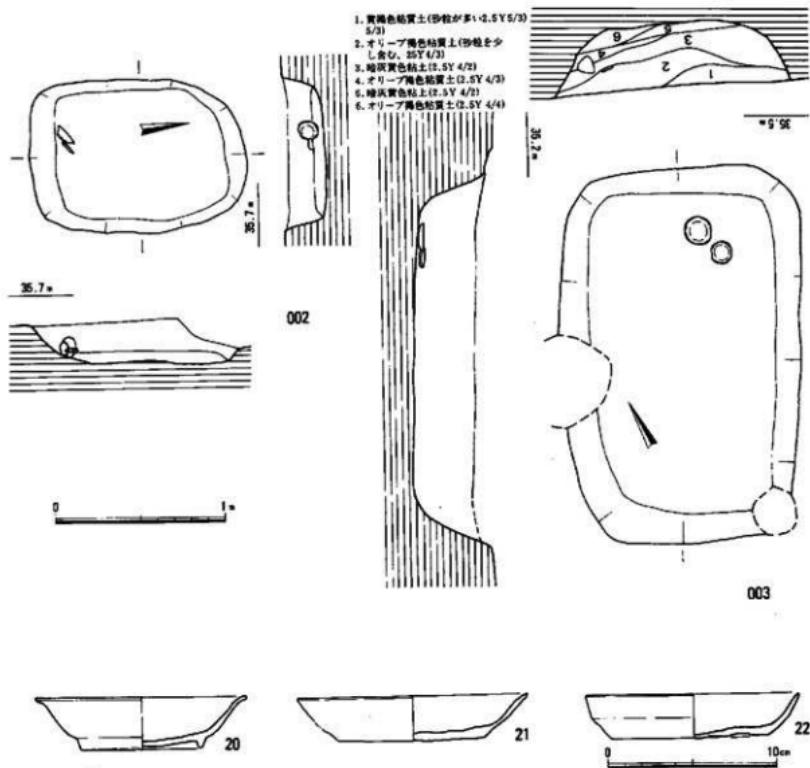


第25図 SE-C-001及び出土遺物実測図 (1/40・1/3)

井戸

SE-C-001 (第25図)

調査区中央に位置する長方形の井戸であろうか。長さ250cm、幅178cm、深さ170cmを測る。出土遺物は土師皿(16)～(19)、須恵器等である。(16)～(19)は口径12.0cm～12.4cm、器高2.1～2.6cmを測る。



第26図 SR-C-002・003及び出土遺物実測図 (1/30 + 1/3)

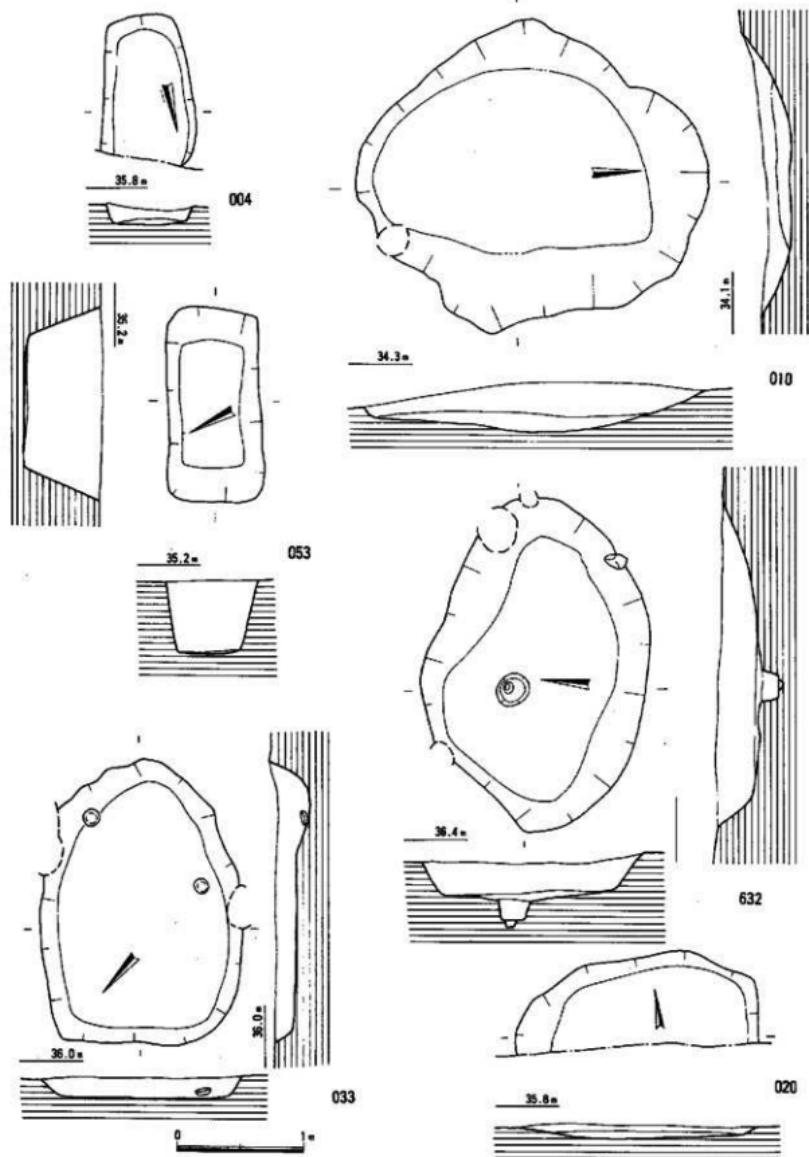
土塚墓

SR-C-002 (第26図)

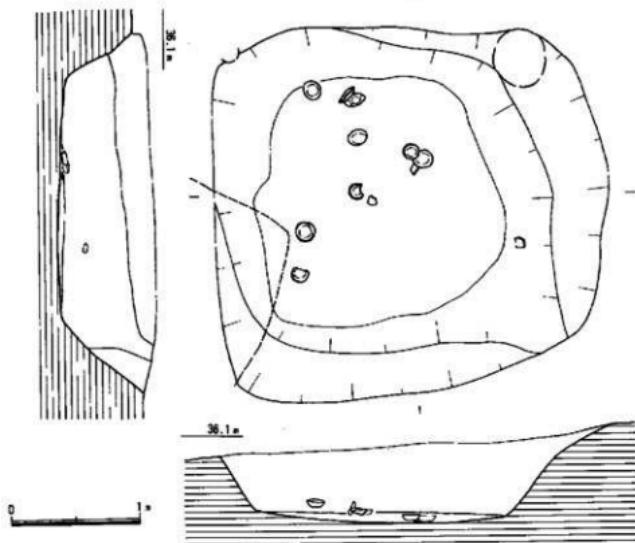
SE-C-001の南に位置する土塚墓である。長さ128cm、幅90cm、深さ22cmを測る。遺物は上師皿、白磁皿(20)が出土している。(20)は口径12.5cm、器高3.1cm、高台径7.2cmを測る。器壁は薄く、口縁端部はわずかに外反する。

SR-C-003 (第26図)

SE-C-001の南に位置する土塚墓である。長さ211cm、幅143cm、深さ43cmを測る。遺物は土師皿(21)(22)が出土している。(21)は口径13.6cm、器高2.6cm、(22)は口径12.6cm、器高2.6cmを測る。



第27図 SK-C-004・010・020・032・033・053実測図 (1/40)



第28図 SK-C-034実測図 (1/40)

土坑

SK-C-004 (第27図)

SD-C-047に北側部分を切られる長方形の土坑である。長さ不明、幅52cm、深さ15cmを測る。遺物は土師器の細片が出土している。

SK-C-010 (第27図)

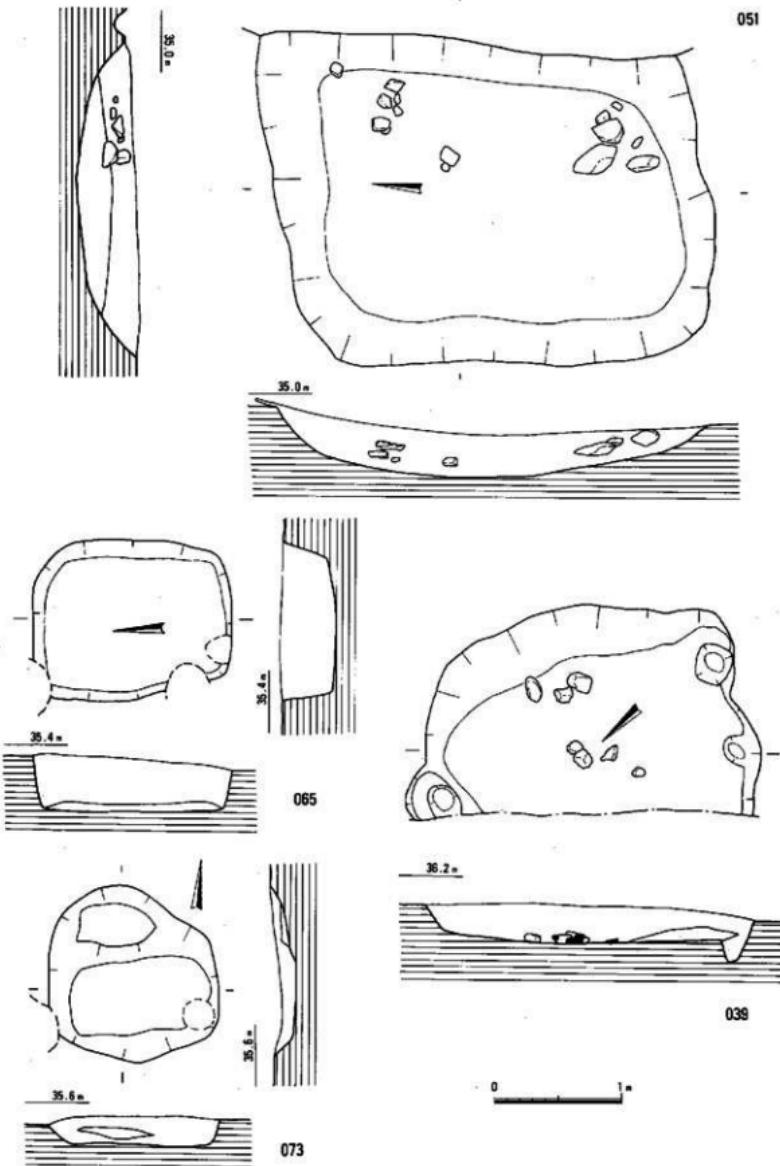
調査区東端に位置する梢円形の土坑である。長さ278cm、幅234cm、深さ39cmを測る。遺物は土師器、須恵器(23)、青磁、滑石製の石鍋の細片が出土している。(23)は腹で最大胴部径11.6cmを測る。胴部のみの遺存で、調整は外面は全体にカキメを施し、その上から2段に列点文を施す。内面はナデを施す。またSD-C-008出土遺物と接合した。

SK-C-020 (第27図)

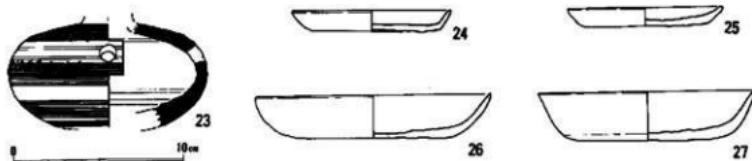
SC-C-021を切り、調査区南壁にかかる土坑である。東西190cm、深さ10cmを測る。遺物は土師器の細片が出土している。

SK-C-032 (第27図)

調査区中央に位置する梢円形の土坑である。長さ257cm、幅177cm、深さ35cmを測る。遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。



第29圖 SK-C-039・051・065・073測圖 (1/40)



第30図 遺物実測図 (1/3)

SK-C-033 (第27図)

SK-C-032の西に位置する土坑である。長さ222cm、幅160cm、深さ18cmを測る。遺物は土師皿(24)が出土している。(24)は口径9.5cm、器高1.3cmを測る。

SK-C-034 (第28図)

SK-C-033に切られる方形の土坑である。南北308cm、東西270cm、深さ60cmを測る。遺物は土師皿(25)～(27)が出土している。(25)は口径9.2cm、器高1.2cm、(26)は口径13.9cm、器高2.5cm、(27)は口径13.8cm、器高2.9cmを測る。

SK-C-039 (第29図)

SD-C-038に切られる方形の土坑である。南北266cm、深さ30cmを測る。遺物は土師皿が出土している。

SK-C-051 (第29図)

調査区南西端に位置する長方形の土坑である。長さ345cm、幅252cm、深さ32cmを測る。SX-C-069を含む庭園状造構を構成するものかもしれない。出土遺物はなかった。

SK-C-053 (第27図)

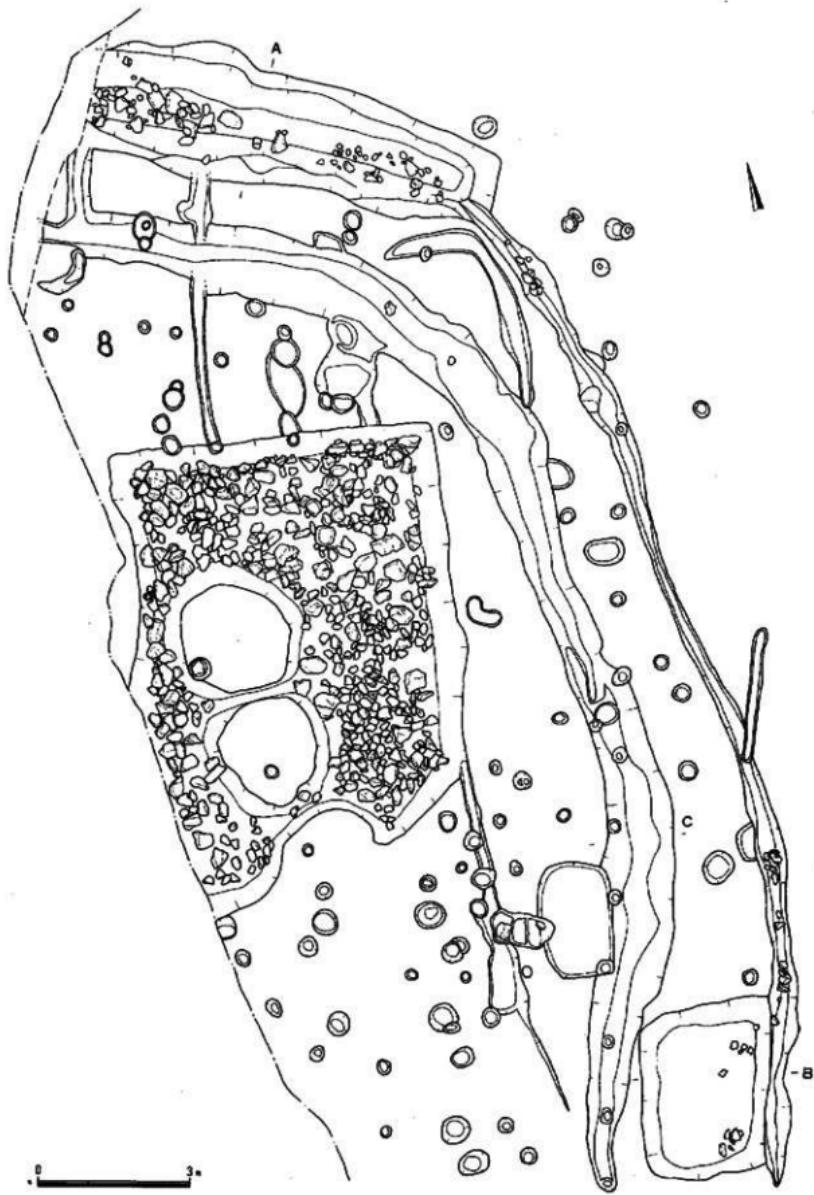
SK-C-051の東に位置する長方形の土坑である。土壤墓の可能性がある。長さ151cm、幅74cm、深さ62cmを測る。遺物は須恵器、土師皿の細片が出土している。

SK-C-065 (第29図)

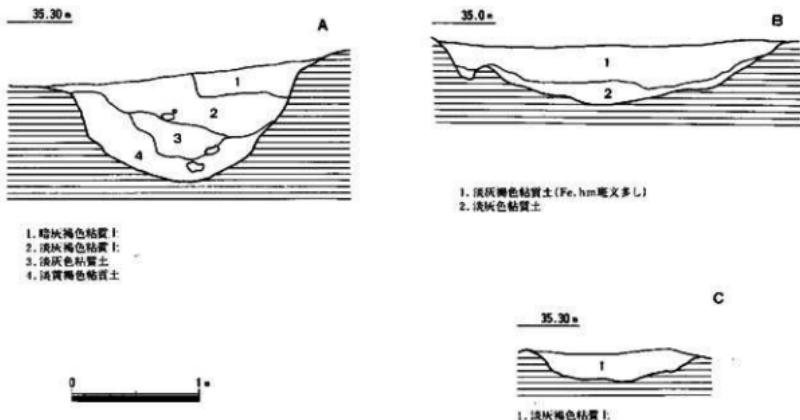
SC-C-021の北に位置する長方形の土坑である。長さ157cm、幅130cm、深さ45cmを測る。

SK-C-073 (第29図)

調査区西部に位置する七坑である。北側にテラスを有する。南北135cm、東西137cm、深さ23cmを測る。出土遺物はなかった。



第31図 症状状造模 (1/80)



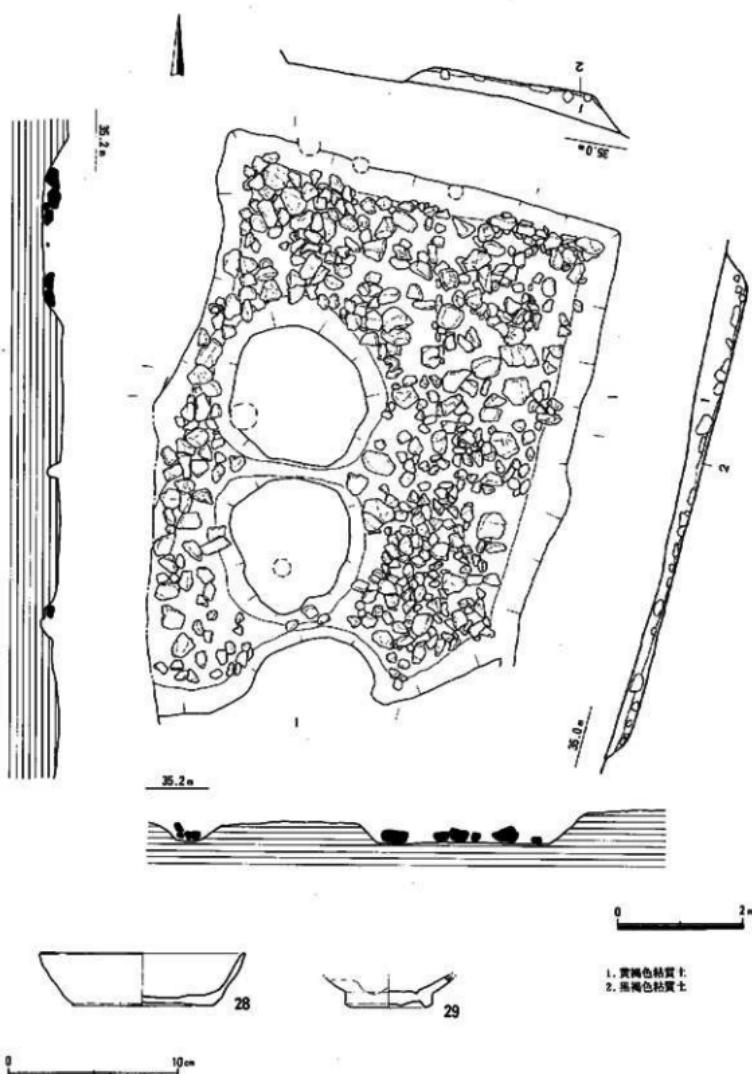
第32図 庭園関係遺構土層図 (1/40)

池状遺構

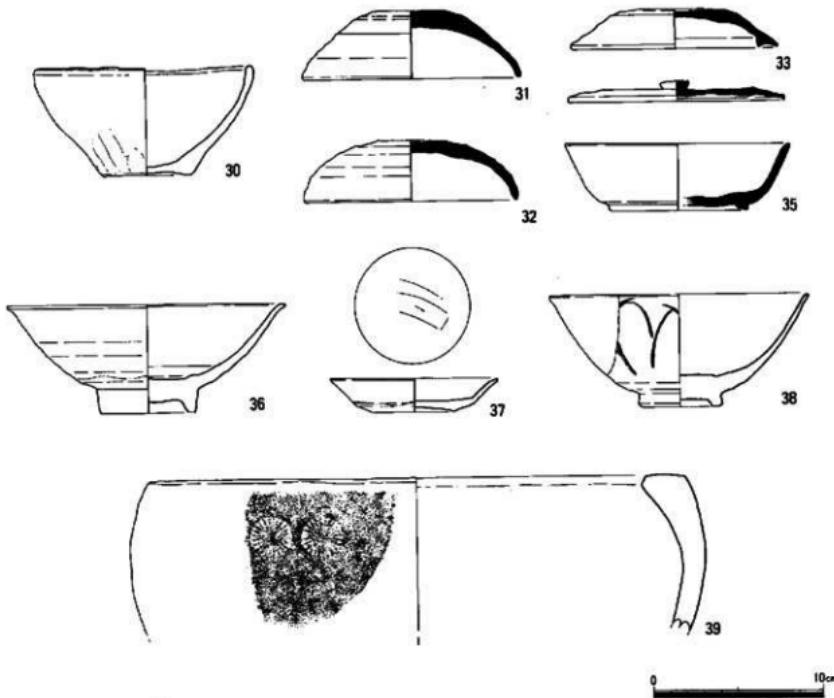
SX-C-069 (第31・33図)

調査区西端に位置する池状の遺構である。南北5.95m、東西5.05m、深さ37cmを測る。北、東の各辺は比較的直線的であるが、南辺は抉られたような形を成す。西辺は削平のため、範囲は不明である。底には径20~30cm程度の人頭大の礫が敷いてあり、その間に少量の玉石がみえる。壁の立ち上がりに石組等で養生された形跡は認めにくい。内部に2カ所、円形プランの地山の削り出しがみられる。北が基部で南北2.01m、東西2.11m、南が南北1.83m、東西1.8mを測る。上部構造は不明であるが庭園を構成する築山等の存在が想定される。また南東隅から溝が南に延びている。土層から判断すると水が溜まっていた様子はみられない。周囲は2条溝が巡っている。外側の溝はSD-E-002、SD-F-002と連なるものである。これらの溝やSK-C-051等と合わせて庭園を構成していると推定される。またこの東には後述するSB-E-003の八角堂が存在し同時期のものとおもわれる。

出土遺物は土師器(28)、須恵器、白磁(29)、青磁、瓦等がある。(28)は皿で口径12.2cm、器高3.2cmを測る。(29)は碗で高台径5.1cmを測る。



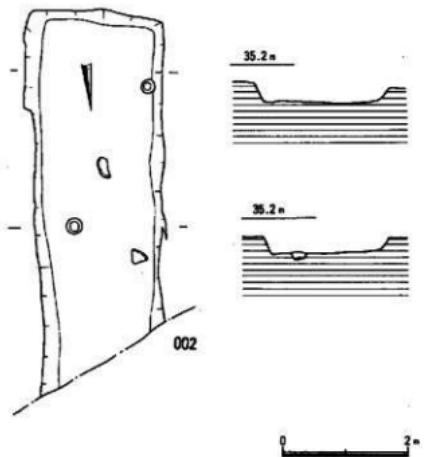
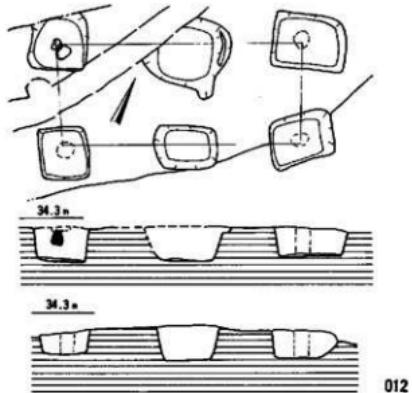
第33图 SX-C-069实测图 (1/60)



第34図 遺物実測図 (1/8)

その他の出土遺物（第34図）

(30) は SP-0647出土。弥生土器の鉢である。口径13.0cm、器高6.3cmを測る。平な底部から体部は内湾して開く。口縁端部はやや肥厚する。調整は風化により器壁が荒れるが、外面底部付近は指頭による縦方向の強いナデ、内面口縁部はヨコナデを施す。(31)～(34) は須恵器の蓋である。(31) は SP-0765山土。口径12.6cm、器高4.0cmを測る。器高は高く、器壁は厚い。調整は天井部がヘラケズリ、天井部内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。(32) は造構面出上。口径12.4cm、器高3.5cmを測る。調整は天井部外面がヘラケズリ、天井部内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。(33) は造構面出土。口径9.8cm、器高2.2cmを測る。かえりを有す。調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。(34) は SP-0087出土。口径12.8cm、器高1.2cmを測る。つまみを有す。調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。天井部に重ね焼きの痕跡が残る。(35) は須恵器の碗である。造構面出土。口径13.2cm、器高4.0cmを測る。調整は内外ともにヨコナデを施す。(36) は SP-0087山土。白磁の碗である。口径16.2cm、器高6.3cmを測る。口縁端部が外反し、やや高い高台を有す。体部内面下位に1条沈線が巡る。釉は薄くかかる。(37) は SP-0437出土。青磁の皿である。口径10.0cm、器高2.0cmを測る。体部下位で屈曲する。外面体部下位と底部には釉がかからない。(38) は 043出土。青磁の碗である。復原口径15.2cm、器高6.6cmを測る。(39) は瓦質土器。復原口径32.0cmを測る。口縁部やや下に印花文を施す。焼成は良好。



第35図 SB-D-012・SD-D-002実測図 (1/80)

SK-D-019

調査区南壁にかかる位置する土坑である。長さ、幅ともに不明で、深さ40cmを測る。遺物は瓦片が多量に出土している。

4. D区の調査

掘建柱建物

SB-D-012 (第35図)

調査区東、北壁にかかる位置する。1間以上×2間の建物である。南北1.6m以上、東西3.9mを測る。柱穴は隅丸方形を中心とし、北列が径90~110cm程度、南列が径80~100cm程度である。

溝

SD-D-001

調査区東に位置する。SD-C-071に連なる溝である。幅160cm~320cm、深さ60cm~80cmを測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、青磁、瓦等（すべて最上層）がある。

SD-D-002 (第35図)

調査区東に位置する。東西方向に延びる溝である。断面形は逆台形を呈し、幅200cm~210cm、深さ35cm前後を測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、青磁、瓦等がある。

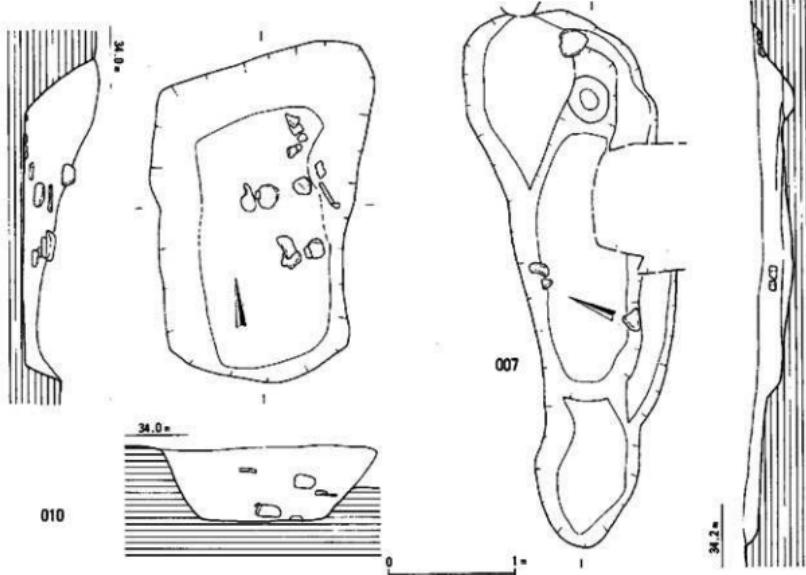
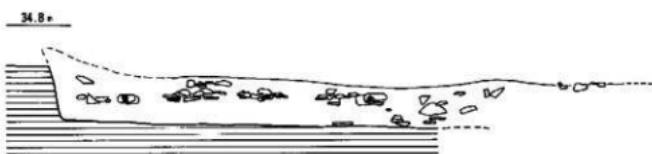
土坑

SK-D-007 (第36図)

SK-D-010の西に位置する土坑である。長さ412cm、幅122cm、深さ20cmを測る。

SK-D-010 (第36図)

SB-D-012の西に位置する土坑である。長さ253cm、幅153cm、深さ58cmを測る。遺物は瓦が出土している。



第36図 SK-D-007・009・010実測図 (1/40)



第37図 E区遺構配置図 (1/200)

5. E区の調査

据立柱建物

SB-E-003 (第38図)

特異な平面プランを有する建物跡である。遺構検出の際、平石の礎板をもつ柱穴群を結んだところ、多角形の平面プランを2重に確認することができた。さらに中央部に外径80~85cmで、中心に径25cmのピットを有する土坑を検出するに至った。(第39図)一段目の掘込の下端に配された16の縦は礎石や礎板を支える根石と考えられ、2段目の掘込は鎮壇具等を納める空間の可能性がある。このような視点で復原された建物が八角堂である。北東部はコンクリート製の基礎によって搅乱を受けているが、堂のプランは内外2重に柱が回っている。内外の柱穴は、中央の上坑から放射状に連関をもっていることから本来2重の構造を呈していたと考えられる。また外側の柱の対角線は長軸10.2m、短軸8.4mと南北に長く、東西に短いプランである。

SB-E-004 (第40図)

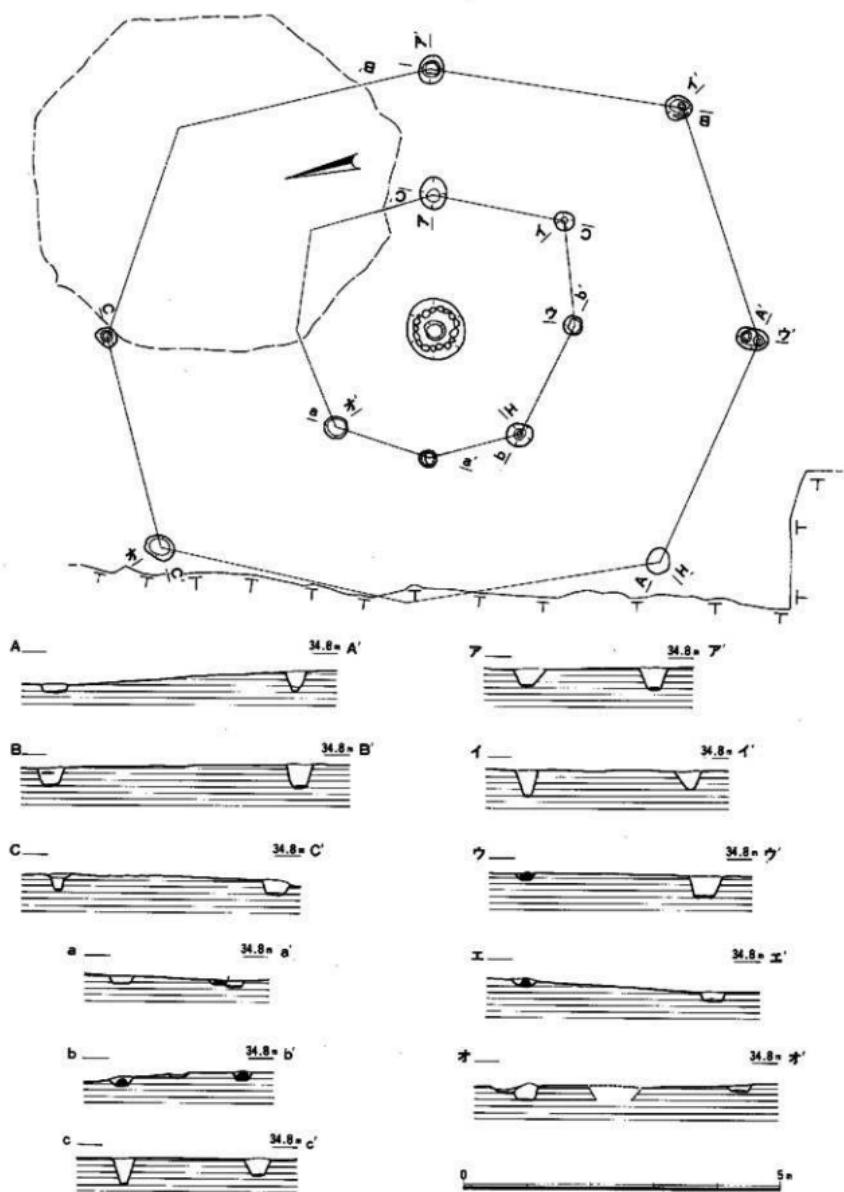
調査区北に位置する。2間×2間の純柱建物である。南北3.3m、東西3.2mを測る。柱穴は円形で、径50~60cm程度である。

SB-E-005 (第40図)

SB-E-004の東に位置する。2間×2間の純柱建物である。南北3.3m、東西3.3mを測る。柱穴は円形で、径40~60cm程度である。

SB-E-006 (第41図)

SB-E-003の南に位置する。2間×4間の建物である。梁行4.0m、桁行6.8mを測る。柱穴は円形



第38図 SB-E-003実測図 (1/80)

で、径30~40cm程度である。

SB-E-007 (第41図)

調査区西壁に切られて位置する。2間×2間の縦柱建物であるとおもわれる。南北4.1m、東西1.6m以上を測る。柱穴は円形で、径30~50cm程度である。

SB-E-008 (第41図)

調査区南西に位置する。2間×4間の建物である。梁行3.9m、桁行8.1mを測る。柱穴は円形で、径30~40cm程度である。

溝

SD-E-002 (第42図)

東西に延びる大型の溝である。SD-C-049、SD-F-002と連なるものである。幅2.1~2.6m、深さ60cm前後を測る。山土遺物は土師器、須恵器、白磁、青磁、瓦等がある。

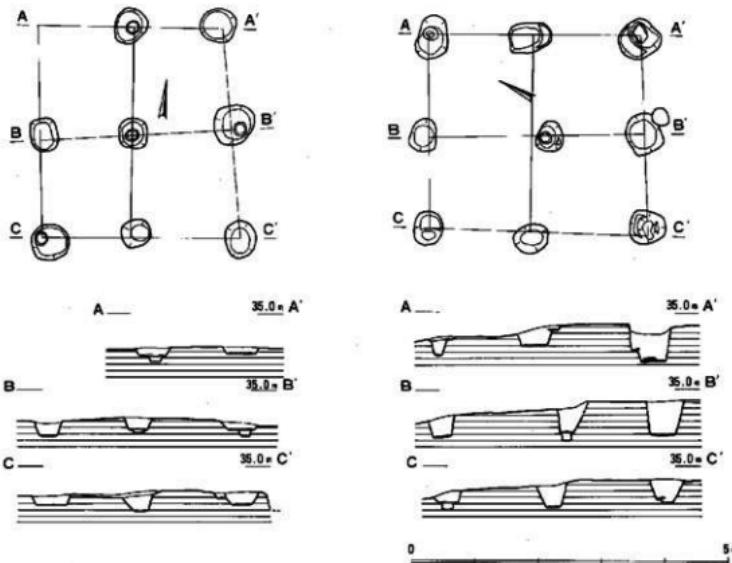
土坑

SK-E-001 (第43図)

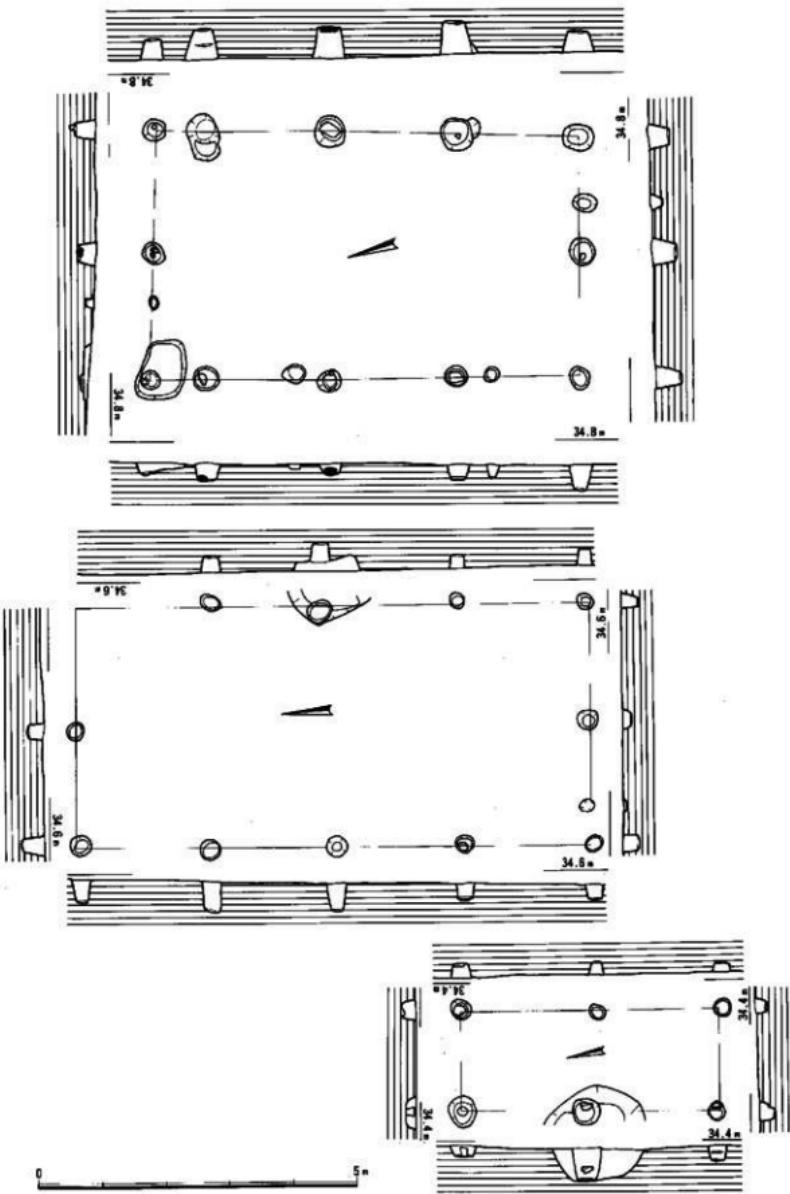
調査区東に位置する楕円形の土坑である。南北110cm、東西95cm、深さ35cmを測る。

SK-E-009 (第43図)

調査区の南西と西壁に切られて位置する円形の土坑である。南北163cm、東西140cm以上、深さ60cmを測る。



第40図 SB-E-004・005実測図 (1/80)



第41図 SB-E-006・007・008実測図 (1/80)

SK-E-010 (第43図)

SB-E-005の南に位置する楕円形の土坑である。長さ133cm、幅90cm、深さ48cmを測る。

SK-E-011 (第43図)

調査区南東に位置する円形の土坑である。南北133cm、東西124cm、深さ32cmを測る。

SK-E-012 (第43図)

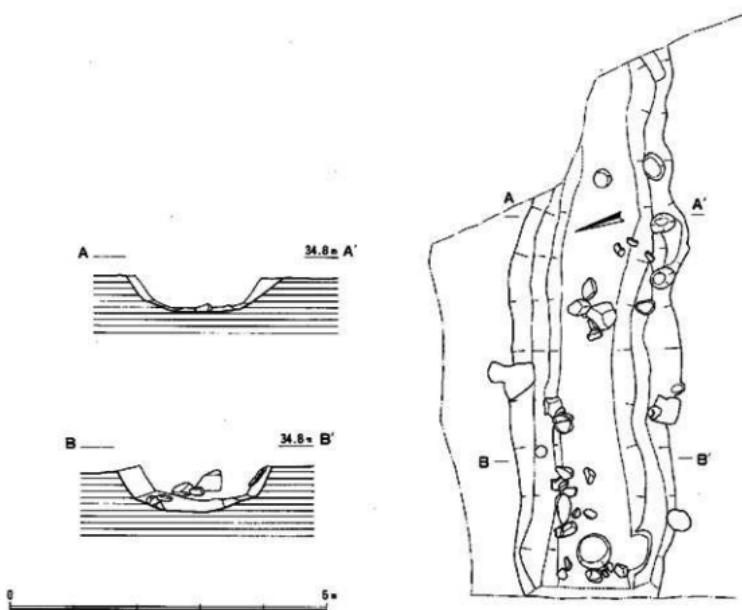
調査区南端に位置する円形の土坑である。南北191cm、東西171cm、深さ26cmを測る。

SK-E-013 (第43図)

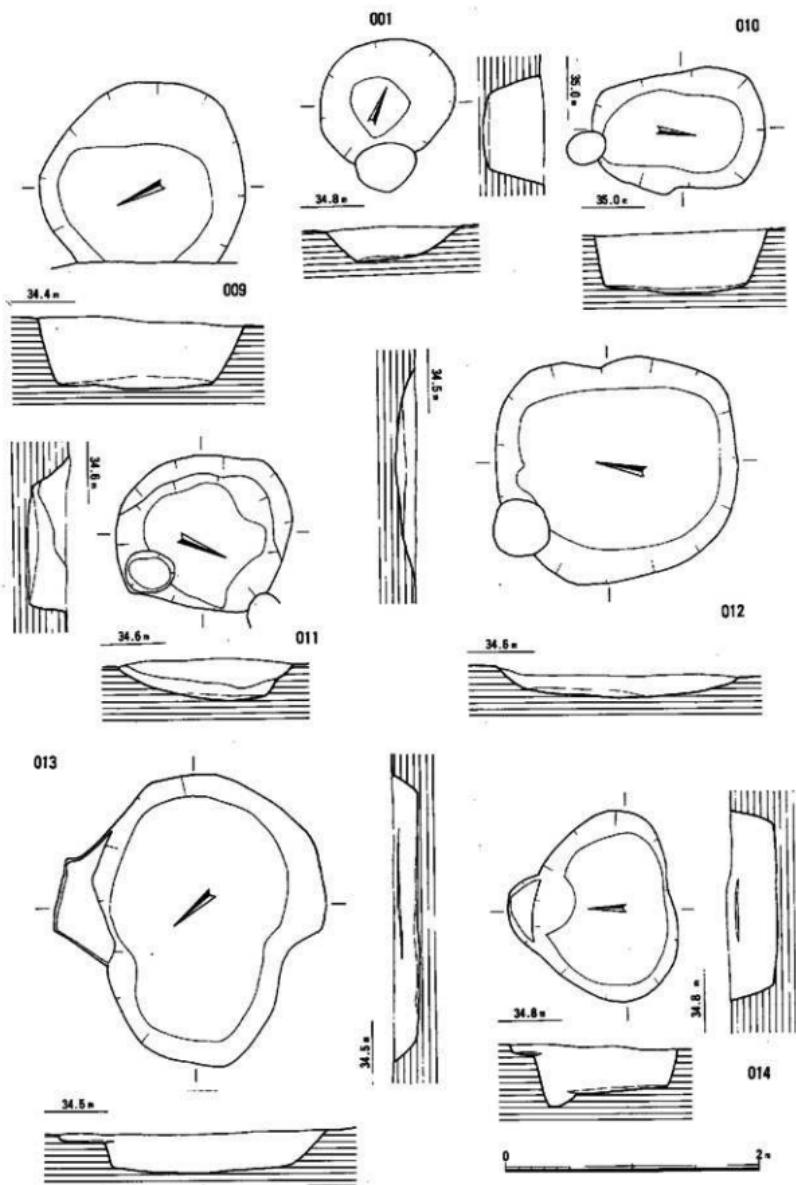
調査区南端に位置する楕円形の土坑で東に突出したテラスをもつ。長さ245cm、幅215cm、深さ31cmを測る。

SK-E-014 (第43図)

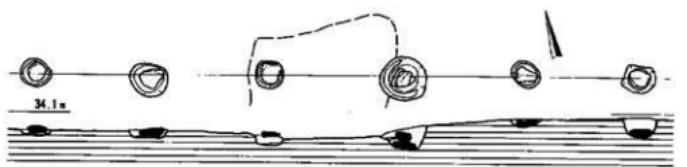
SB-E-008の北に位置する楕円形の土坑で北に突出したテラスと掘り込みをもつ。長さ150cm、幅132cm、深さ48cmを測る。



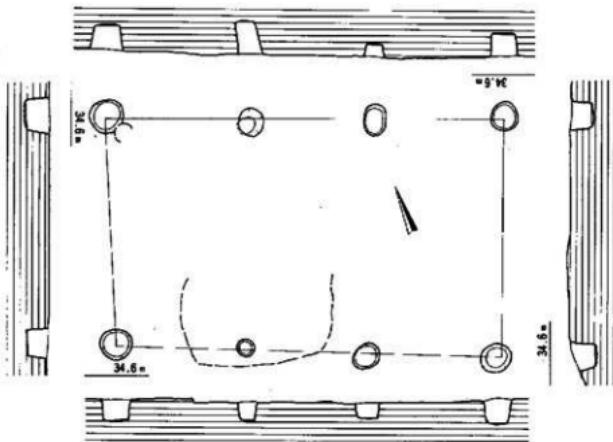
第42図 SD-E-002実測図 (1/80)



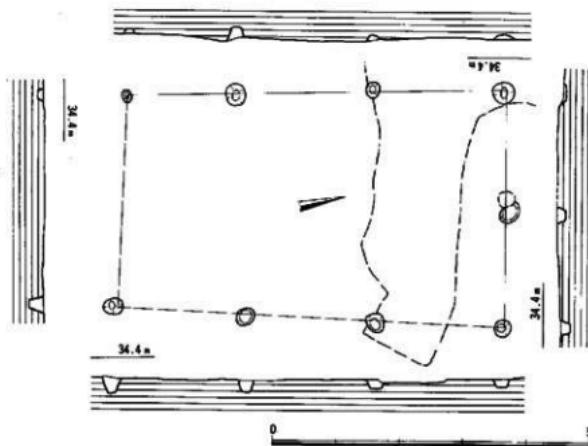
第43図 SK-E-001・009~014実測図 (1/80)



012

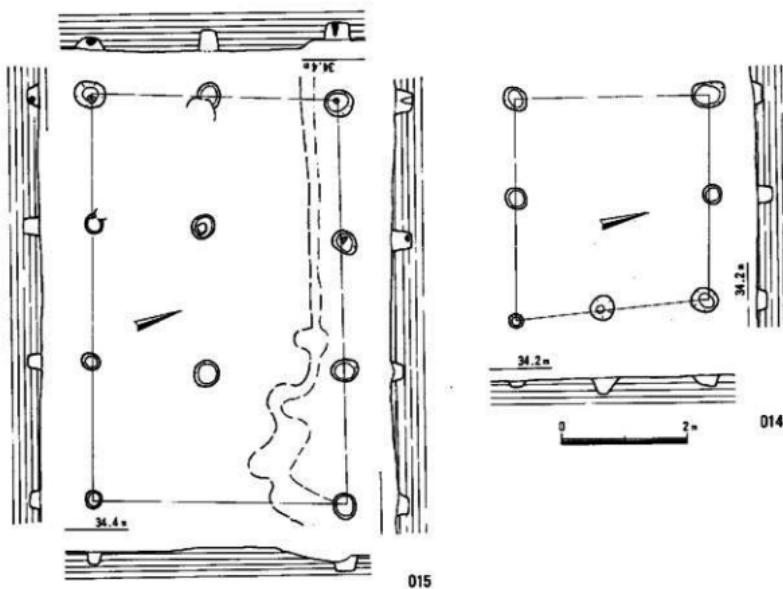


011



013

第44図 SB-F-011・012・013実測図 (1/80)



第45図 SB-F-014・015実測図 (1/80)

6. F区の調査

掘建柱建物

SB-F-011 (第44図)

調査区中央、SD-F-002の南に位置する。1間×3間の建物である。梁行3.6m、桁行6mを測る。柱穴は円形を中心とし、径50cm程度である。

SB-F-012 (第44図)

調査区南に位置する。?間×5間の建物である。現存する柱穴は根石が露出するものもあり、本来南側に延びる建物が削平されたと考えられる。東西9.6mを測る。柱穴は円形を中心とし、径50cm程度である。

SB-F-013 (第44図)

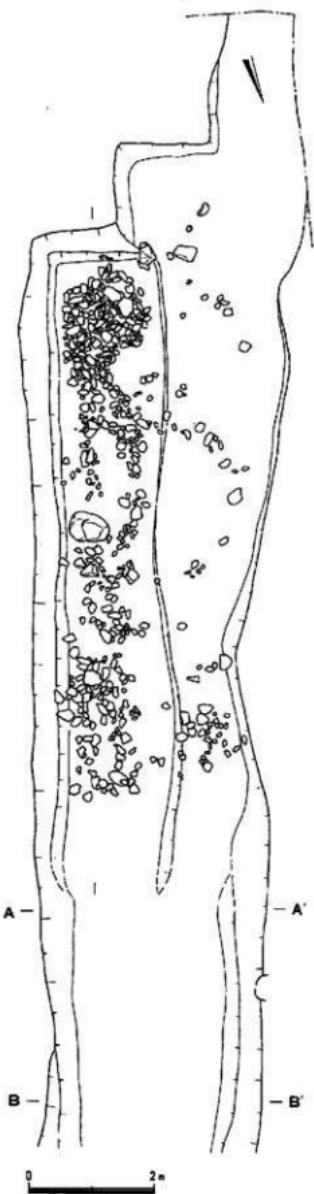
調査区南に位置する。2間×3間の建物である。梁行3.6m、桁行6mを測る。柱穴は円形で、径30cm程度である。

SB-F-014 (第45図)

SB-F-012の北に位置する。2間×2間の總柱建物と思われる。南北3m、東西3.3mを測る。柱穴は円形で、径30~40cm程度である。

SB-F-015 (第45図)

SB-F-011と切り合って位置する。2間×3間の總柱建物と思われる。梁行3.9m、桁行6.4mを測る。柱穴は円形で、根石をもつものがある。径30~50cm程度である。



溝

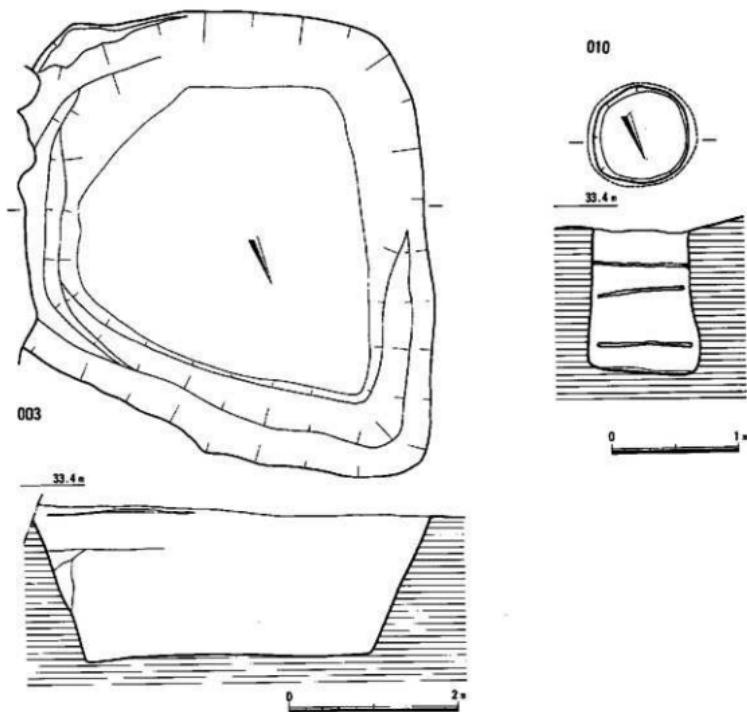
SD-F-001 (第46図)

南北方向に延びる大型の溝である。幅3.5mを測る。南に向かい底が高くなり、石が集中する部分がある。出土遺物は須恵器の円面鏡（3）土師皿、瓦、石鍋、下駄（4）等がある。

SD-F-002

SD-E-002と同一の溝である。SD-F-001に直交して接続する。出土遺物は土師皿、須恵器（5）等がある。（5）は壊で内面に「壊」と刻書される。

第46図 SD-F-001実測図 (1/80)



第47図 SE-F-003・010実測図 (1/60)

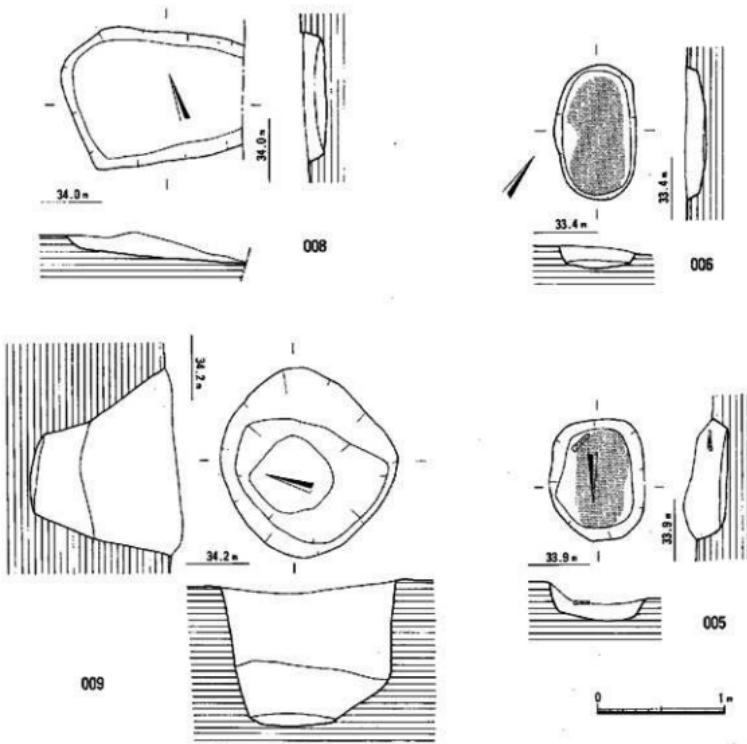
井戸

SE-F-003 (第47図)

調査区に位置する方形の井戸である。南北530cm、東西約470cm、深さ170cmを測る。

SE-F-010 (第47図)

SE-F-003を切る桶巻づくりの井戸である。掘り方は判然としなかった。径75cm、深さ170cmを測る。



第48図 SK-F 005~009実測図 (1/40)

土坑

SK-F-005 (第48図)

調査区北東に位置する小判形の土坑である。埋土最下層は炭化物であるが、壁は焼けていない。長さ98cm、幅74cm、深さ22cmを測る。出土物は木炭が出土している。

SK-F-006 (第48図)

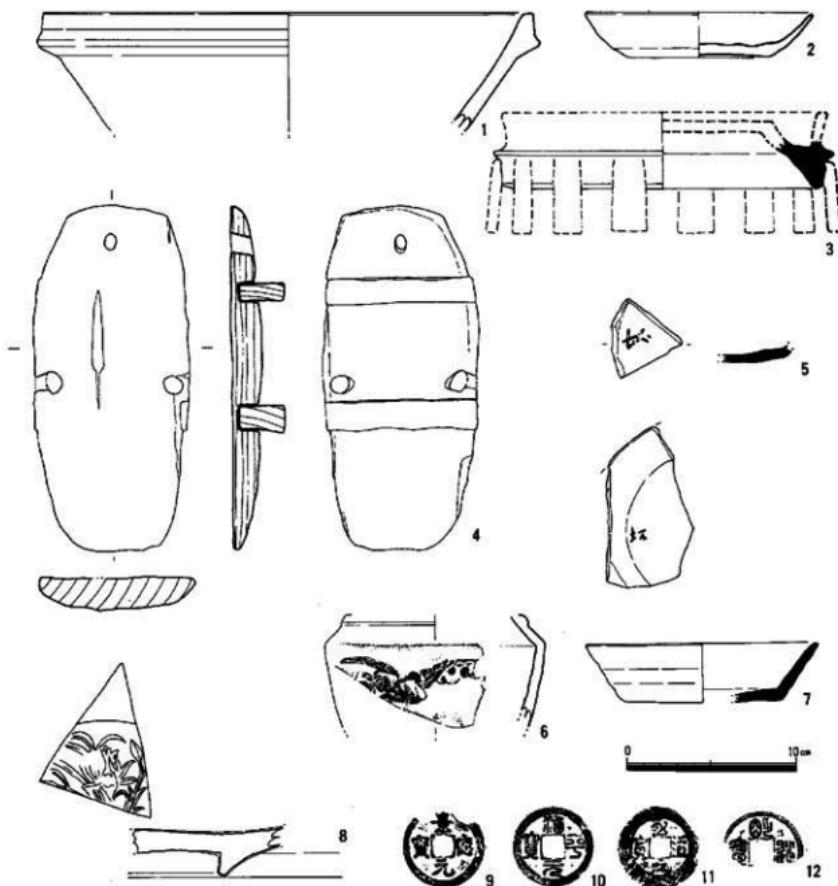
調査区北東に位置する小判形のプランを有する土坑である。埋土最下層は炭化物であるが、壁は焼けていない。長さ105cm、幅64cm、深さ18cmを測る。出土遺物は無かった。

SK-F-008 (第48図)

調査区北東に位置する長方形の土坑である。SD-F-001に切られる。長さ140cm以上、幅110cm、深さ18cmを測る。出土遺物は無かった。

SK-F-009 (第48図)

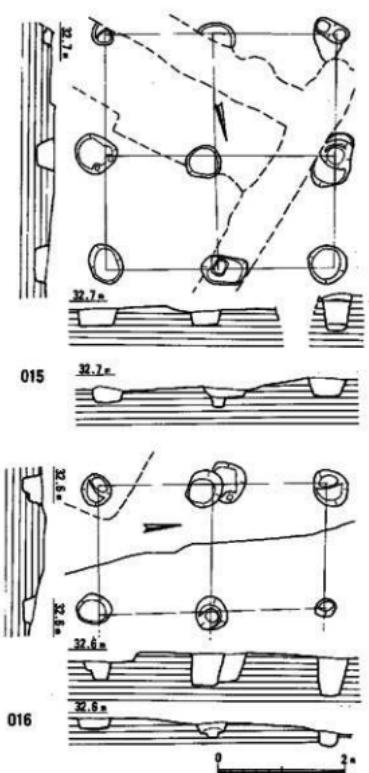
SD-F-002の北に位置する楕円形の土坑である。南北140cm、東西150cm、深さ118cmを測る。出土遺物は無かった。



第49図 遺物実測図 (1/3)

その他の遺物 (第49図)

(6) は包含層出土。瓦質の壺であろうか。最大径13.0cmを測る。調整は内外ともにヨコナデを施す。体部に鶴の文様を貼り付けている。(7) は包含層出土。須恵器の壺である。復原口徑13.4cm、器高3.4cmを測る。調整は内外ともにヨコナデを施す。底部内面隅に「壊」の字が刻書されている。(8) は包含層出土。青磁の鉢である。見込みに印花文を施す。(9)～(12) は宋銭である。包含層出土。全部で7枚出土したが残りのよい4枚を掲載する。(9) は「景德元宝」、(10) は「治平元宝」、(11) は「至道元宝」、(12) は「明道元宝」である。



第50図 SB-G-015・016実測図 (1/80)

SK-G-003 (第51図)

SK-G-002の西に位置する長方形の土坑である。長さ155cm、幅73cm、深さ56cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師器、須恵器、白磁の細片、鉄滓が出土している。

SK-G-004 (第52図)

調査区北東に位置する長方形の土坑である。長さ196cm、幅72cm、深さ52cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師器、須恵器、青磁の細片が出土している。

SK-G-005 (第51図)

SK-G-001とSK-G-004の間に位置する長方形の土坑である。長さ305cm、幅85cm、深さ49cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師器、須恵器、白磁の細片、鉄滓が出土している。

7. G 区の調査

獨立柱建物

SB-G-015 (第50図)

調査区北に位置する2間×2間の独立柱の建物である。南北4.1m、東西4.1mを測る。柱穴の平面プランは円形を中心とし、径60~70cm程度である。出土遺物は土師器の小片である。

SB-G-016 (第50図)

SB-G-015の東に位置する2間×2間の独立柱と考えられる建物である。南北4.2m、東西は東部が削平のため不明であるが同程度の長さか。柱穴の平面プランは円形を中心とし、径60cm程度である。出土遺物は土師器の小片である。

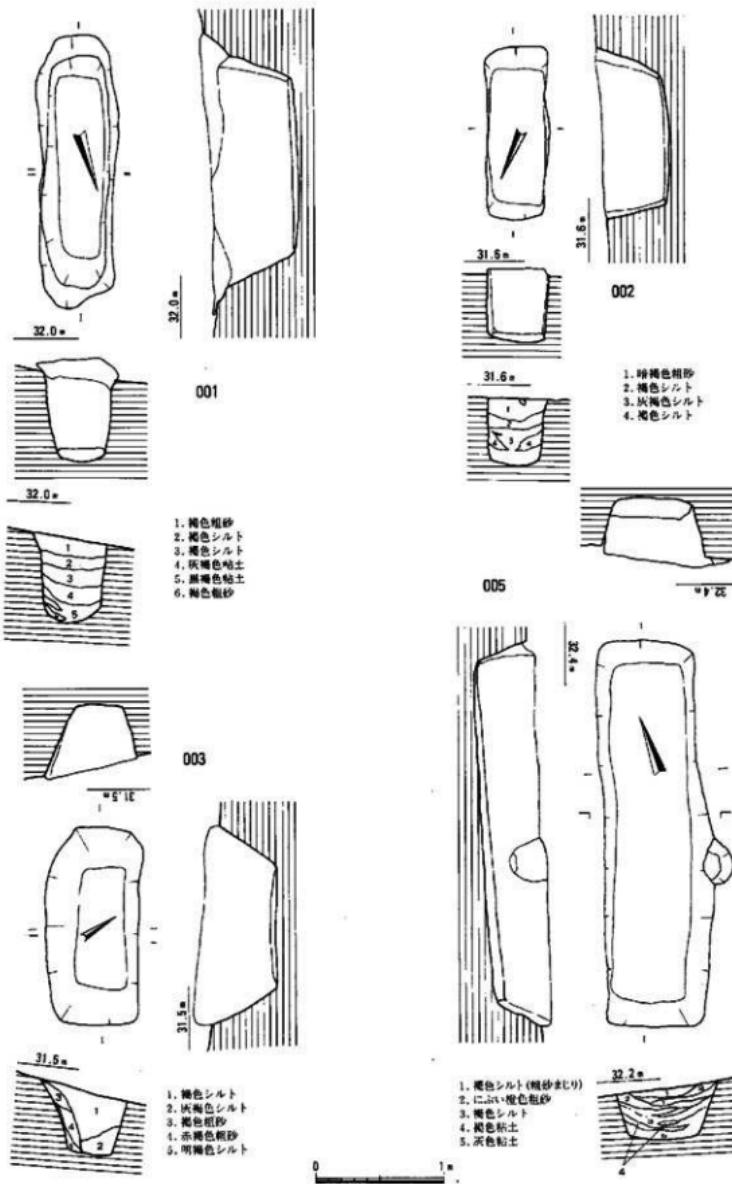
土坑

SK-G-001 (第51図)

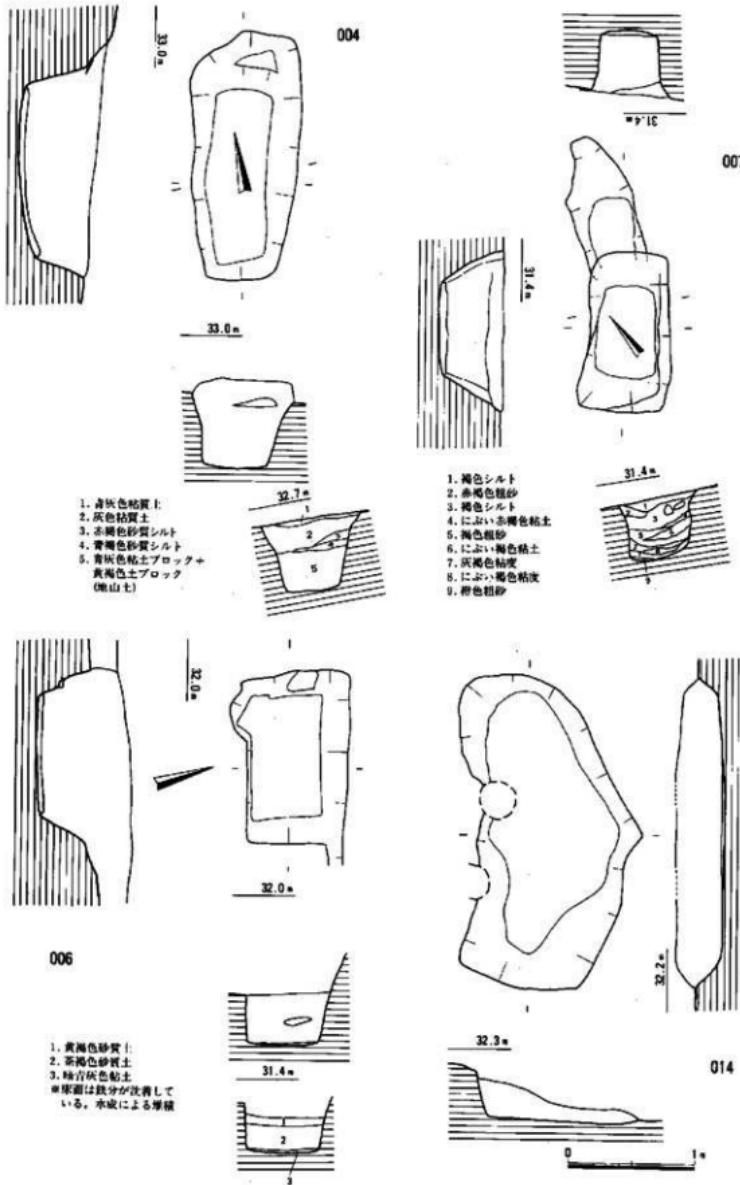
調査区北の谷部に位置する長方形の土坑である。長さ213cm、幅56cm、深さ60cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師器、須恵器の細片等が出土している。

SK-G-002 (第51図)

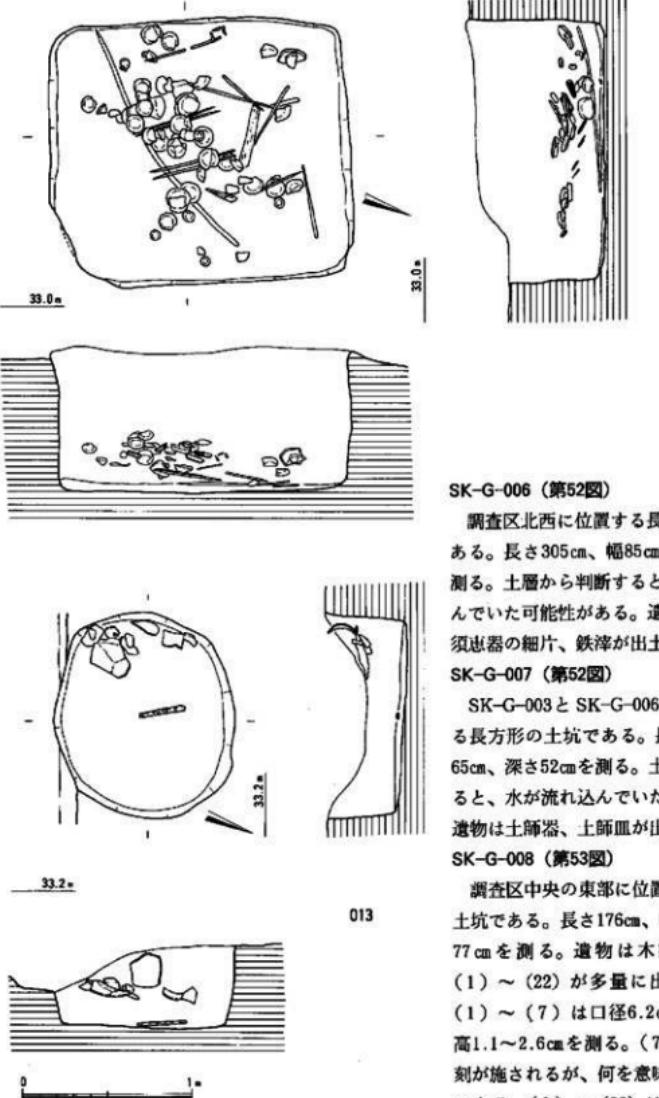
SK-G-001に西に位置する長方形の土坑である。長さ136cm、幅50cm、深さ52cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。



第51図 SK-G-001・002・003・005実測図 (1/40)



第52図 SK-G-004・006・007・014実測図 (1/40)



第53図 SK-G-008・013実測図 (1/30)

SK-G-006 (第52図)

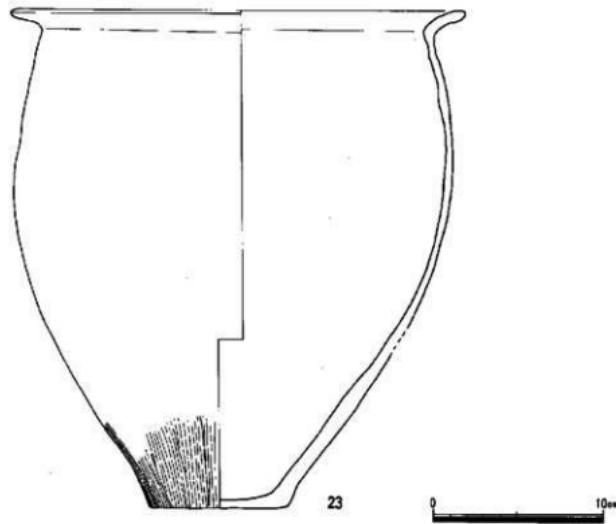
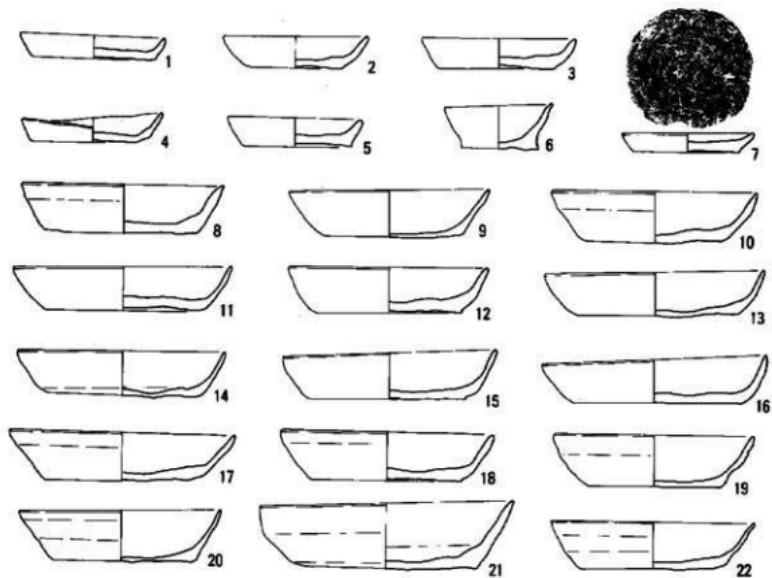
調査区北西に位置する長方形の土坑である。長さ305cm、幅85cm、深さ49cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師皿、須恵器の細片、鉄滓が出土している。

SK-G-007 (第52図)

SK-G-003とSK-G-006の間に位置する長方形の土坑である。長さ125cm、幅65cm、深さ52cmを測る。土層から判断すると、水が流れ込んでいた可能性がある。遺物は土師器、土師皿が出土している。

SK-G-008 (第53図)

調査区中央の東部に位置する長方形の土坑である。長さ176cm、幅155cm、深さ77cmを測る。遺物は木製品、土師皿(1)～(22)が多量に出土している。(1)～(7)は口径6.2cm～9.1cm、器高1.1～2.6cmを測る。(7)は内面に線刻が施されるが、何を意味するかは不明である。(8)～(22)は口径11.9cm～14.9cm、器高2.7～3.1cmを測る。



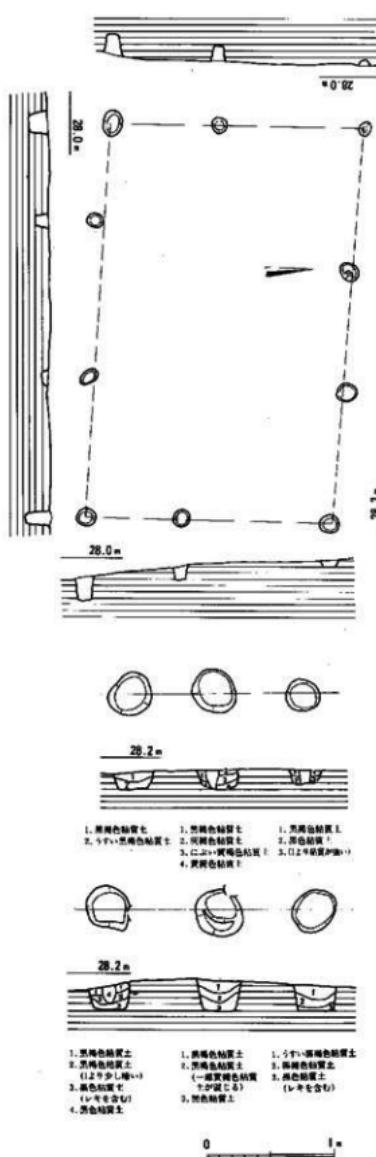
第54図 遺物実測図 (1/3)

SK-G-013（第53図）

調査区中央の西部に位置する楕円形の土坑である。長さ120cm、幅107cm、深さ47cmを測る。遺物は弥生土器の壺(23)、須恵器、木炭が出土している。(23)は口径26.7cm、器高29.3cmを測る。口縁部は「く」字状を呈し、胴部はやや歪んでいる。底部は薄くつくられる。調整は器壁が全体に粗れてい るため不明であるが、外面の底部付近は縦方向の粗いハケメが残る。

SK-G-014（第52図）

SB-G-016に切られて位置する不整形の土坑である。長さ248cm、幅130cm、深さ41cmを測る。出土 遺物は無かった。



第55図 SB-H-011・012・013実測図 (1/80)

8. H区の調査

掘建柱建物

SB-H-011 (第55図)

調査区西に位置する。2間×3間の建物である。疊んだ平面形を呈す。梁行4.2m、桁行6.2mを測る。柱穴は円形で、径20～30cm程度である。

SB-H-012 (第55図)

調査区西端に位置する。?間×3間の建物であろうか。これに連なる柱穴は検出できなかった。柱間2.8mを測る。柱穴は円形で、径50～60cm程度である。

SB-H-013 (第55図)

調査区西端に位置する。?間×3間の建物であろうか。これに連なる柱穴は検出できなかった。柱間3.3mを測る。柱穴は円形で、径50～60cm程度である。

井戸

SE-H-002 (第56図)

調査区東に位置する方形の井戸である。大型の礫にあたったためか掘削途中で止めている。南北271cm、東西254cm、深さ150cmを測る。

SE-H-014 (第56図)

SE-H-002の東に位置する楕円形の井戸である。南北430cm、東西440cm、深さ218cmを測る。

土坑

SK-H-004 (第57図)

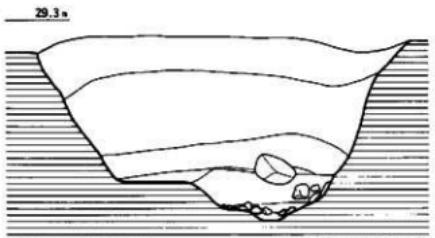
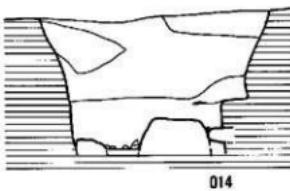
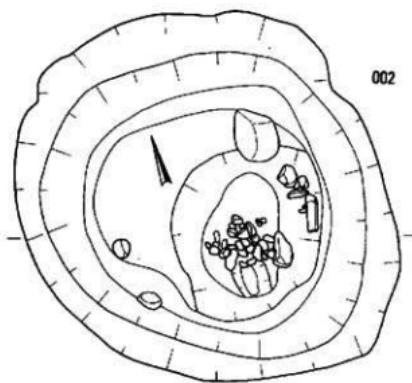
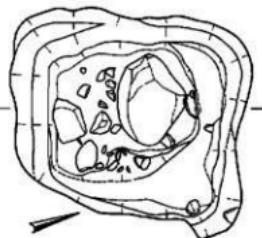
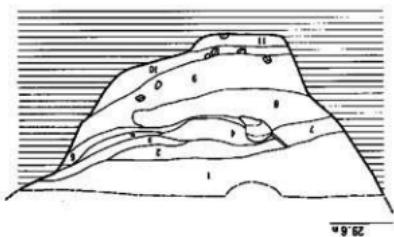
調査区中央の西部に位置する楕円形の土坑である。長さ cm、幅 cm、深さ35cmを測る。遺物は土師器、須恵器、土師皿が出土している。

SK-H-005 (第57図)

SK-H-004の北に位置する不整形の土坑である。長さ412cm、幅105cm、深さ35cmを測る。遺物は土師器の細片が出土している。

SK-H-006 (第57図)

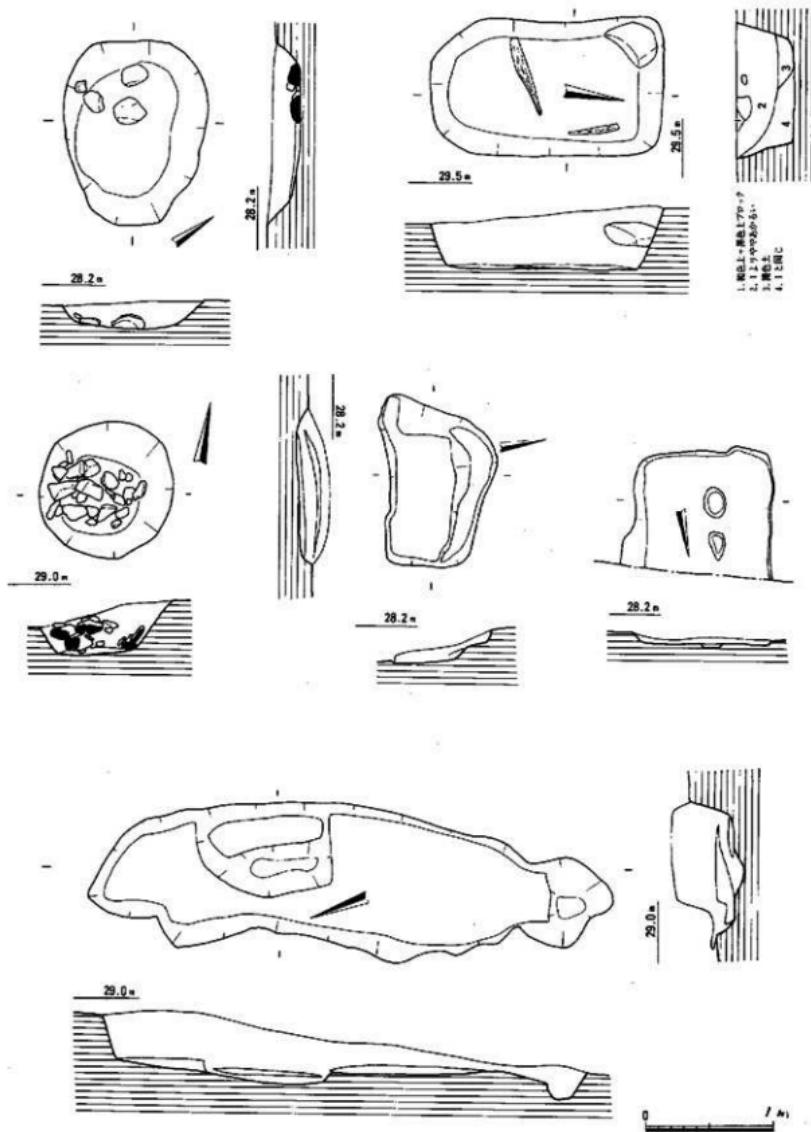
SK-H-005の西に位置する楕円形の土坑



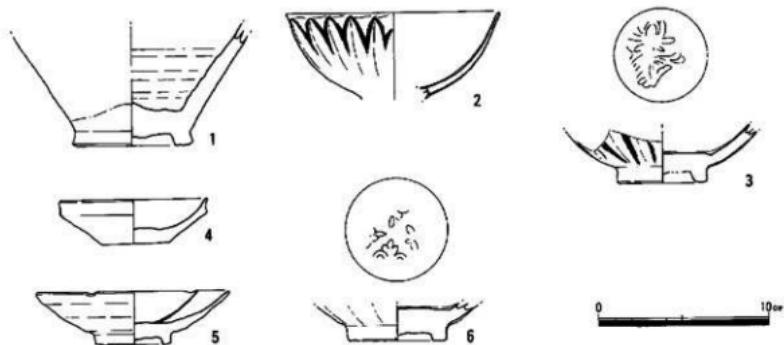
1. 棕色土
2. 红黄灰色土
3. 绿灰色粘土
4. 绿黄灰色土
5. 绿灰色粘质土
6. 绿灰色粘土
7. 黄褐色胶
8. 黄灰色砂
9. 塔状色粘质土
10. 黑色粘质土
11. 灰色砂

0 2'

第66图 SE H 002·014实测图 (1/40)



第57図 SK-H-004~007・204実測図 (1/40)



第58図 遺物実測図 (1/3)

である。長さ139cm、幅112cm、深さ20cmを測る。遺物は土師器、須恵器の細片、鉄滓が出土している。
SK-H-007 (第57図)

SK-H-004の南に位置する土坑である。北側にテラスを有する。長さ126cm、幅88cm、深さ26cmを測る。遺物は土師器、須恵器の細片、青磁碗、炉壁?が出土している。

SK-H-203 (第57図)

SB-H-011の東に位置する長方形の土坑である。長さ185cm、幅108cm、深さ49cmを測る。遺物は土師器、須恵器の細片、青磁碗、炉壁?が出土している。

SK-H-204 (第53図)

SB-H-012の北に位置する土坑である。東西117cm、深さ8cmを測る。遺物は土師皿の細片、炉壁状の粘土塊が出土している。

その他の出土遺物

(1) は白磁の壺である。高台径7.2cmを測る。釉は高台部以外に施す。(2) は青磁の椀である。復原口径12.8cmを測る。体部外面に鎬連弁を配する。(3) は青磁の椀である。復原高台径5.2cmを測る。体部外面に鎬連弁を配する。見込みには印花文が施される。(4) は青磁の皿である。口径9.4cm、器高2.7cmを測る。釉は外面口縁部と内面に施す。(5) は青磁の皿である。口径11.3cm、器高3.2cmを測る。見込みに印字がある。(5) は青磁の椀である。復元高台径5.8cmを測る。見込みには印花文が施される。

9. I区の調査

調査の概要 独立丘陵の南裾部に位置しており、遺構は裾に沿うように分布している。調査区内で竪穴式住居4基、平地式住居3基、井戸1基、溝3条、土坑21基、掘立柱建物3棟、焼土坑4基を確認した。

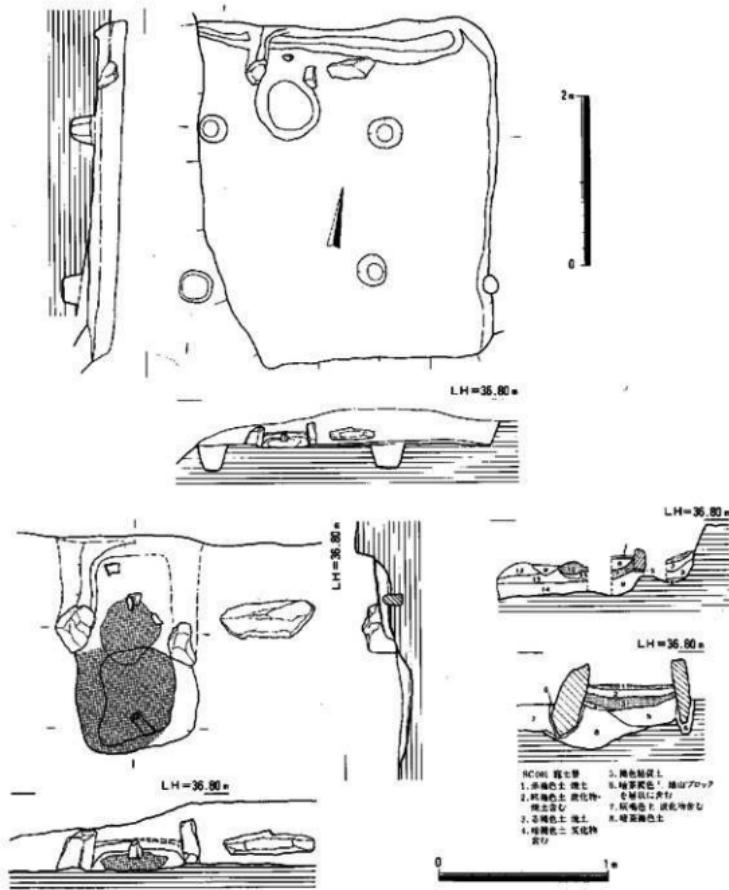
2 遺構と遺物

1) 竪穴式住居

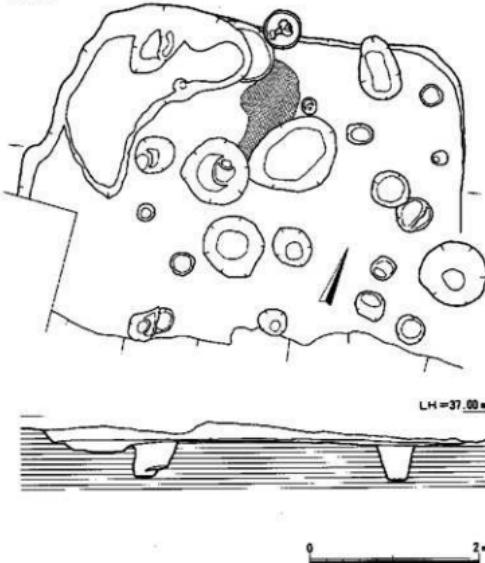
SC-I-001 (第59図) 調査区の中央に位置する。平面形は隅丸の方形を呈する。西側と南側は後世の造成で削平されており、現状で東西348cm、南北401cmを測る。床面からの残存高は24cmである。北

壁沿いに溝を有する。主柱穴は4本で径33~40cm、深さ19~44cm、柱痕跡は11~14cmを測る。柱間は165~206cmである。北壁中央部に窓を持つ。幅84cm、奥行き86cmを測る。窓開き口は石を組んでいたと思われるが、上石が1mほど東側に動いているのは住居廃棄時に壊されたのであろう。窓内中央には石の支脚が置かれ、その入り口側は赤変が著しい。窓口付近で器台が出土した。土層断面では焼土面は2面観察される。袖部も黄褐色粘質土の中に焼土ブロックや炭化物を含んでおり、最低一回は作り直されている。

出土遺物（第63図） 001は土師器壺である。復元口径16.8cmを測る。外面胴部は斜方向の刷毛目、口縁は横ナデを施す。002は須心器壺である。外面赤褐色を呈す。全面にナデを施す。



第59図 SC001実測図 (1/30 + 1/60)



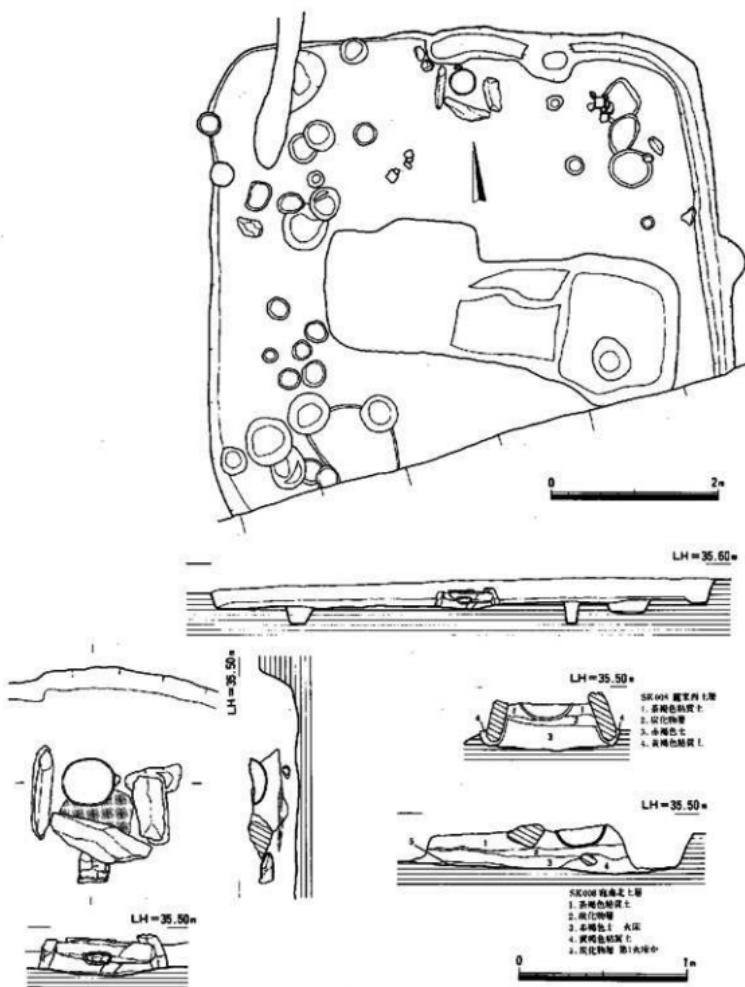
第60図 SC002実測図(1/60)

SC-I-002(第60図) 調査区中央に位置する。平面形は隅丸の方形を呈す。南側が削平されており、現状で南北392cm、東西534cmを測る。床面からの残存高は11cmである。北壁中央部に焼土が分布しており竈の痕跡と思われる。主柱穴は4本で径41~46cm、深さ24~35cmを測る。柱間は約290cmである。出土遺物には煤がついた壺片がある。

SC-I-008(第61図) 調査区の南西側に位置し、SE024・SK023に切られる。平面形は方形を呈するが南端は削平を受け、現状で東西600cm、南北568cmを測る。床面からの残存高は23cmである。主柱穴は明確ではないが4本柱と思われる。北壁中央に竈を持つ。幅80cm、奥行き130cmを測る。焚き口に石を組んでおりSC001とはほぼ同じ構造である。竈内中央に石の支脚を持つ。その上に土師器大壺の底部が残っており、焚き口には器高20cmほどの土師壺が横転していた。竈内には炭化物層が2面観察され、一度嵩上げが行われている。焚き口の石組みは上石が動いているが、住居遺棄後の自然な崩落か祭祀によるものかは明確ではない。

出土遺物(第63図) 003~005は須恵器である。003は壺蓋である。口径13.4cm、器高4.2cmを測る。外面の約半分に自然釉がかかる。004は壺である。復元口径13.5cm、器高4.2cmを測る。焼成不良で磨滅著しい。005は長頸壺である。胴部最大径12.2cmを測る。内面頸部には縱方位の指頭痕がある。外面上半と内面頸部に釉がかかる。006は土師器壺である。口径9.4cm、器高13.2cmを測る。全体に指オサエで成形した後ナデを施す。007は土師器壺である。口径22.6cmを測る。外面胴部にタタキ痕が残る。胴部外面に薄く煤が付着している。

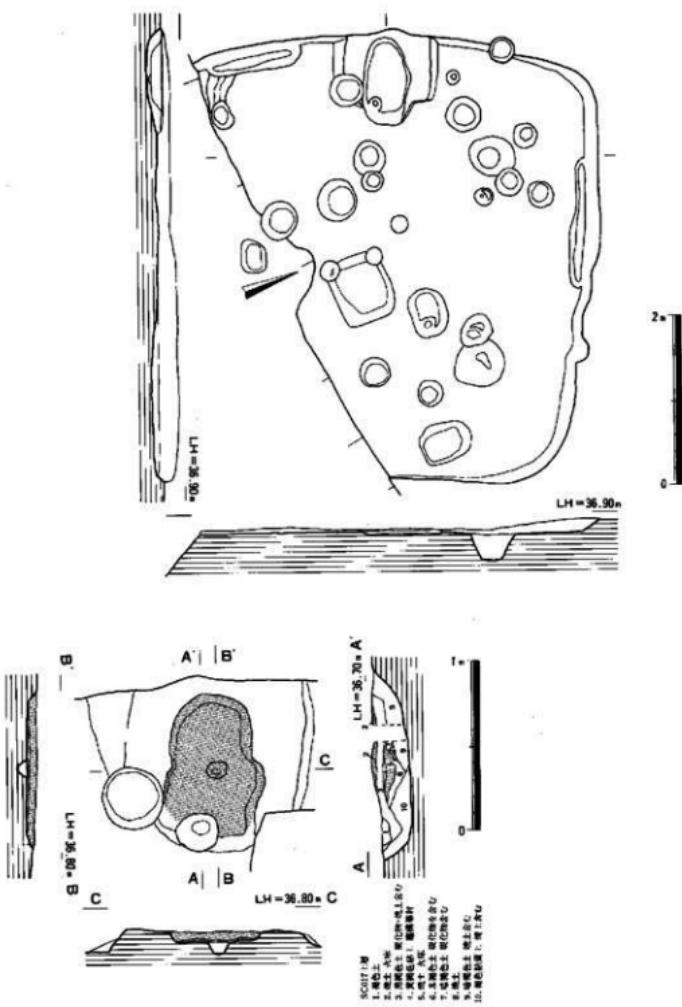
SC-I-017(第62図) SC002の東側に位置する。平面形は隅丸の方形を呈するが、南側は削平をうけており現状で東西526cm、南北473cmを測る。床面からの残存高は19cmを測る。北側中央部と南西隅に壁溝をもつ。主柱穴は明確ではない。西壁中央部に竈をもつ。竈は現状で幅132cm、奥行き103cmを



第61図 SC008実測図 (1/30・1/60)

測る。中央部の $83 \times 54\text{cm}$ の窪んだ部分は全体に熱をうけ赤変している。構築材は黄褐色と暗褐色の粘土であるが、炭化物や焼土ブロックを含んでおり、一度作り直されている。窓内中央に径9cmの掘りこみを検出した。支柱の抜き跡と考えられ、住居廃棄時に窓を破壊する火落としの祭祀が想定される。

出土遺物（第63図）。008は須恵器環である。灰色を呈す。009は須恵器高環脚部である。暗紫色で底

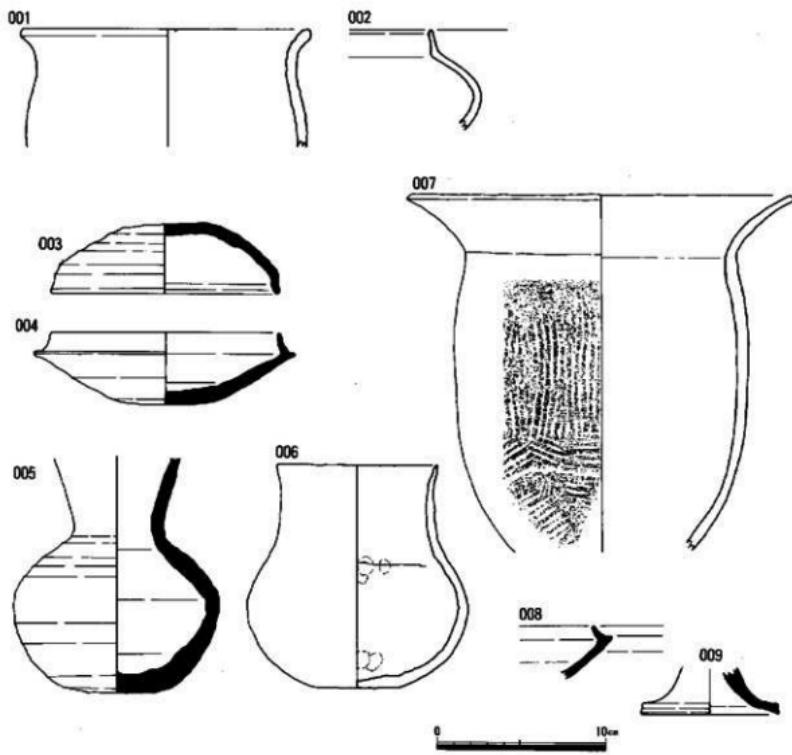


第62図 SC017実測図 (1/30・1/60)

径8.1cmを測る。胎土は精良で焼成も良好である。

掘立柱建物

SB-I-01(第64図) 調査区の西端に位置する。西侧が調査区外に延びるが2間×2間の総柱建物と思われる。現状で東西3.5m、南北8.5mを測る。柱穴は円形を呈し、径42~59cm、深さ34~49cmを測る。



第63図 遺物実測図 (1/3)

SB-I-02 (第64図) 調査区の中央に位置する。2間×2間の側柱建物で長軸をほぼ南北にとる。東西314cm、南北384cm、柱間隔152~202mを測る。柱穴は円形もしくは不正形を呈し、径50~69cm、深さ9~47cmを測る。

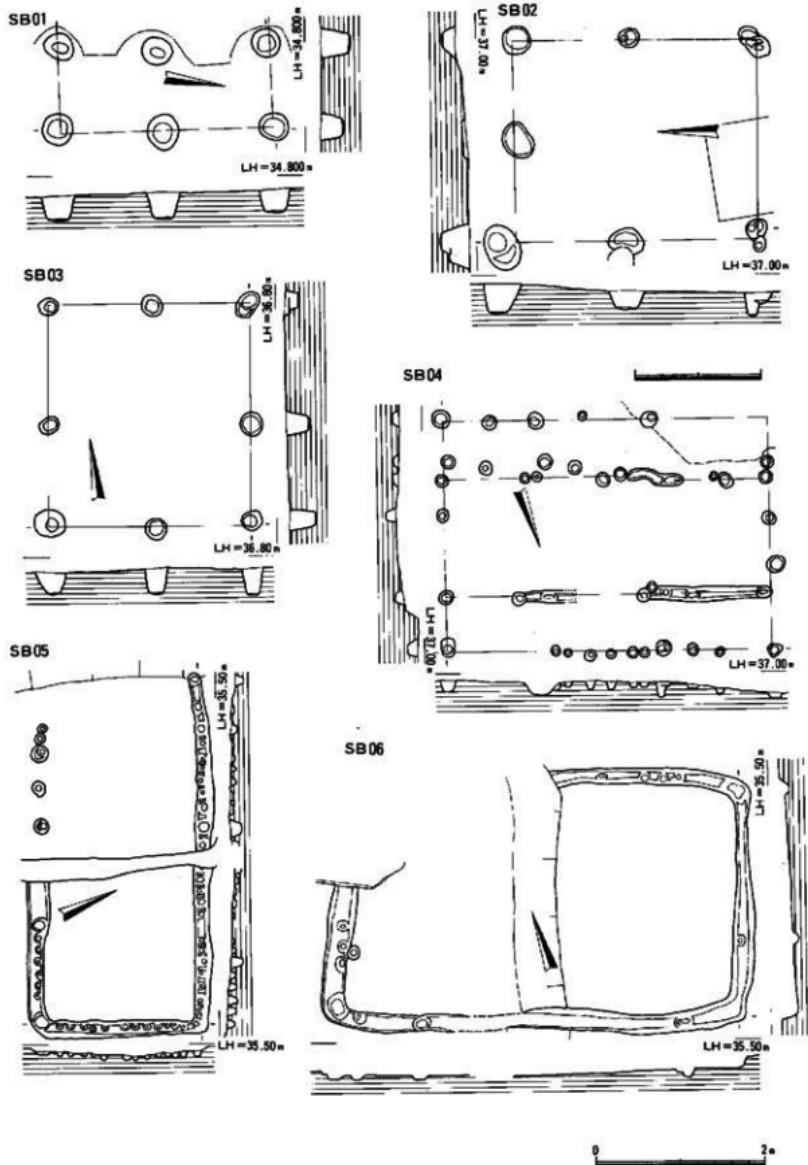
SB-I-03 (第64図) SB02の東側に位置する。平面が2間×2間の正方形を呈す側柱建物である。東西317cm、南北347cm、柱間隔は芯々で147~163mを測る。柱穴は円形で径31~47cm、深さ22~39cmを測る。

平地式住居 調査区の西端部で3軒検出した。幅20~30cmの溝の中に径10cm前後の小穴が不規則に並ぶ。同じような溝は調査区全体に分布するので多くの平地式住居が存在したものと思われる。

SB-I-04 (第64図) 調査区の北西部に位置する。削平により溝は一部しか残っていない。東西640cm、南北460cmを測る。2列の内壁により3区画に分けられる。

SB-I-05 (第64図) 調査区の西側に位置する。西端は削平され残っていない。現状で東西668cm、南北363cmを測る。幅25cmから42cmの溝の中に径10cm前後の柱穴が並ぶ。1mおきに大きめの柱穴がみられる。小穴は木舞の基礎とも考えられ、土壠の可能性も考えられる。

SB-I-06 (第64図) SB05を切る。北西端は削平され残存しない。東西820cm、南北490cmを測る。



第64図 桁立柱建物・平地式住居実測図 (1/80・1/100)

溝の幅は40cm前後を測る。柱穴の数は少ない。

土坑

SK-I-003 (第65図) SC001の東側に位置する。平面形は円形を呈し、径102cm、深さ51cmを測る。断面は逆台形で東西両側に浅い掘り込みをもつ。覆土は暗茶褐色土で、最下層は地山の橙色土が層状に含まれる。

SK-I-009 (第65図) 調査区の西側に位置する。平地式住居らしき溝に切られる。平面形は長方形を呈し、長径206cm、短径133cm、深さ27cmを測る。断面は箱形である。床面から僅かに浮いた状態で20~30cmの角礫を含む。ほぼ全部の礫の2~3面が焼けている。覆土は焼土坑の堆積によく似ている。出土遺物には素焼きの上器小片がある。

SK-I-010 (第65図) 調査区の西側に位置し、SC008を切る。平面形は円形を呈し、径31cm、深さ9cmを測る。断面は逆台形で覆土は上下2層に分かれる。上層は暗茶褐色土で鉄滓・炭化物を多く含み、下層は暗褐色で白色砂を多く含む。小銀冶の炉か。

SK-I-011 (第67図) 調査区の北西に位置する。ほぼ同時期の土坑が複数切り合っている。覆土中から多数の土師皿が出土しており、当時の祭祀場であろうか。土坑群は西にながら連なり、北側の山裾に沿うような形をとる。一つ一つの土坑は隅丸の方形で長径は120~200cm前後、深さは40cmを測る。断面形は浅皿状を呈す。覆土は黄褐色土と灰褐色土が多く、焼土や炭化物を多く含み、レンズ状の堆積を呈す。

出土遺物 (第68図) 010~017は土師壺である。磨滅で判明しないものを除くとすべて糸切りで、口径と器高は010が12.2cm・2.6cm、011が12.6cm・2.8cm、012が12.8cm・2.2cm、013が12.3cm・3.2cm、014が10.4cm・2.6cm、015が11.7cm・2.7cm、016が12.4cm・2.35cm、017が11.8cm・3.0cmを測る。018~022は土師皿である。これも底部はすべて糸切りで、板状圧痕がつく破片も多く見られる。口径と器高は018が8.5cm・1.6cm、019が8.2cm・1.4cm、020が7.9cm・1.1cm、021が8.6cm・1.7cm、022が5.7cm・1.15cmを測る。023は白磁の小瓶である。復元口径5.2cm、器高3.2cmを測る。釉は極めて薄い。蓋付きと高台内、それと高台外の一部が無釉である。

SK-I-012 (第65図) 調査区西側部のSK026の東に位置する。南側を削平されており、現状で長径166cm、短径98cm、深さ40cmを測る。断面は逆台形を呈す。

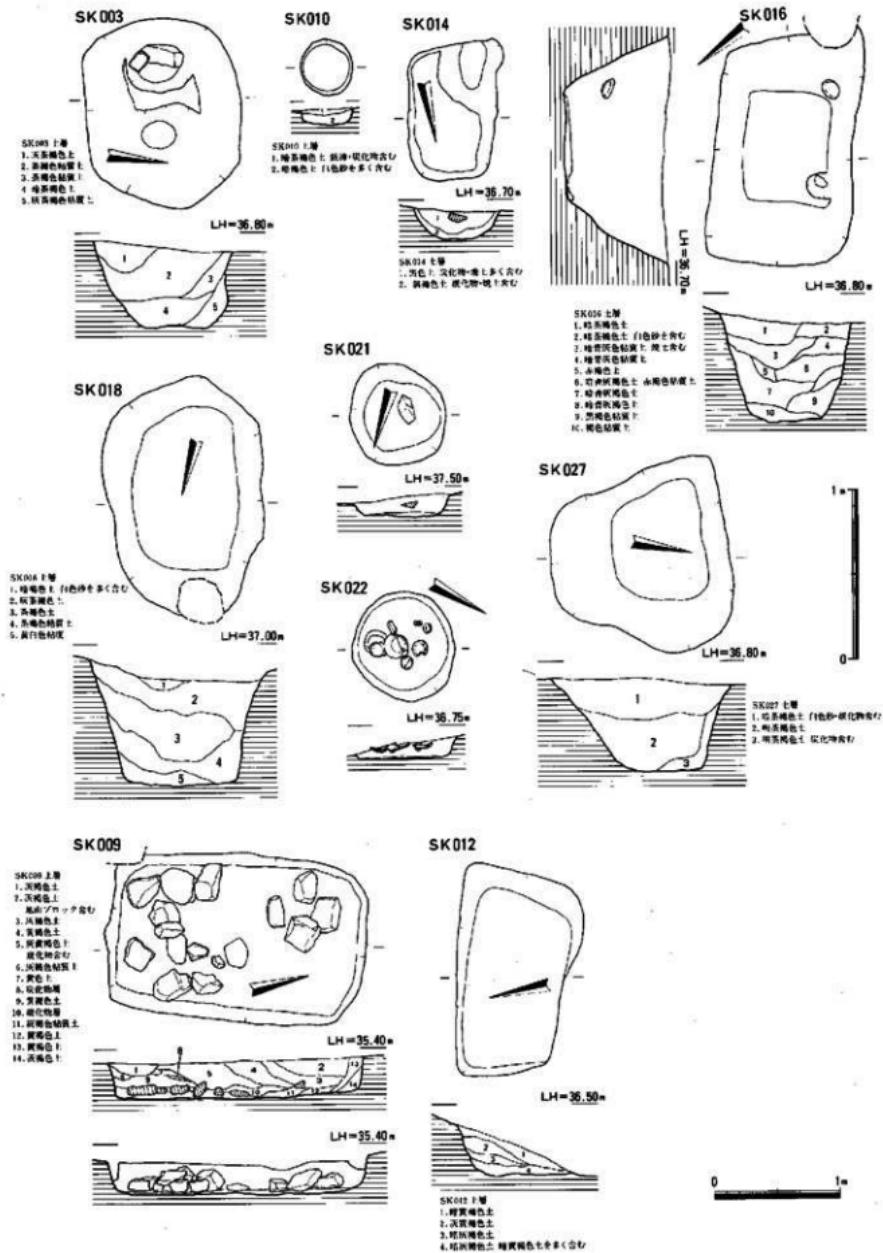
SK-I-013 (第65図) SK012の東側に位置し、SK014に切られる。平面形は東西に長い溝状を呈し、幅約90cm、深さ30cmを測る。断面形は浅皿状を呈す。覆土は黄灰色で、最下層は粘性を帯びる。覆土中から握り拳大の礫と土師皿が出土した。

出土遺物 (第66図) 024・025は青磁碗である。024は口径13.9cmを測る。釉は薄く半透明。外面にへらで3条の線を施す。025は同安窯系の碗である。高台径6.3cmを測る。胎土は粗く灰色を呈す。026は白磁碗である。胎土白色で粗い。見込みの周りに沈線を施す。釉は高台の上まで施している。027は土師皿である。口径8.6cm、器高1.0cmを測る。磨滅が著しい。その外黒色土師碗B類や鉄滓が出土している。

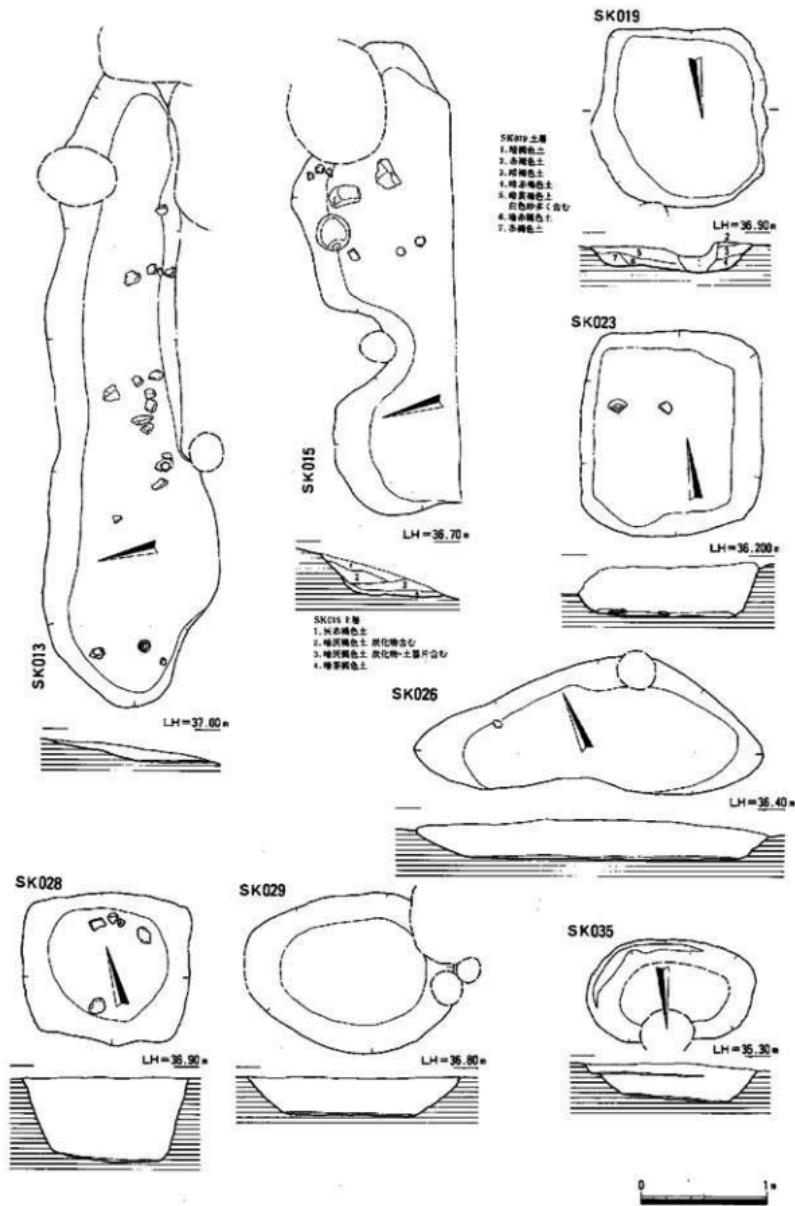
SK-I-014 (第65図) SK013の東側に位置し、SK013を切る。平面形は隅丸の長方形を呈し、長径81cm、短径53cm、深さ17cmを測る。南側に一段深い掘り込みを持ち、深さ27cmを測る。断面形はU字形である。覆土は黒褐色で炭化物を多量に含んでいる。

出土遺物 (第66図) 028は火鉢の底で、四隅には円形に穿孔された痕跡をもつ。厚さ1.1cmを測る。その他に半丸瓦片が出土している。黒色を呈す。

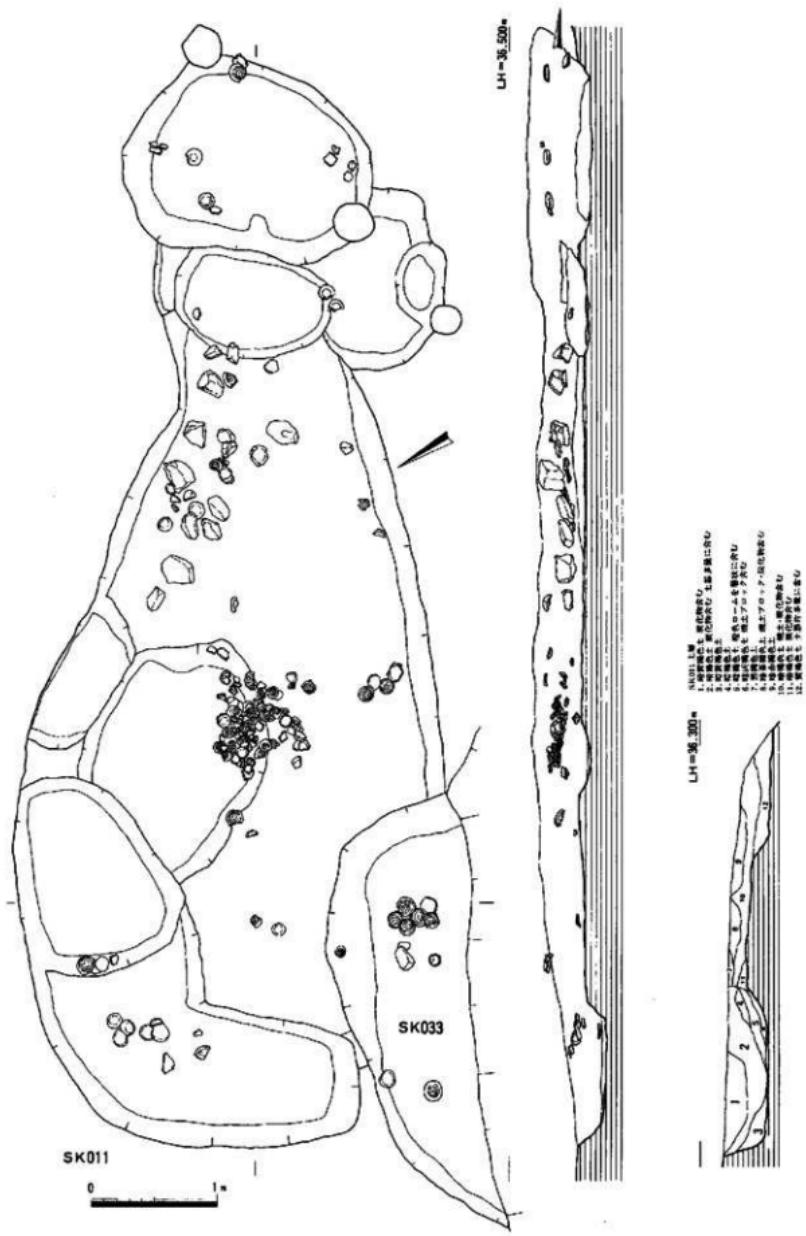
SK-I-015 (第66図) SK014の南側に位置する。南側が削平されており、現状では東西に長い不整形を呈す。東西372cm、南北107cm、深さ32cmを測る。断面は逆台形か。



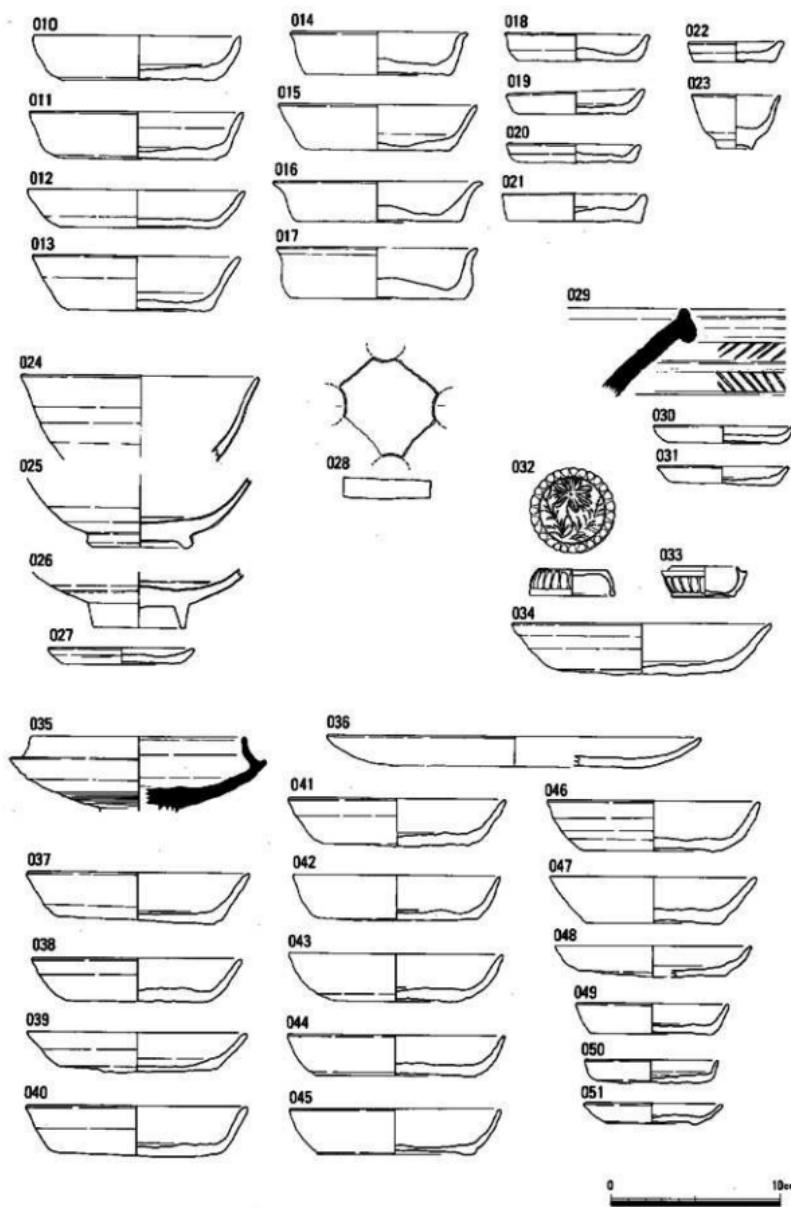
第65図 土壤実測図 (1/30・1/40)



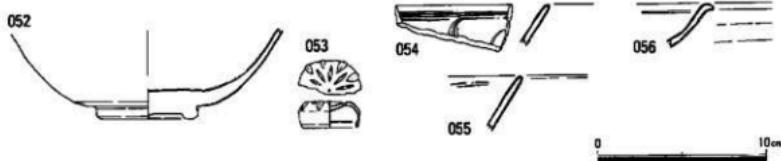
第66図 土壤実測図



第67図 SK011実測図 (1/40)



第68図 遺物実測図



第69図 遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第68図)。029は須恵器大壺の口縁である。口縁端は卵形を呈す。頸部外面には沈線を施した後斜め方向の切り込みを2段に施している。030・031は土師皿である。030は復元口径8.2cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕がみられる。031は口径7.8cm、器高1.1cmを測る。平面は円をなさない。磨滅が著しい。

SK-I-016 (第65図) 調査区中央東よりのSC017の北側に位置する。平面形は長方形を呈し、長径134cm、短径86cm、深さ60cmを測る。断面は逆台形である。底面南西側にピット状の掘り込みを持つ。

SK-I-018 (第65図) 調査区中央東よりのSC017の東側に位置する。平面は縦長い六角形を呈し、長径147cm、短径94cm、深さ74cmを測る。断面は箱形を呈す。覆土は茶褐色を呈す。

SK-I-019 (第65図) SC017の東側に位置し、不整円形を呈す。長径141cm、深さ22cmを測る。

SK-I-021 (第65図) 調査区の東側に位置する。平面形は円形を呈し、径62cm、深さ13cmを測る。断面は浅皿状を呈す。覆土は灰白色粘質土で炭化物、鉄滓、鍛造剥片が多く含む。中央に床から4cm浮いた状態で16cmほどの角礫が出上した。

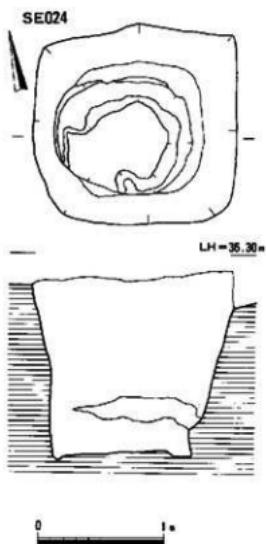
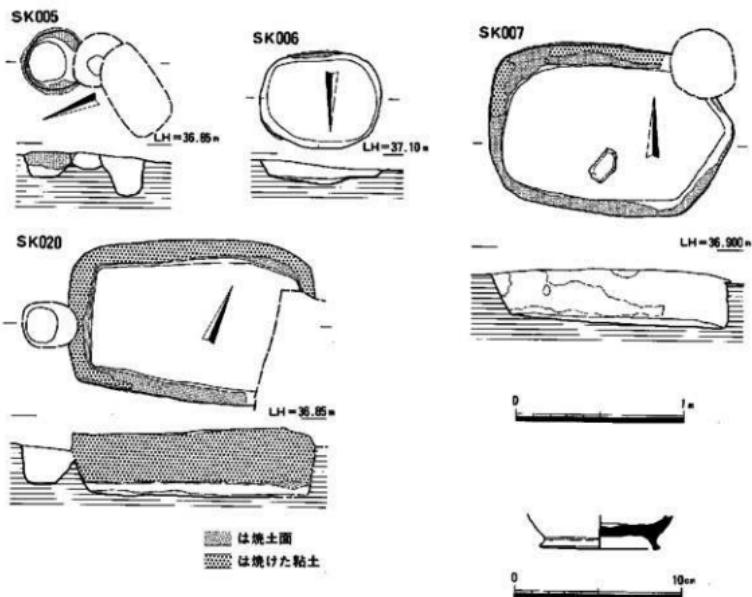
SK-I-022 (第65図) 調査区の東側に位置する。平面形は円形を呈し、径64cm、深さ13cmを測る。南北断面は浅皿状を呈す。南側にピット状の掘り込みをもつ。

出土遺物 (第68図) 032は青磁合子蓋である。口径5.0cm、器高1.5cmを測る。釉は明緑灰色を呈し、外面全面と内面天井部に施されている。胎土細かい。草花文の文様をもつ。033は合子の身である。受け部径5.0cm、器高1.8cmを測る。外底部のみ無釉である。034は土師器坏である。復元口径15.3cm、器高3.0cmを測る。糸切りと思われ、板状圧痕がみられる。

SK-I-023 (第66図) 調査区の西側に位置し、SC008を切る。平面形は南北にやや長い隅丸の方形を呈し、長径161cm、短径154cm、深さ44cmを測る。断面は逆台形を呈す。床面直上から上師皿等が出土している。

出土遺物 (第68図)。035は須恵器高坏である。径22.6cmを測る。环身外底部にカキ目を施す。脚部はほとんど残っていないが、幅6cmの透かしの痕跡が残る。本来はSC008に伴うものであろうか。036は土師盤である。口径22.0cm、器高1.8cmを測る。淡黄色を呈し回転ナデを施す。037～048は上師器坏である。磨滅が著しく判明しないものを除くすべてが糸切りで、板状圧痕を残す物もある。口径と器高は037が13.2cm・2.8cm、038が12.4cm・2.5cm、039が12.9cm・2.4cm、040が13.0cm・3.0cm、041が12.8cm・2.8cm、042が12.2cm・2.7cm、043は12.6cm・2.8cm、044は12.8cm・2.35cm、045は12.3cm・2.7cm、046は12.6cm・3.0cm、047は12.2cm・2.7cm、048は11.5cm・1.8cmを測る。049～051は土師皿である。049・050は糸切りで板状圧痕がみられる。051は磨滅著しい。口径と器高は049が8.4cm・1.4cm、050が7.9cm・1.3cm、051が7.9cm・1.2cmを測る。

SK-I-026 (第66図) 調査区西側のSK011の東側に位置する。平面形は東西に長い梢円形を呈し、長径274cm、短径112cm、深さ31cmを測る。東西断面は浅皿状を呈す。床面から13cm浮いた状態で土師皿が出上している。



第70図 土壌・井戸実測図 (1/3・1/30・1/60)

SK-I-027 (第65図) 調査区中央に位置し SC001を切る。平面形は不正形で長径113cm、短径107cm、深さ54cmを測る。断面は逆台形を呈す。覆土は茶褐色土で炭化物を含んでいる。

SK-I-028 (第66図) 調査区の北側に位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、長径132cm、短径121cm、深さ67cmを測る。断面は逆台形を呈す。床面から8cm浮いた状態で疊と土器が出土した。
出土遺物 (第69図)。052は青磁碗である。釉はやや茶色かかった緑色を呈し、薄く半透明気泡多い。疊付き、高台内も一部施釉される。連弁を施す。

SK-I-029 (第66図) 調査区の西側に位置する。SB04との切り合い関係は明確でない。平面形は卵形を呈し、長径167cm、短径126cm、深さ23cmを測る。断面は浅皿状を呈す。

出土遺物 (第69図)。053は白磁合子蓋である。復元口径3.2cm、器高1.6cmを測る。胎土は白色で粗い。釉は薄く透明で青味を帯びる。内外面全面と外縁は無釉である。

SK-I-033 (第66図) 調査区の西側に位置する。南側を削平されており、平面形は不明であるが、現状で東西308cm、南北112cm、深さ14cmを測る。断面形は浅皿状である。覆土から上師皿が出土した。
出土遺物 (第69図)。054・055は青磁碗である。054は釉薄く質入なし。胎土灰色。内面に櫛目文を施す。055は内面に2条の片切の沈線をもつ。056は青磁小鉢である。胎土精良でヘラ削りの痕が外面に残る。内外面に片彫りの沈線を施す。

SK-I-035 (第66図) 調査区の西側に位置する。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長径136cm、短径78cm、深さ25cmを測る。断面は逆台形で東側にテラスをもつ。

焼土坑

SK-I-005 (第70図) 調査区中央に位置し、SC017を切る。平面形は円形を呈し、径36cm、深さ15cmを測る。断面は逆台形である。壁の上半分が焼けて赤変している。覆土は焼土ブロックが多く含む上層と、炭化物を含む下層に分かれれる。覆土中から中期後半の弥生土器片が出土した。

SK-I-006 (第70図) SK005の北側に位置し、SC017を切る。平面形は東西に長い楕円形で長径72cm、短径54cm、深さ13cmを測る。断面は浅皿状を呈す。壁の一部が焼けて赤変している。覆土は暗褐色土で炭化物と焼土ブロックを含む。057(第70図)は須恵器高台付き壺である。胎土は灰色で石英を多く含む。全体に横ナデである。

SK-I-007 (第70図) 調査区中央に位置し、SC017を切る。平面形は東西に長い五角形を呈し、長径144cm、短径99cm、深さ32cmを測る。断面箱型を呈す。壁全面が焼けて赤変している。北壁では焼土上面の上に焼けた粘土が貼りついている。覆土は3層に分かれ、上層は暗褐色土で炭化物を水平な層状に含む。中層は褐色土で炭化物を多量に含む。下層は炭化物層で焼土ブロックを含む。

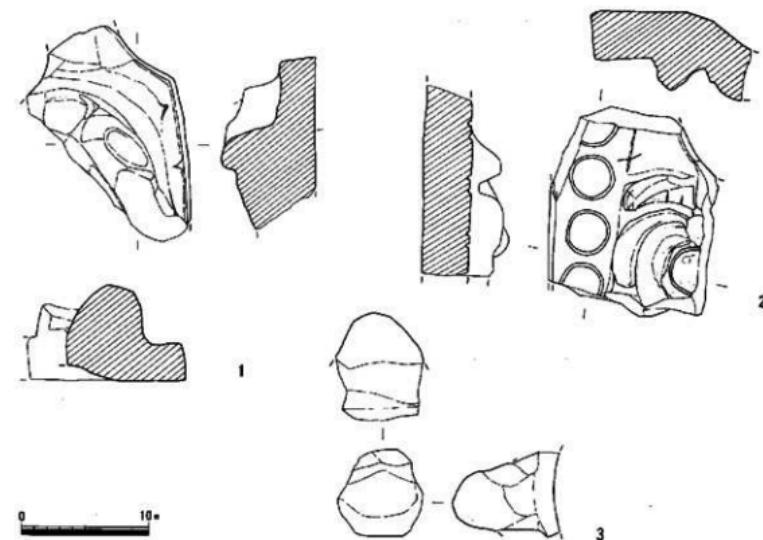
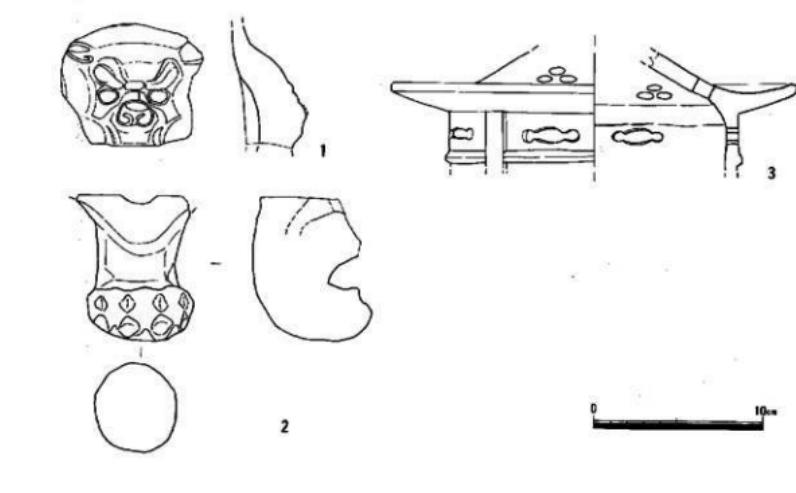
SK-I-020 (第70図) 調査区東寄りに位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、長径146cm、短径96cm、深さ41cmを測る。断面は箱形を呈す。壁は床面から7cmほどを除いて全面焼けて赤変している。焼土面の上には南側を除いて焼けた粘土が貼りついている。粘土の厚さは2~4cmである。覆土中から青磁碗片や鉄片、鉄滓、炉壁等が出土している。

井戸

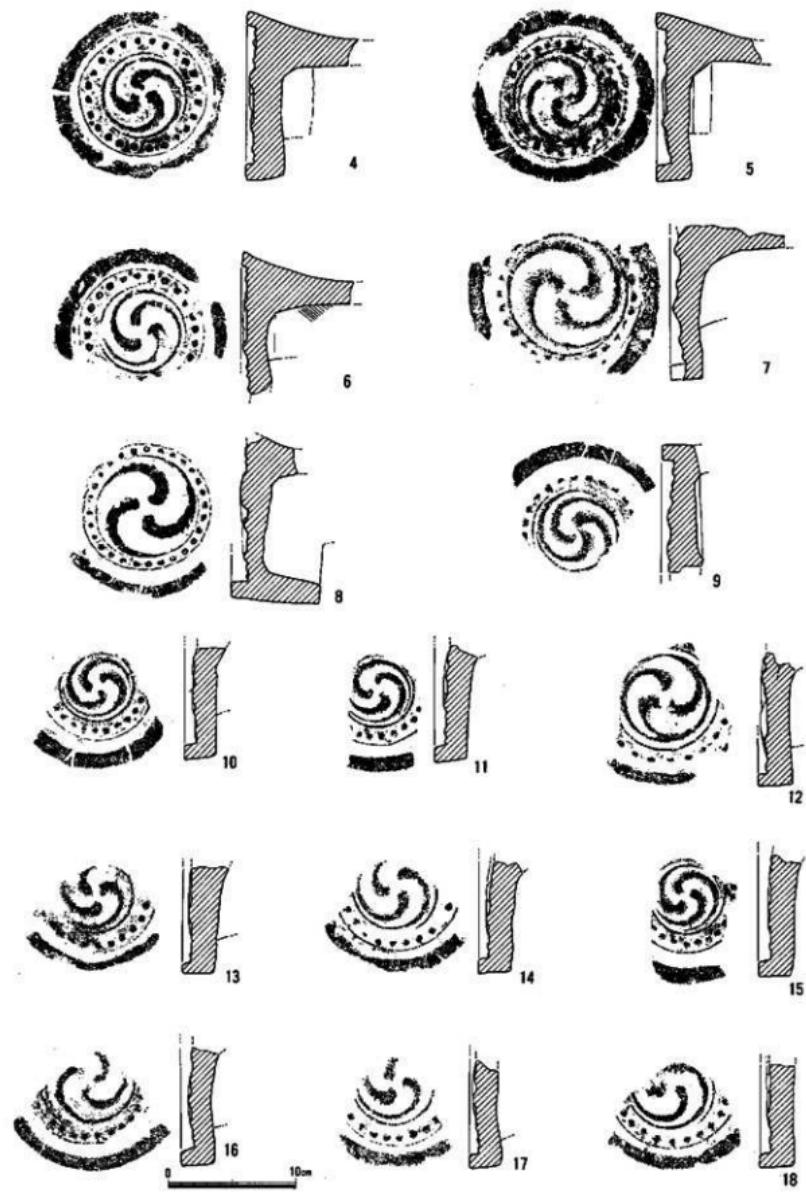
SE-I-024 (第70図) 調査区の西側に位置し、SC008を切る。平面形は方形を呈し、一辺160cmを測る。断面は梯子形で西側を除いてテラスをもつ。底面は楕円形を呈す。西側を除いて壁に沿って幅20cmほどが窪んでいる。

溝

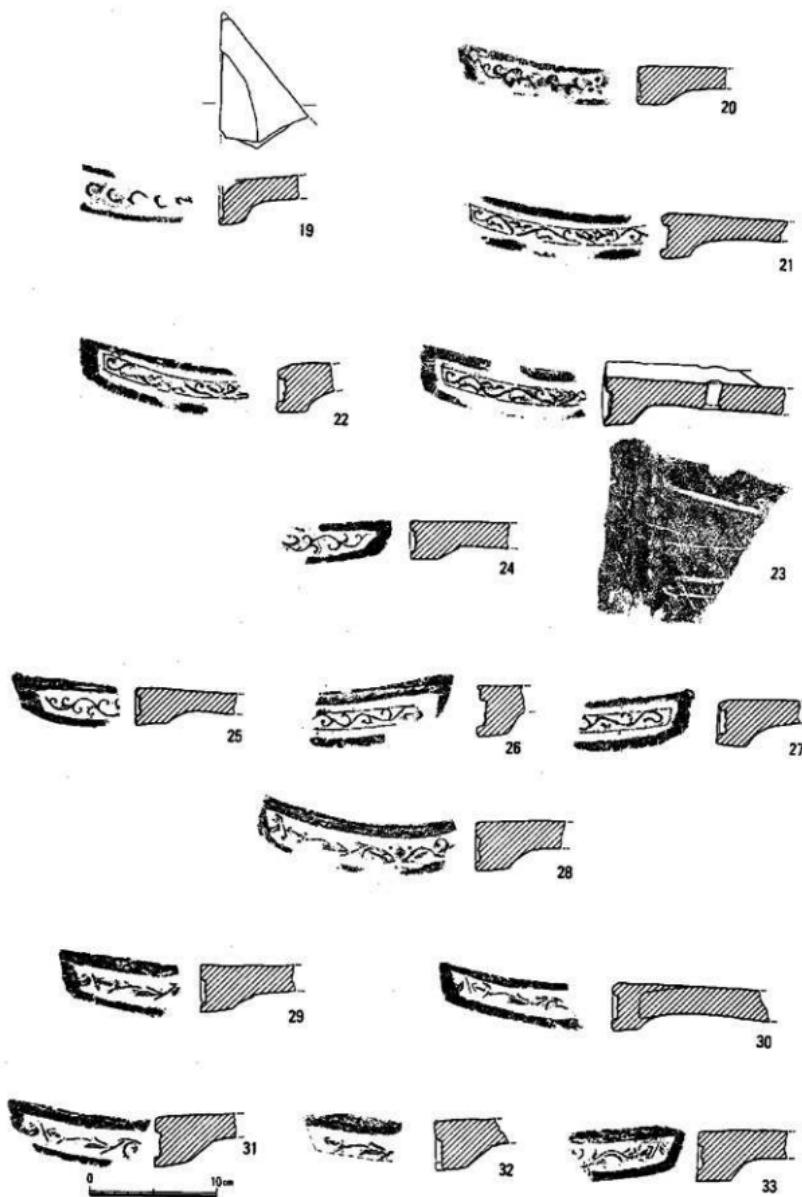
SD-I-032 ほぼ同じ幅の溝が2条平行する 方形区画の溝である。南側のC区のSD-C-040・041にあたる。



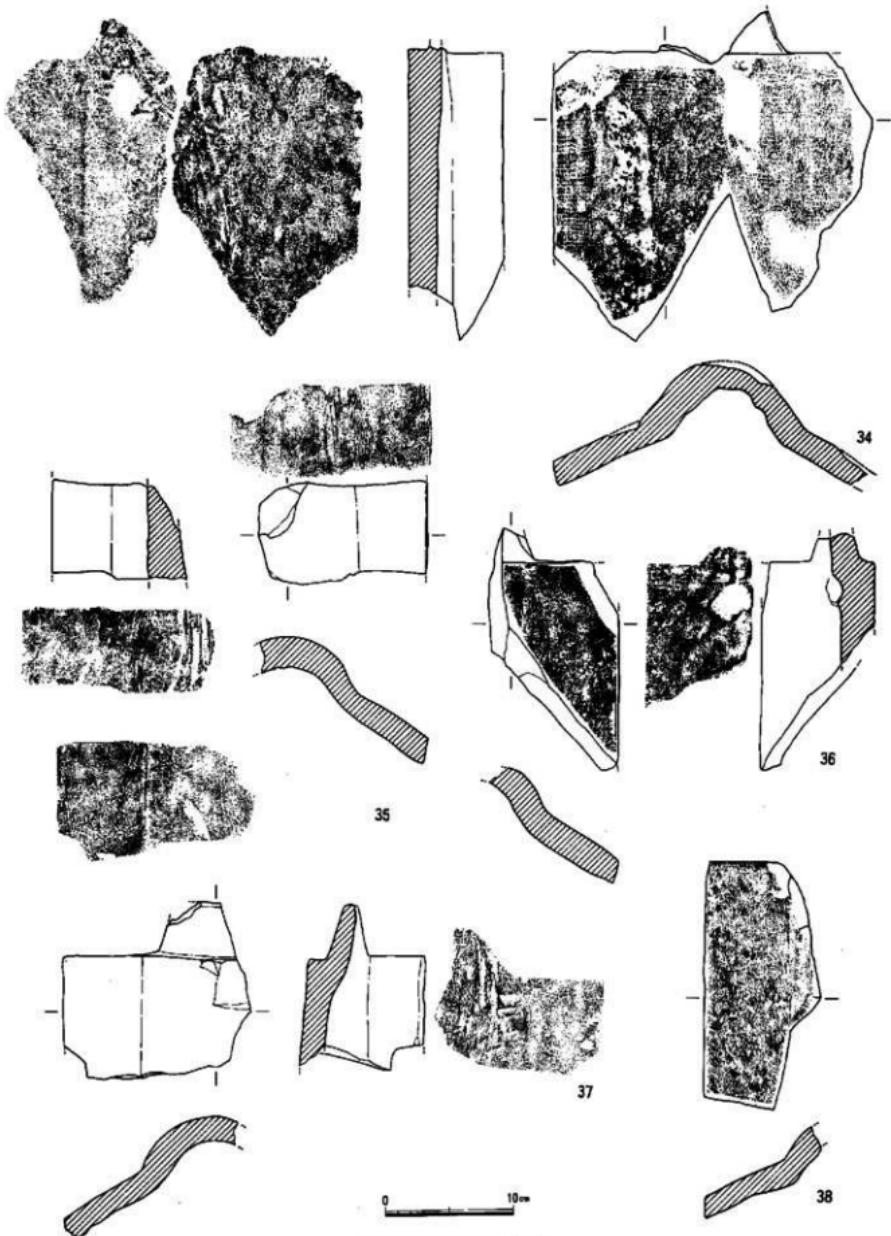
第71図 遺物実測図 (1/4)



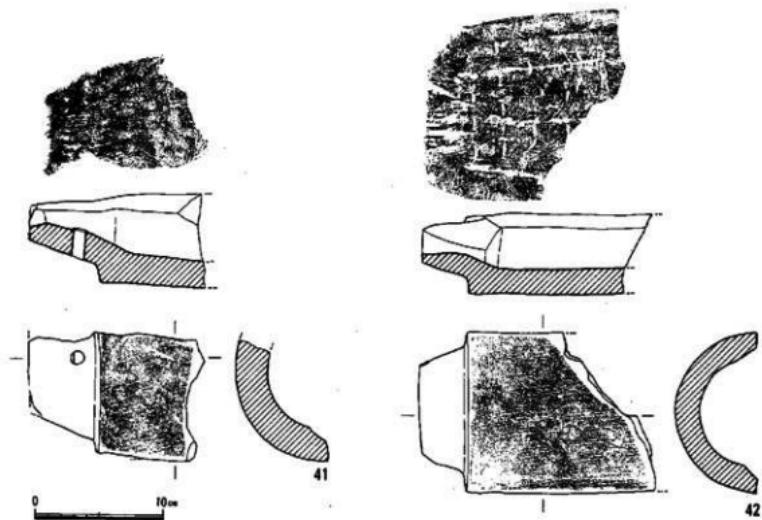
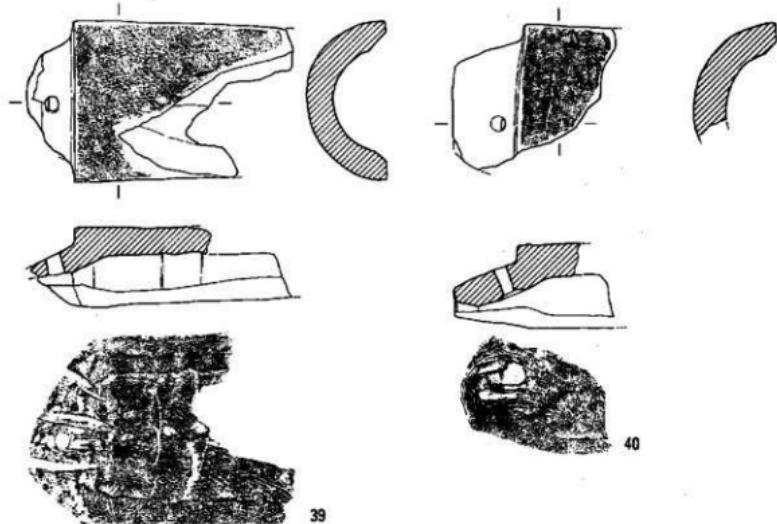
第72图 遗物実測図 (1/4)



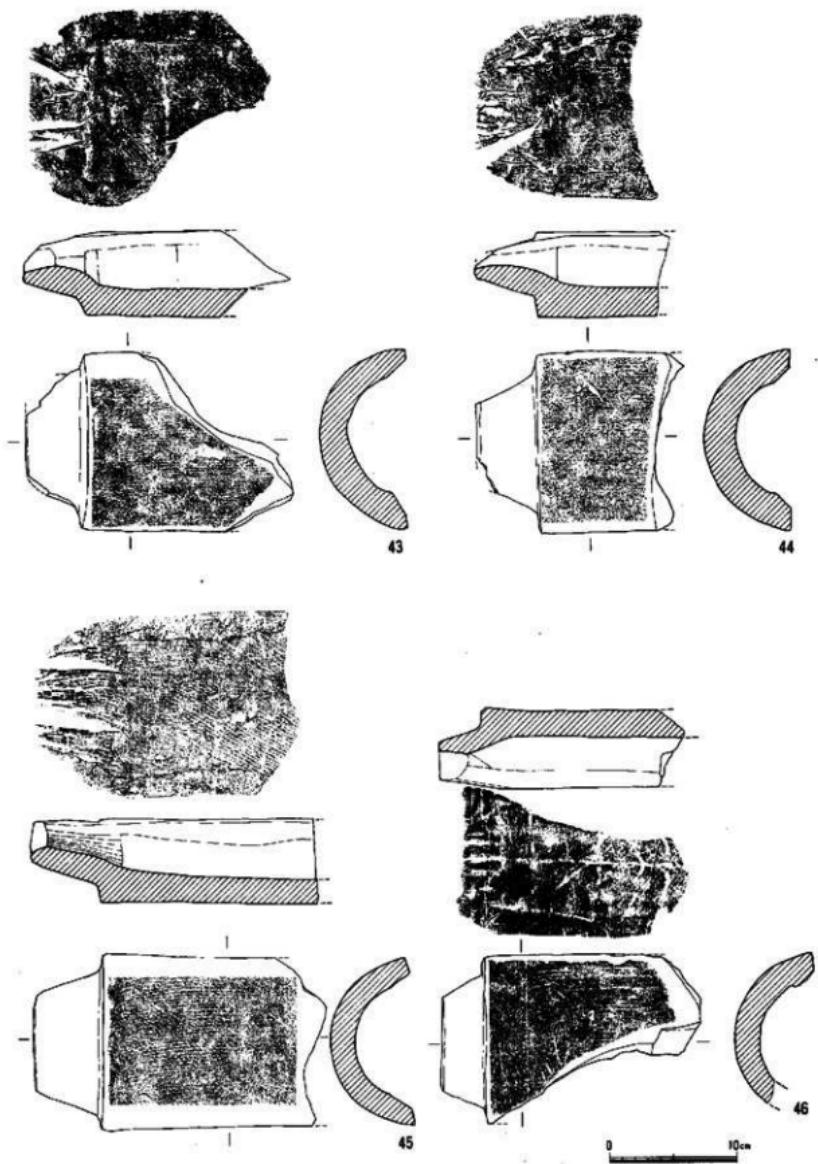
第73圖 遺物實測圖 (1/4)



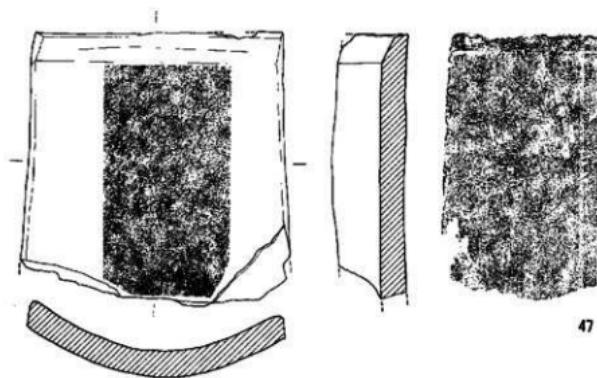
第74图 遗物实测图 (1/4)



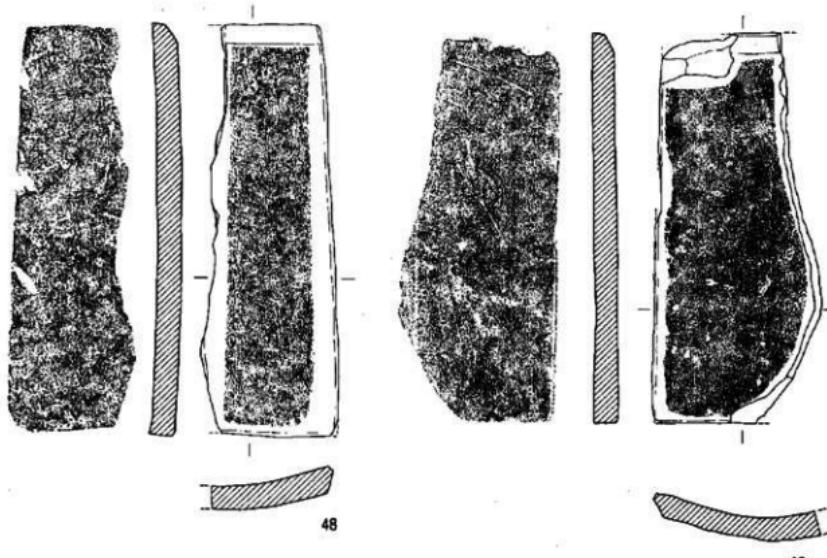
第75図 遺物実測図 (1/4)



第76図 遺物実測図 (1/4)



0 10cm



49

第77図 遺物実測図 (1/4)

10. その他の出土遺物（第71図～第77図）

1は瓦質土器の獸脚である。接合しないが本来同一個体で、3ないし4つで火舎の支脚部を構成したと考えられる。獸面の部分は型押による成形で顎部以外の様子をとどめている。わずかに立ち上がる両耳、肩間を盛り上げた力強い表情は獅子にはかならない。

2の脚部は中空をなし、下部は押圧によって5つの爪を形づくっている。

3は淡黄灰色を呈する土師質の容器で、小片であるが復元すると径17cm程の円筒部に鉗状のせり出しが付き、円錐形の頂部を有していたと推定できる。円筒部の外側に回る断面半円形の突帯とそれに直交する矩形の突帯は建物の梁の表現のようでもあり、重層構造の門堂を模したようでもある。また頂部にある3孔と円筒部の両端に円孔が楕円形の透かしをみると単なる容器ではなく、香炉などの蓋に相当する可能性がある。

調査区内で出土した瓦は深さ15cmのコンテナで約30箱にのぼるが、雨落溝等からのまとまった出土ではなく、多くは昭和30年代の造成時に一括して廃棄された状態であった。ここでは部位別に文様や形状をとどめた資料を抽出して解説を行う。

1は鬼瓦正面の右上に相当する。縁取りと鬼の額から角の後方部をとどめている。頂部にU字形の抉りが入るタイプと考えられる。また縁部は花弁状をなすのかもしれない。黄灰色を呈し、砂粒、礫を多く含んでいる。B区より出土した。

2はD区で表面採集された鬼瓦である。正面左上の目から眉にかけての部位にあたる。1とほぼ対称の位置にあたるが、縁の装飾がスタンプ文である点が異なる。眼球を球面で表現している点、眉が下方に下がる点が意匠上の特色である。肌色に近い黄灰色を呈し、背面に離れ砂を敷いた痕がみられる。

3は小片であるが鬼瓦の一部と思われる資料である。鬼面の鼻の頭に相当すると考えている。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。表採資料。

4～17は軒丸瓦である。面径は6が推定で14cm強、その他は何れも13cm強と推定される。文様は何れも巴文で尾部は長く円を描く。外縁部と珠文の間に界線を回し、珠文の数は24と28の2種が見られる。色調は灰色系と肌色に近い褐色系に大別できるが、暗灰色を呈するものが多い。

18～32は軒平瓦の類である。使用部位や文様によって5のタイプに大別できる。18は平面形から隅軒平瓦である。コンマ形の半円を互い違いに配したもので、唐草文を簡略化したものであろう。19は中央に梅鉢文を配した均整唐草文系の軒丸瓦である。20～22は均整唐草文系の軒丸瓦である。とくに22は中軸線上に上から下方向への穿孔がみられる。23～26は扁行唐草文と考えられる軒平瓦である。小片も含まれており、修復が必要になるかもしれない。23・24と25・26が各々同類の文様をなす。27～32はさらに細分は可能だが、文様の両端に内傾するラインを有するタイプである。基本的には唐草文から派生した形式である。軒平瓦の頸部の段は名島城など近世はじめの資料と比べて浅い傾向がある。色調は灰色系と褐色系に分けられるが、いわゆる「いぶし」はかかっていない。

33～37は棟や隅棟に使用された雁脛瓦である。33以外は小片であり、傾きは33に倣って示した。内外の成形や調整痕は各々で33は外面に布目痕があり、内側はナデ調整である。34は逆に外面が継ぎ方向のナデで、内面に布目痕がみられる。35は外面にハケメ等の工具を用いたナデ、内面は摩耗が進んでいるが、指頭による圧痕がみられる。36の外面には繩目タタキの後、ナデを加えたとみられ、内面には布目痕がみられる。37は内外ともにナデがみうけられる。色調はやはり灰色系と褐色系がある。

38～45は丸瓦の系統である。全長がわかる資料はないが、幅は玉縁の付け根で12.5～14cm程度であ

る。何れも玉縁を有する有段式で38~40は玉縁の中央に円孔が穿れている。調整は内面に布日痕、外面に繩目タキがみられる事から、円筒形の模骨に布を巻いて粘土をあてがい繩を巻いた板で叩き締めた後に玉縁を回転させながら成形させ、最後に分割するという製作工程を伺うことができる。部分的にいぶしがかったものもみられる。

46~48は平瓦系でサイズが明らかな資料である。46は幅がわかる平瓦で現存部で20~22cmを測る。内外ともに横方向のナデが認められ、上端部外面に紐の痕跡がある。47・48は全長がわかるもので47が32.4cm、48が30.5cmを測る。47は摩滅が著しく調整は不明である。48の内面は工具による削りの後、ナデ調整が加えられている。外面は不明瞭であるが、同様の調整の可能性がある。

以上、今回の調査で出土した瓦類の主要形式について概況を述べたが、軒平瓦に複数の系統の瓦が認められる以外は、各々の形式でまとまりがみられる。時期を軒丸瓦の形式をもとにたどれば、およそ15世紀代で捉えることができよう。現在この時期の資料は豊富とはいはず、今後該期の資料との比較検討を行ううえで重要といえよう。

11. おわりに

今回の第4次調査では弥生時代～中世の遺構、旧石器時代～近世の遺物を検出した。各時期の概要と問題点を述べておわりとしたい。まず縄文時代以前については多数の石器類が出土したが、明確に遺構から出土したものはなかった。しかし当地点において該期の遺構が存在した可能性は高いとおもわれる。また遺物については別の機会を見つけて報告する予定である。

弥生時代は竪穴住居址、土坑等を検出した。遺構は調査区全体に分布するが、後世の削平によるものからか、密度は薄い。ただし中期以降の相当量の上器が調査区全域から出土していること、南部の第3次調査地点で検出された貯蔵穴群の存在から、ある程度まとまった集落等が形成されていたものと考えられる。

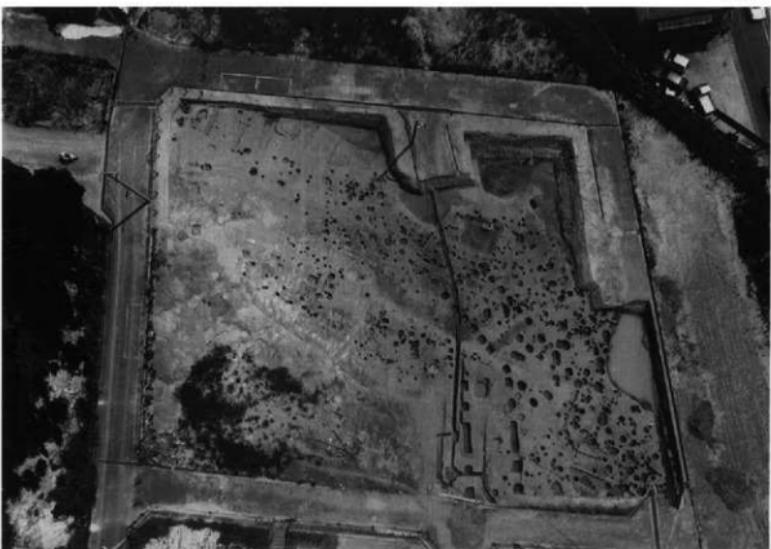
古墳時代は調査区東側、C区、I区の竪穴住居群を中心に全域に遺構が広がる。検出した竪穴住居址はすべて後半期以降のものである。倉庫等の縦柱建物群も同時期のものと考えられ、集落域の核をなすものであろう。

古代にはいると前代と様相を異にする。A・B区のSB-A-040、041等の大型建物群等を主体として遺構に拡がりがみられ、もはや一般集落とは隔絶された、官衙的機能を備えた建物群の様相を呈する。

遺物では円面鏡や刻字のある須恵器の出土がその具体的な証左となろう。調査地点は筑前国早良郡七郷のひとつ「能解郷」に属し、その中心であると考えられる。今回十分にできなかつた遺構配置の検討、さらに早良郡衙の所在地とされる有田遺跡群との遺構規模の比較や円面鏡が出土した重留遺跡群や吉武遺跡群等の位置的な検討も今後の課題といえよう。

中世になると、特に後半期には調査区西部を中心に全面に遺構が拡がる。南北に延びるSD-F-001、これに直交しSX-C-069を囲むように配置される溝によって画される人規模で整然とした遺構配置がみられ、SD-F-001以西は遺構の密度が大幅に薄くなる。そしてこの画されたなかにはSX-C-069とともに特異な遺構であるがSB-E-003が存在する。これらの性格については、類例が少なく積極的に断定できるものではないが、それぞれ前者を庭園を構成する池、後者を八角堂と想定した。また南側の第8次調査地点において当調査区に通ずるとおもわれる道路状遺構が検出されている。遺物では直接遺構に伴うものではないが、鬼瓦をはじめ大量の瓦が出土している。そのなかの雁振瓦の出土はSB-E-003の隅棟の使用を示唆するようでもあり、仮に經堂のような性格の建物を想定するならば、これらのことから勘案すると前代に引き続き一般集落である可能性は低く、寺院等の可能性が考えられる。16世紀初頭の文書によると「野芥大聖寺」という寺院名がみられ、当該地域に寺院が存在したことがわかる。これは「筑前国続風土記拾遺」によれば片江神松寺の末寺で、承天寺の末々寺にあたる。これと簡単に結びつけるのは早計であるが、その可能性は考えておくべきであろう。現時点では建物の抽出、遺構の検討が十分でないが、今後これに加え文献の検討を含め本調査時点の性格を明らかにしたい。

図 版



A・B区全景（北東より）



A・B区全景（西より）

図版 2



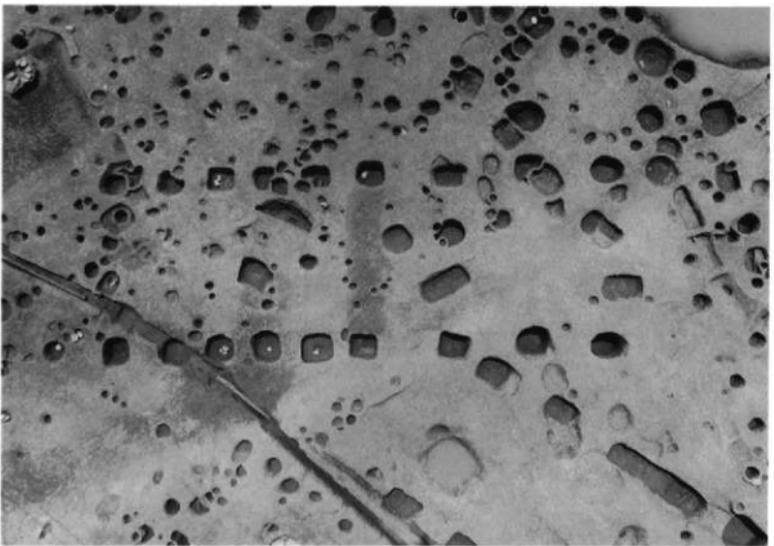
A・B区全景（南西より）



SC-A-002 全景（東より）



SB-A-40・SB-A-41 全景（北西より）



SB-A-40 全景（上が東）

図版 4



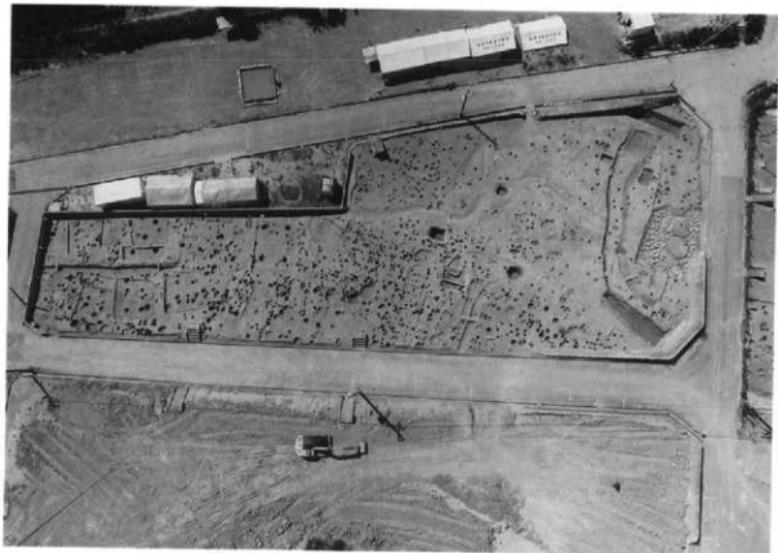
SB-A-41 全景



SK-B-001

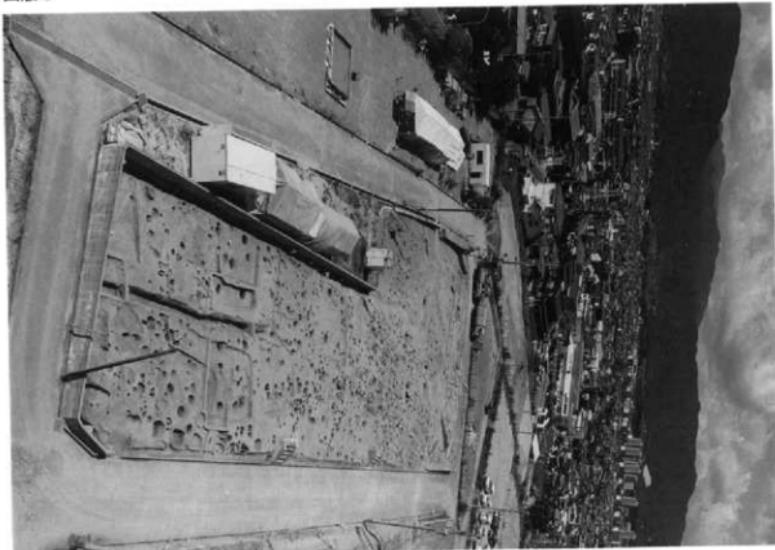


SK-B-011

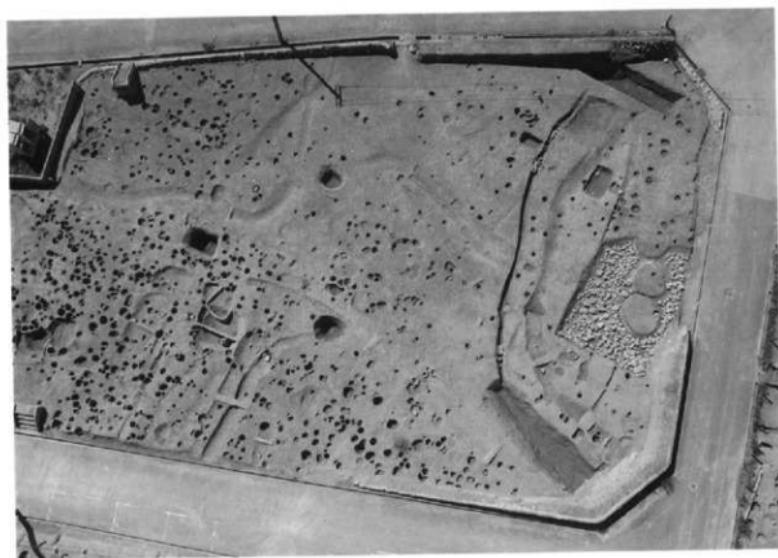


C区全景（北上空より）

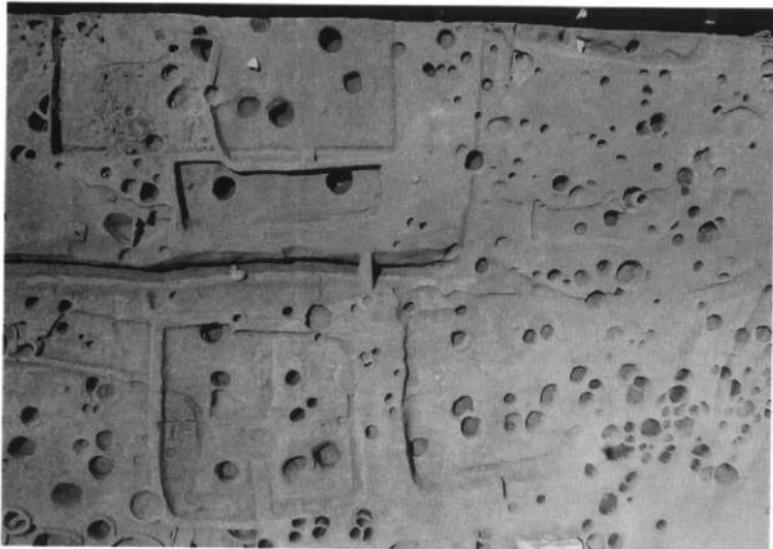
図版 6



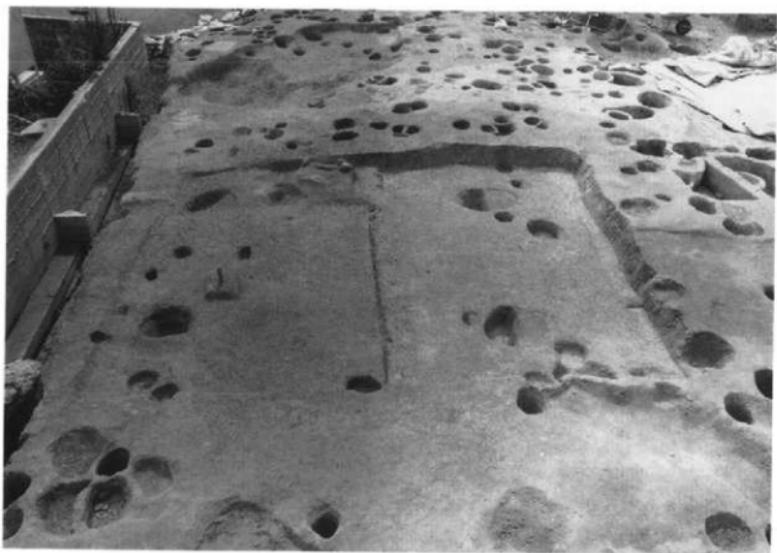
C区全景（東より）



C区西侧全景



C区東側の住居跡群（北より）

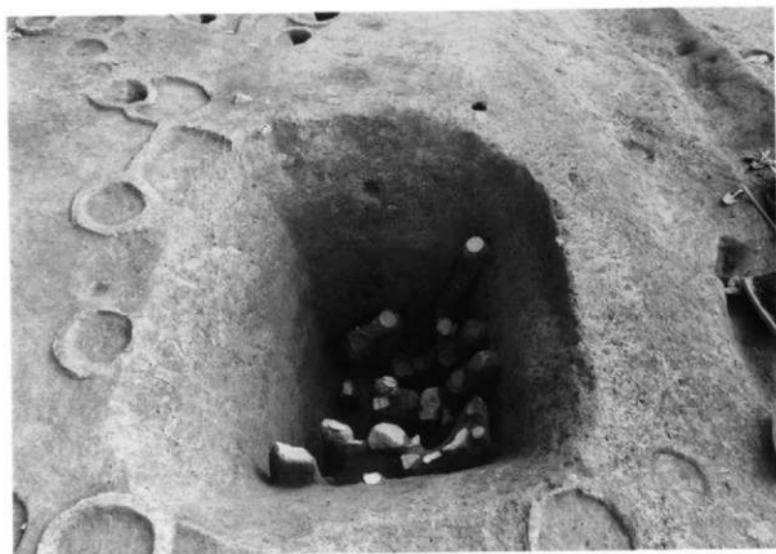


SC-C-021 全景（東より）

図版 8



SC-C-021 カマド



SE-C-001 (西より)



SR-C-002 (西より)



C区庭園状遺構全景

図版 10



C区庭園状遺構全景（北より）



D区全景（東より）



D区全景（西より）



SB-D-a 2 全景（北より）

図版 12



E区全景（西より）



E区・F区・G区全景



E区・F区全景

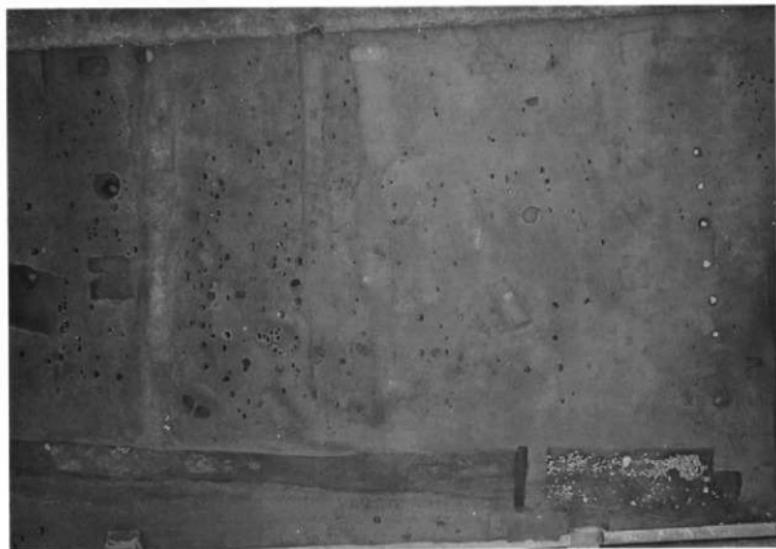


F区全景（北より）

図版 14



F区全景（南西より）



SD-F-001・002全景



F区北側全景



SD-F-001南端部（南西より）

図版 16



SE-F-010 全景（東より）



SE-F-010（西より）



F区・G区全景



G区全景（北東上空より）

図版 18



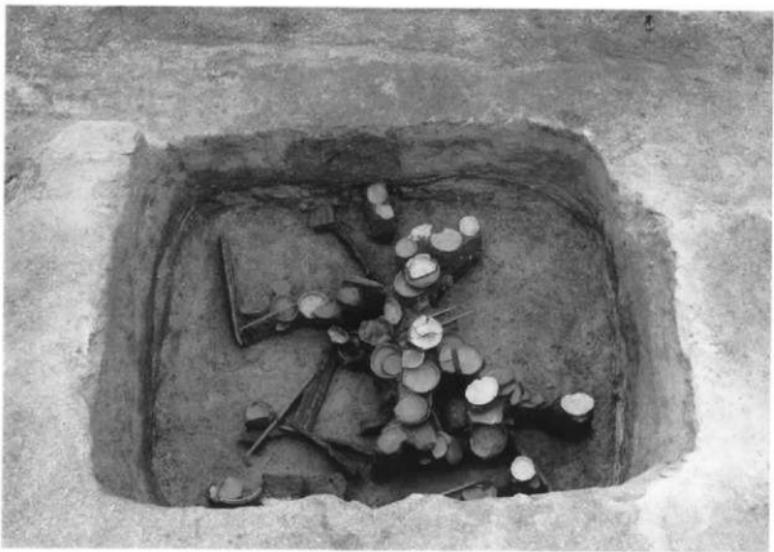
G区全景（南より）



G区中央部全景



SB-G-015 (西より)



SK-G-008 (西より)

図版 20



SK-G-013 (より)



G区001~007土坑群 (東より)



H区全景（西より）



H区西側（北より）

図版 22



SE-H-002 (東より)



SE-H-014 (北より)



C区・I区全景（東上空より）



I区全景（南上空より）

图版 24



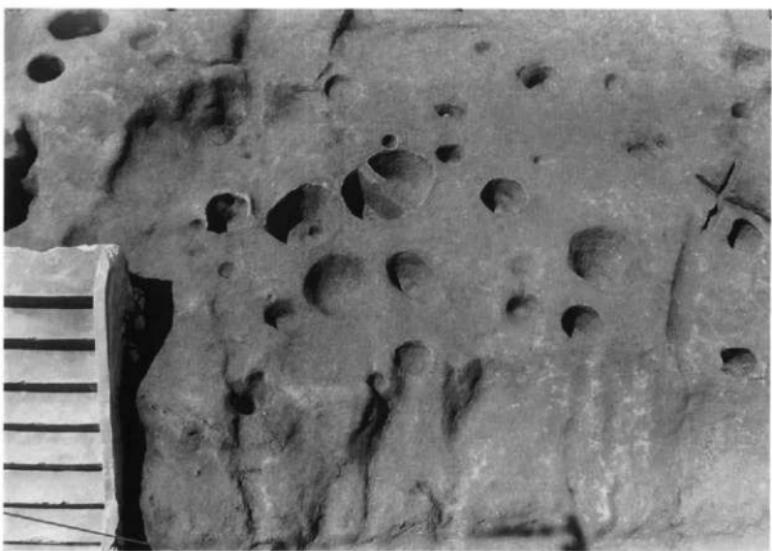
I 区西侧全景



SC-I-001



SC-I-001 カマド

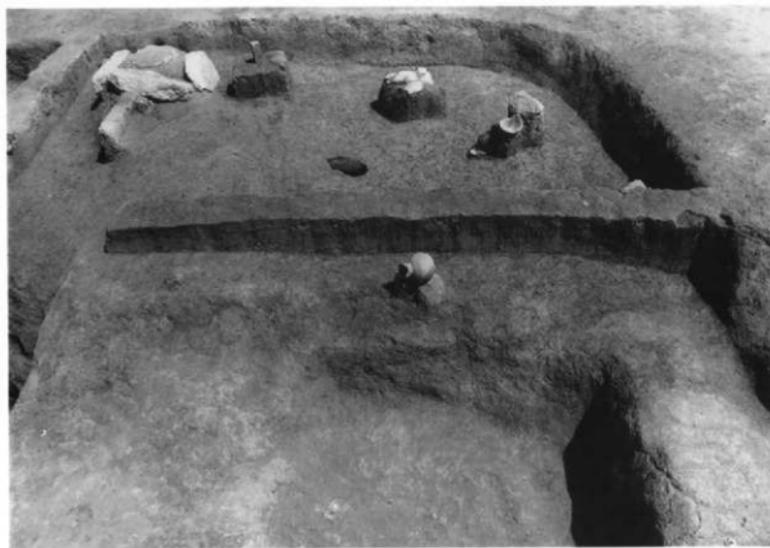


SC-I-002

圖版 26



SC-I-008



SC-I-008 遺物出土狀況



SC-I-008 カマド



SC-I-017

图版 28



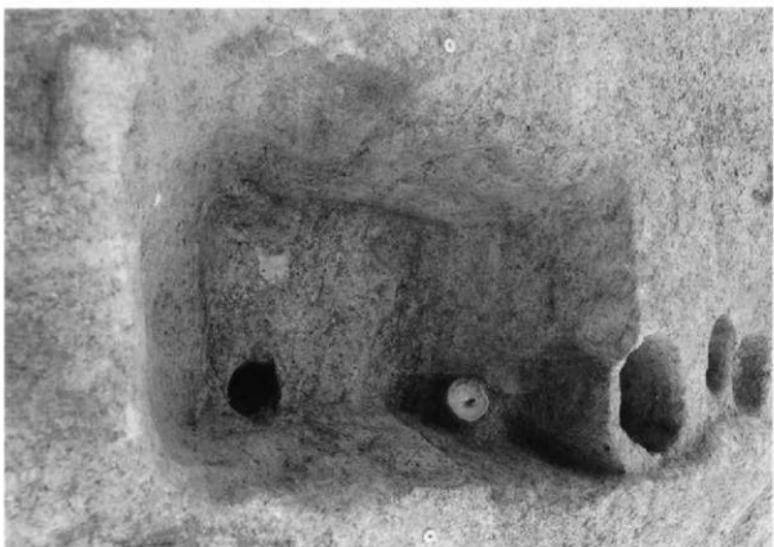
SK-I-009



SK-I-011



SK-I-012



SK-I-016

図版 30



SK-I-022



SK-I-023



SK-I-007



SK-I-020

図版 32



SK-I-021



SE-I-024



A·B-2



A·B-5



A·B-6



A·B-12



A·B-8



C-1

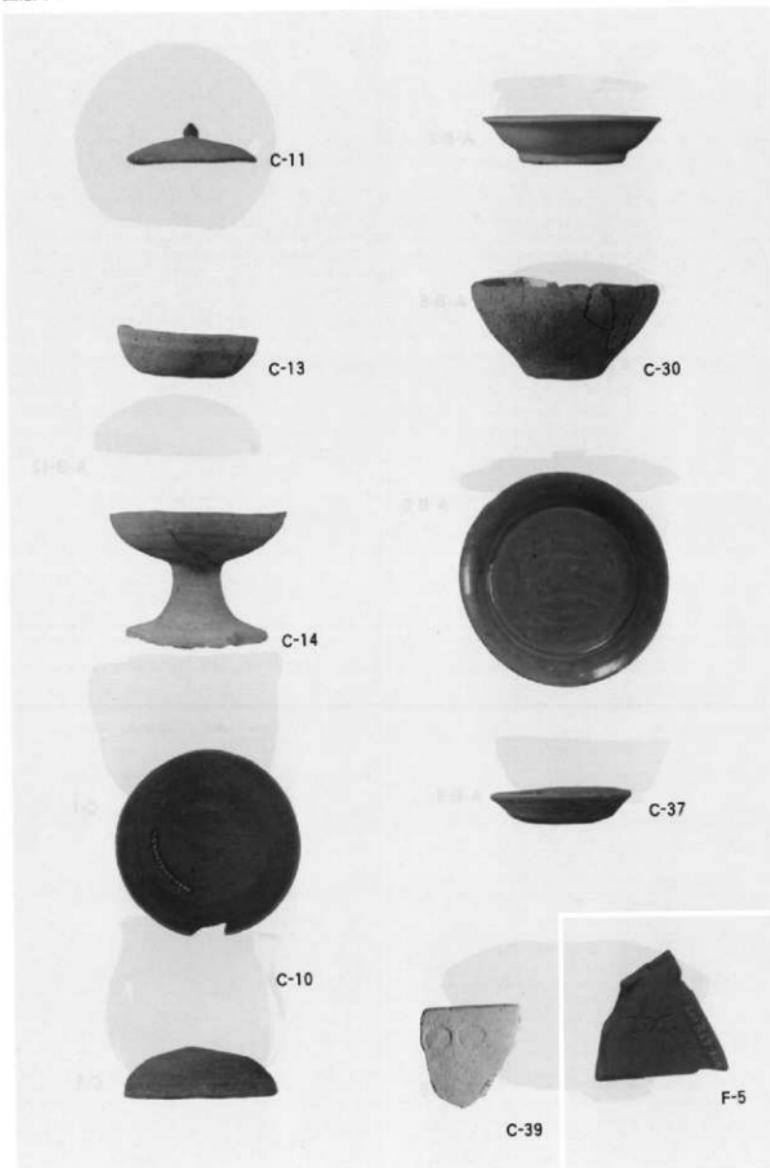


A·B-19



C-9

図版 34





F-6



F-7



F-8



G-23

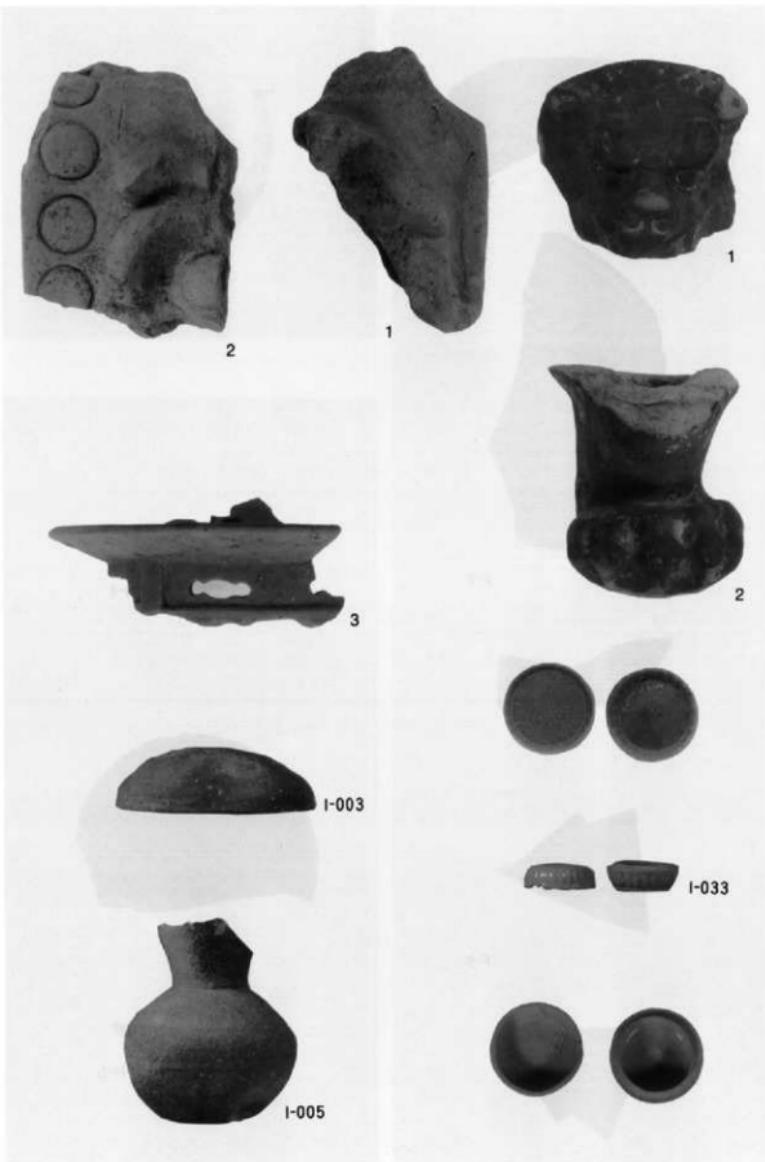


H-4



H-5

図版 36





4



5



6



7



8



9



10



12



13



14



15

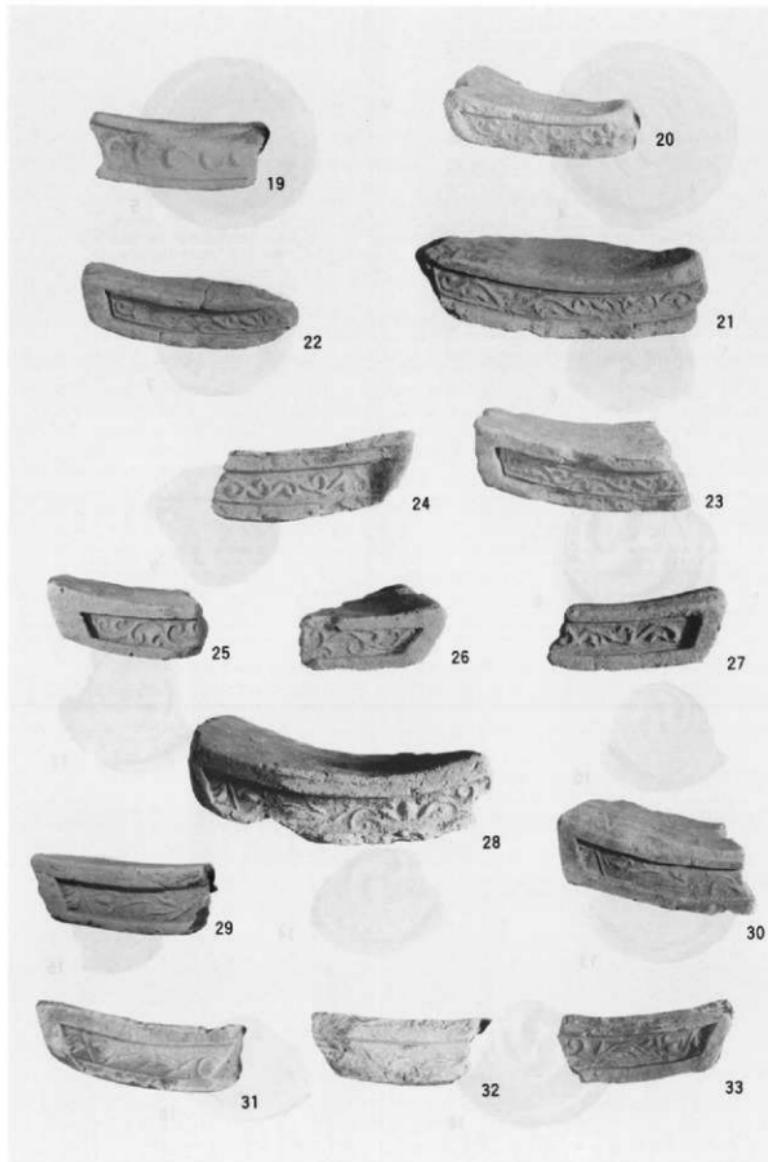


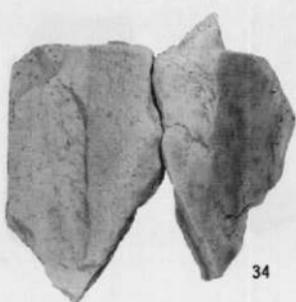
16



18

図版 38





図版 40



42



44



46



45



49



48



49



49

野芥遺跡2

—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集

1998年(平成10年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 川島弘文社

「野芥遺跡2」

野芥遺跡群第4次調査 付図

A・B区遺構配置図 (1/200)

C区遺構配置図 (1/200)

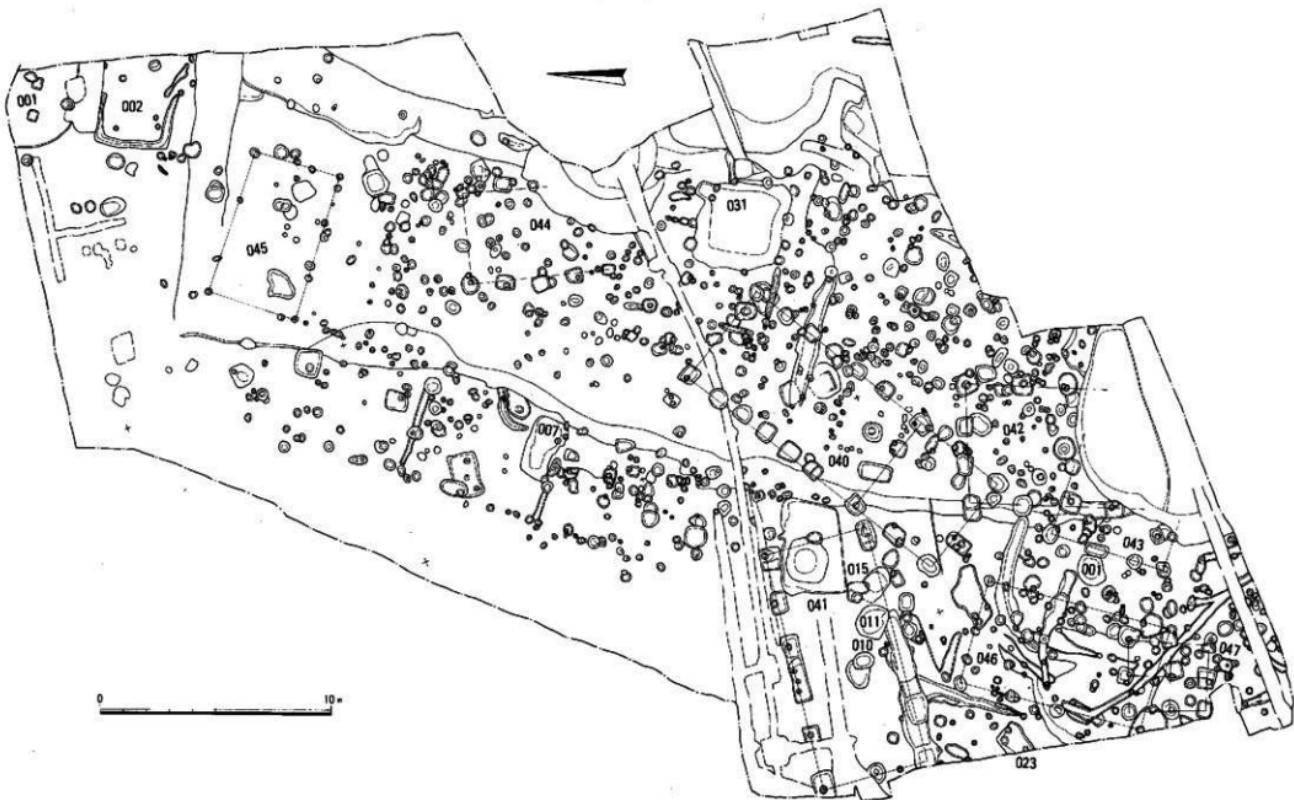
D区遺構配置図 (1/200)

F区遺構配置図 (1/200)

G区遺構配置図 (1/200)

H区遺構配置図 (1/200)

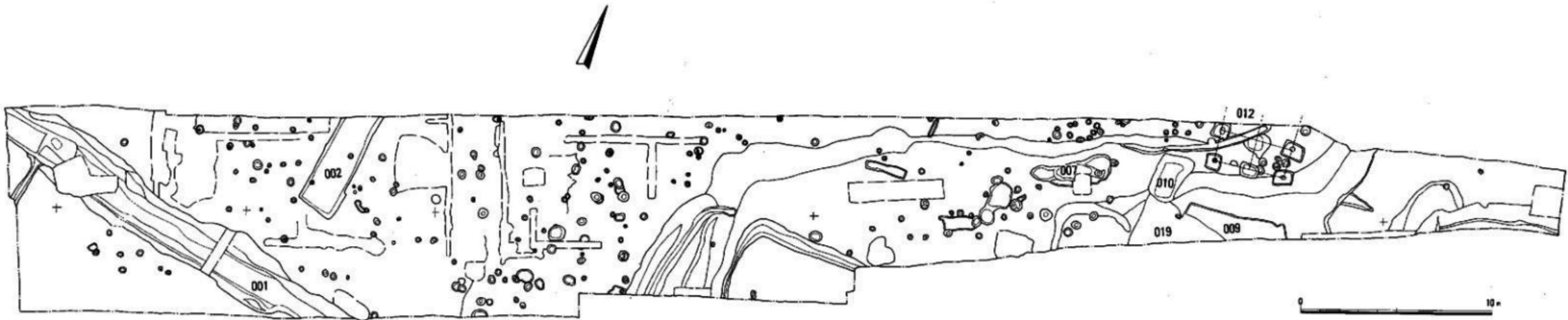
I区遺構配置図 (1/200)



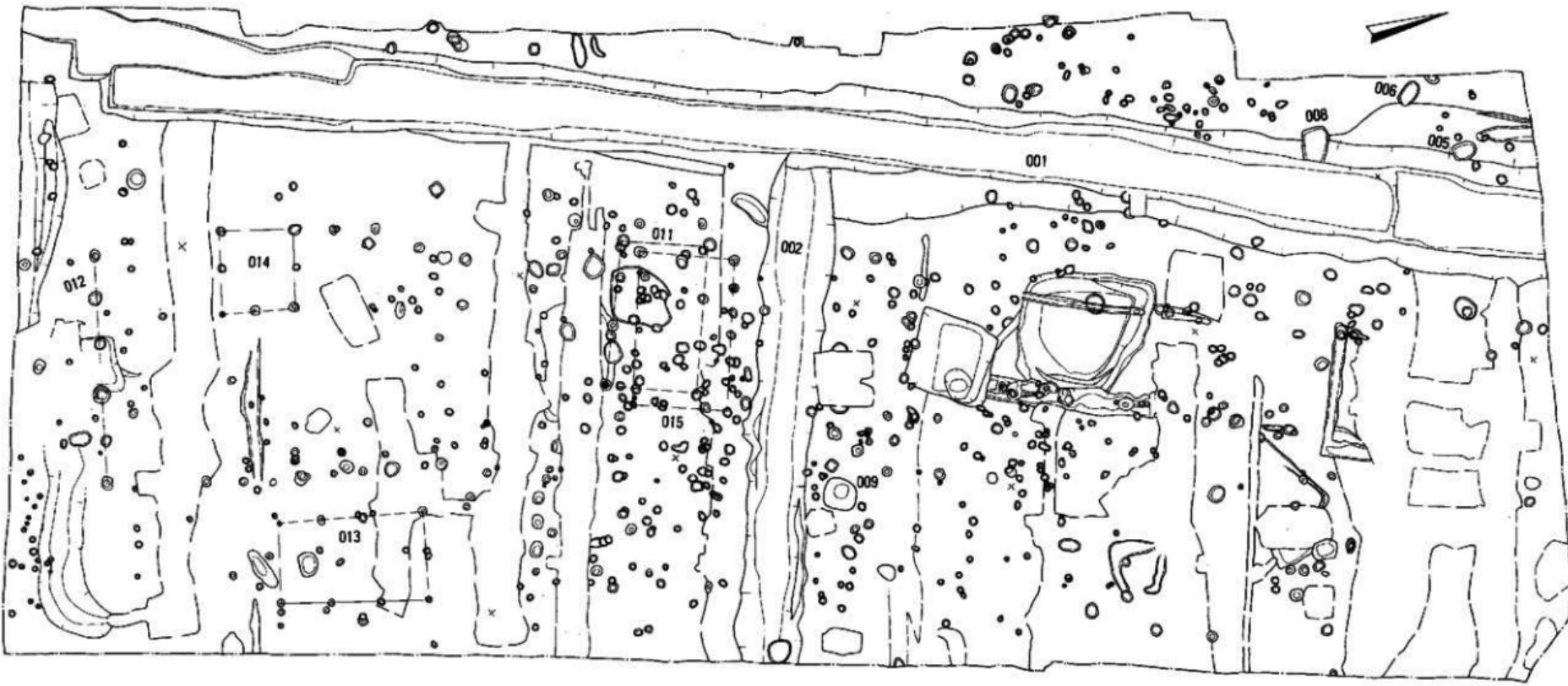
A + B 区造構配置図 (1/200)



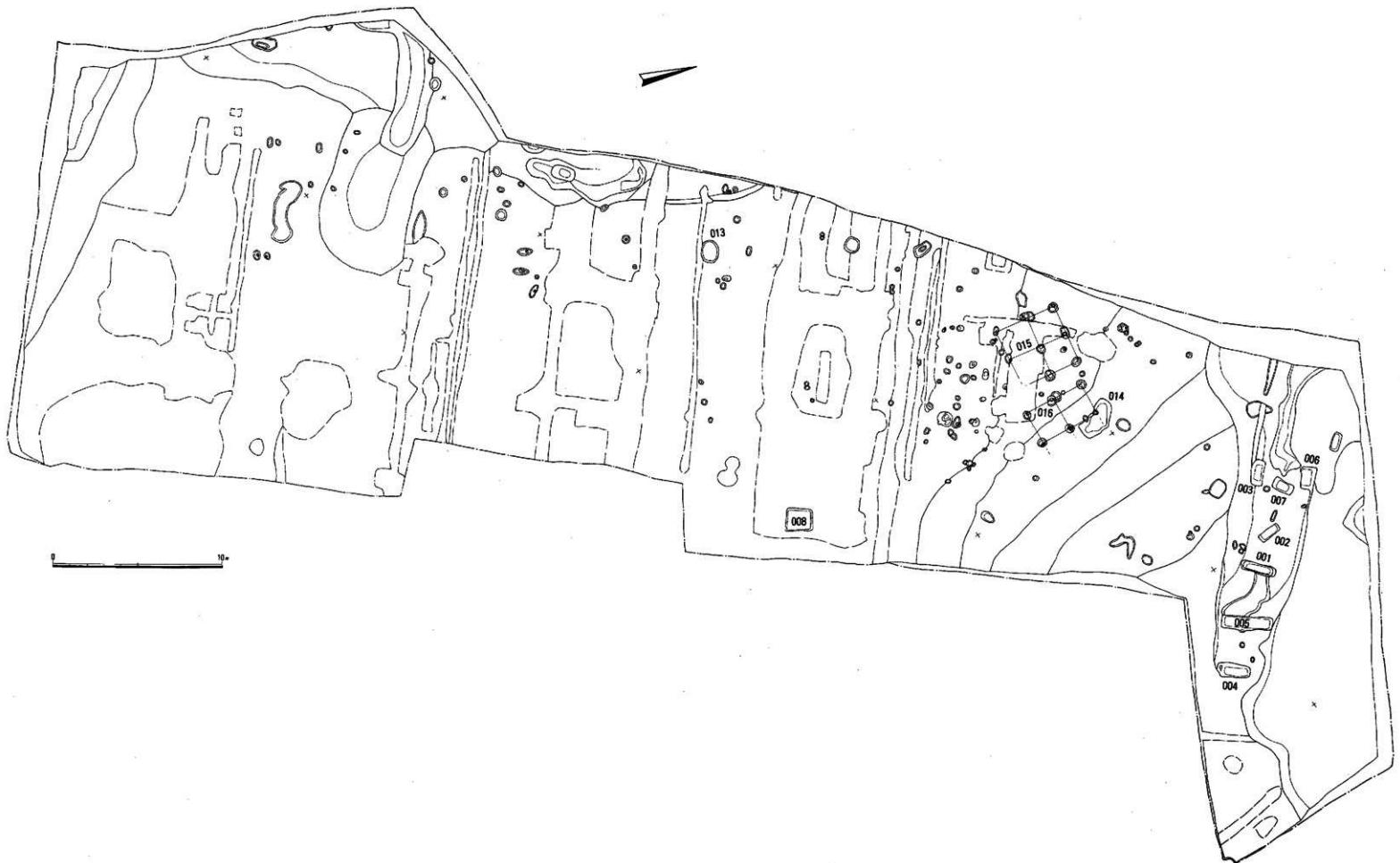
C区造構配図 (1/200)



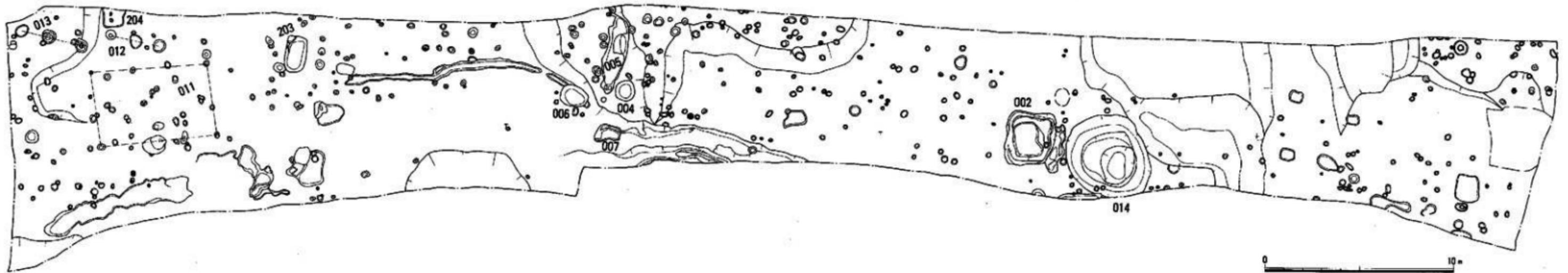
D区造構配置図 (1/200)



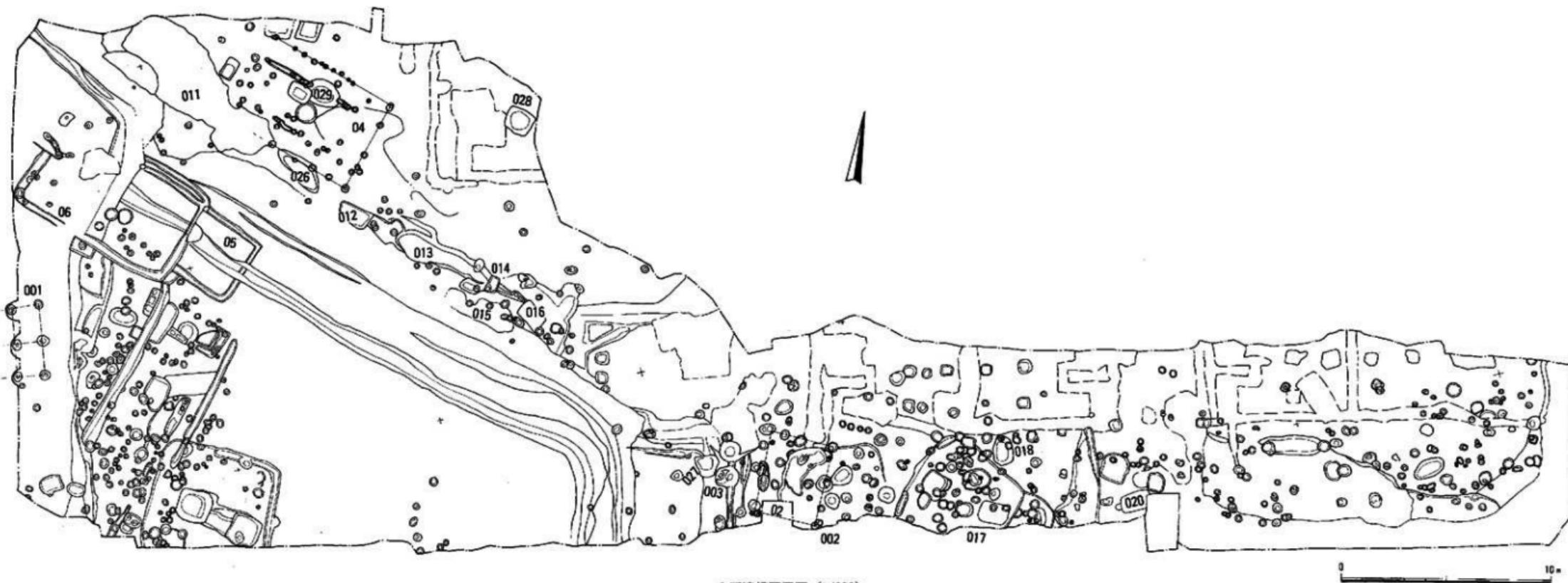
F区遺構配置図 (1/200)



G区建構配置図 (1/200)



H区造構配置図 (1/200)



I区造構配置図 (1/200)

0 10m